松山市文化財調査報告書 133

樽味四反地遺跡

－14次・16次調査－

平成18年度国庫補助市内遺跡発掘調査報告書 1

2009

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

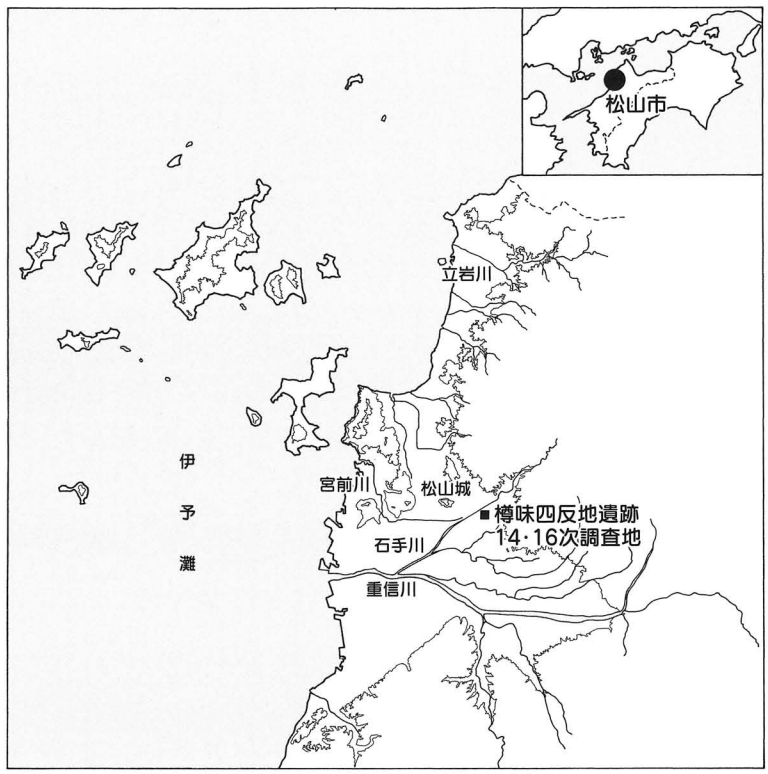
埋蔵文化財センター

樽味四反地遺跡

たるみしたんじ

－14次・16次調査－

平成18年度国庫補助市内遺跡発掘調査報告書 1



2009

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

序

樽味四反地遺跡は松山平野の中心部を南西に流れる石手川中流域左岸に位置し、西日本有数の規模を誇る弥生時代後期末から古墳時代初頭の大型建物址３棟が発見された遺跡です。これまでの埋蔵文化財発掘調査によって、縄文時代から中世にかけての集落の様相がしだいに明らかになってきました。しかし、大型建物址については隔絶した規模を有する注目すべき遺構でありながら、その範囲や性格を決定する周辺データが得られていませんでした。

今回報告する樽味四反地遺跡14次・16次調査は、重要遺跡確認調査として、大型建物址を中心とする遺跡の範囲確定と、その前後の時期の集落の分布状況の確認をめざして実施したものです。残念ながら大型建物址に関連する遺構は検出できませんでしたが、古墳時代中期初頭から後期にかけての集落経営の様相を示す住居の重複や建て替えの痕や住居廃絶に伴う祭祀行為に使用されたと思われる土器や装飾品が発見されています。また古代遺構として、Ｌ字状に折れ曲がる２本の溝を検出しており、古代集落の様相解明の貴重な手がかりとなりました。

しかし、大型建物址に関しては、類例のない特異な様相をもった存在と考えざるを得なくなりました。このことは大きな前進でもあります。今後は問題を整理し、さらなる調査を手がけてまいります。

本書が、重要遺跡確認調査の一環として、多くの方々と問題を共有しながら謎解きに向かう原動力になることを祈っております。

最後に、発掘調査および報告書刊行に、ご協力いただきました地権者ならびに周辺の住民の方々、関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成21年１月31日

松山市教育長　　山　内　　泰

例　言

1．本書は松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団が国庫補助事業として、平成18年度に実施した松山市樽味地区における埋蔵文化財の発掘調査報告書である。なお、本報告書は平成20年度の国庫補助事業として刊行したものである。

2．本文中では遺構名を略号化し、竪穴住居：ＳＢ、掘立柱建物：掘立、溝：ＳＤ、自然流路：ＳＲ、土坑：ＳＫ、柱穴・小穴：ＳＰ、性格不明遺構：ＳＸで記述した。

3．本書で使用した標高数値はすべて海抜標高を示し、方位は国土座標を基準とした真北である。

4．基本土層や遺構埋土の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(1998) に準拠した。

5．屋外調査での写真は調査担当者と大西朋子が、遺物写真と図版作成は大西が担当した。

6．遺構の実測は宮内慎一、水本完児、遺物の復元及び実測・製図は宮内の指示のもとに、山下満佐子、平岡直美、西本三枝、木西嘉子、森田利恵、鈴鹿八恵子、岡本邦栄がおこなった。

7．挿図の縮尺は縮分値をスケール下に記した。遺物実測図は原則として、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器は１／４、石器、金属製品は１／２、玉類は１／１とした。

8．調査では下條信行（元愛媛大学)、田﨑博之（愛媛大学)、前園実知雄（奈良芸術短期大学)、長井数秋（日本考古学協会会員)、名本二六雄（日本考古学協会会員）の諸先生方にご指導、ご教示を頂いた。記して感謝申し上げます。

9．屋外調査における国土座標測量は、以下の２社に業務を委託した（国際航業株式会社、セントラルエンジニアリング株式会社)。

10．本書の執筆は宮内、水本が分担し、編集は宮内が担当し山下、平岡の協力を得た。浄書は宮内の指示のもと平岡が担当した。

11．本書に掲載した記録類や遺物は、松山市立埋蔵文化財センターにおいて保管されている。

本　文　目　次

第１章　はじめに ……〔水本〕…… 1

１．調査に至る経緯　２．調査・整理の経緯　３．刊行組織

第２章　遺跡の立地と歴史的環境 ……〔宮内〕…… 2

１．立　地　２．環　境

第３章　樽味四反地遺跡14次調査 ……〔水本〕…… 7

１．調査の経緯
（１）調査に至る経緯　（２）調査の経緯　（３）調査組織
２．層　位
（１）基本層位　（２）検出遺構・遺物
３．遺構と遺物
（１）弥生時代の遺構と遺物
（２）古墳時代から古代の遺構と遺物
（３）その他の遺構と遺物
４．小　結

第４章　樽味四反地遺跡16次調査 ……〔宮内〕…… 25

１．調査の経緯
（１）調査に至る経緯　（２）調査の経緯　（３）調査組織
２．層　位
（１）基本層位　（２）検出遺構・遺物
３．遺構と遺物
（１）弥生時代の遺構と遺物
（２）古墳時代の遺構と遺物
（３）古代から中世の遺構と遺物
（４）その他の遺構と遺物
４．小　結

第５章　調査の成果と課題……〔宮内〕…… 83

挿　図　目　次

第２章　遺跡の立地と歴史的環境
第 1 図　松山平野の地形概要図（縮尺１／200,000）…… 3
第 2 図　周辺主要遺跡分布図（縮尺１／25,000）…… 4

第３章　樽味四反地遺跡14次調査
第 3 図　調査地測量図（縮尺１／300）…… 8
第 4 図　調査区北壁・西壁土層図（縮尺１／30）…… 9
第 5 図　調査区南壁・東壁土層図（縮尺１／30）…… 11
第 6 図　遺構配置図（縮尺１／100）…… 13
第 7 図　ＳＫ１測量図・出土遺物実測図（縮尺１／30・１／４）…… 14
第 8 図　ＳＫ２測量図（縮尺１／30）…… 15
第 9 図　ＳＫ３測量図（縮尺１／30）…… 16
第 10 図　ＳＤ１・２測量図（縮尺１／80）…… 17
第 11 図　ＳＤ１出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 18
第 12 図　ＳＤ３測量図（縮尺１／30）…… 19
第 13 図　柱穴・包含層・地点不明出土遺物実測図(縮尺１／４）…… 21

第４章　樽味四反地遺跡16次調査
第 14 図　調査地位置図（縮尺１／500）…… 27
第 15 図　遺構配置図（縮尺１／150）…… 28
第 16 図　東壁土層図（縮尺１／30）…… 29
第 17 図　西壁土層図（縮尺１／30）…… 31
第 18 図　北壁・南壁土層図（縮尺１／30）…… 33
第 19 図　ＳＢ４測量図（縮尺１／80）…… 35
第 20 図　ＳＫ１測量図（縮尺１／60）…… 36
第 21 図　ＳＫ１出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 37
第 22 図　ＳＢ１測量図（縮尺１／80）…… 38
第 23 図　ＳＢ１遺物出土状況図（縮尺１／80）…… 39
第 24 図　ＳＢ１出土遺物実測図（１）（縮尺１／４）…… 40
第 25 図　ＳＢ１出土遺物実測図（２）（縮尺１／４・１／２・１／１）… 41
第 26 図　ＳＢ２測量図（縮尺１／80）…… 43
第 27 図　ＳＢ２出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 44
第 28 図　ＳＢ11・12測量図（縮尺１／80）…… 45
第 29 図　ＳＢ11カマド測量図（縮尺１／30）…… 46
第 30 図　ＳＢ11・12出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 47
第 31 図　ＳＢ10測量図（縮尺１／80）…… 48

第 32 図　ＳＢ10カマド測量図（縮尺１／30）…… 49
第 33 図　ＳＢ10出土遺物実測図（縮尺１／４・１／１）…… 50
第 34 図　ＳＢ５測量図（縮尺１／80）…… 51
第 35 図　ＳＢ５カマド測量図（縮尺１／30）…… 52
第 36 図　ＳＢ５出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 53
第 37 図　ＳＢ３測量図・出土遺物実測図（縮尺１／80・１／４）…… 55
第 38 図　ＳＢ８・９測量図（縮尺１／80）…… 56
第 39 図　ＳＢ８カマド測量図（縮尺１／30）…… 57
第 40 図　ＳＢ８出土遺物実測図（縮尺１／４・１／２）…… 58
第 41 図　ＳＢ６・７測量図（縮尺１／80）…… 59
第 42 図　掘立１測量図・出土遺物実測図（縮尺１／80・１／４）…… 61
第 43 図　掘立２測量図・出土遺物実測図（縮尺１／80・１／４）…… 62
第 44 図　掘立４測量図（縮尺１／80）…… 63
第 45 図　掘立５測量図（縮尺１／80）…… 64
第 46 図　ＳＸ１出土遺物実測図（縮尺１／４・１／１）…… 65
第 47 図　掘立３測量図・出土遺物実測図（縮尺１／80・１／４）…… 67
第 48 図　掘立６測量図（縮尺１／80）
第 49 図　柱穴出土遺物実測図（縮尺１／４・１／２・１／１）…… 68
第 50 図　第Ⅴ層出土遺物実測図（縮尺１／４・１／２・１／１）…… 69
第 51 図　地点不明出土遺物実測図（１）（縮尺１／４）…… 70
第 52 図　地点不明出土遺物実測図（２）（縮尺１／２）…… 71

表　目　次

第３章　樽味四反地遺跡14次調査
表 1　ＳＫ１出土遺物観察表（土製品）…… 23
表 2　ＳＤ１出土遺物観察表（土製品）
表 3　ＳＤ１出土遺物観察表（石製品）
表 4　柱穴出土遺物観察表（土製品）
表 5　包含層出土遺物観察表（土製品）…… 24
表 6　地点不明出土遺物観察表（土製品）
表 7　地点不明出土遺物観察表（石製品）

第４章　樽味四反地遺跡16次調査
表 8　ＳＫ１出土遺物観察表（土製品）…… 74
表 9　ＳＢ１出土遺物観察表（土製品）
表 10　ＳＢ１出土遺物観察表（石製品）…… 75

表 11　ＳＢ１出土遺物観察表（金属製品）…… 76
表 12　ＳＢ１出土遺物観察表（玉類）
表 13　ＳＢ２出土遺物観察表（土製品）
表 14　ＳＢ11出土遺物観察表（土製品）
表 15　ＳＢ12出土遺物観察表（土製品）…… 77
表 16　ＳＢ10出土遺物観察表（土製品）
表 17　ＳＢ10出土遺物観察表（金属製品）
表 18　ＳＢ10出土遺物観察表（玉類）
表 19　ＳＢ５出土遺物観察表（土製品）…… 78
表 20　ＳＢ３出土遺物観察表（土製品）…… 79
表 21　ＳＢ８出土遺物観察表（土製品）
表 22　ＳＢ８出土遺物観察表（石製品）
表 23　掘立１出土遺物観察表（土製品）…… 80
表 24　掘立２出土遺物観察表（土製品）
表 25　ＳＸ１出土遺物観察表（土製品）
表 26　ＳＸ１出土遺物観察表（玉類）…… 81
表 27　掘立３出土遺物観察表（土製品）
表 28　柱穴出土遺物観察表（土製品）
表 29　柱穴出土遺物観察表（金属製品）
表 30　柱穴出土遺物観察表（玉類）
表 31　第Ⅴ層出土遺物観察表（土製品）
表 32　第Ⅴ層出土遺物観察表（石製品）…… 82
表 33　第Ⅴ層出土遺物観察表（金属製品）
表 34　第Ⅴ層出土遺物観察表（玉類）
表 35　地点不明出土遺物観察表（土製品）
表 36　地点不明出土遺物観察表（石製品）

写真図版目次

第３章　樽味四反地遺跡14次調査
図版１　１．調査前全景（西より）
　　２．北壁土層（南東より）
図版２　１．遺構検出状況（東より）
　　２．完掘状況（東より）
図版３　１．ＳＫ１検出状況（北より）
　　２．ＳＤ２遺物出土状況①（北東より）

図版４　１．ＳＤ２遺物出土状況②（南東より）
　　２．ＳＤ１・２完掘状況（西より）
図版５　１．ＳＤ１出土遺物
　　２．出土遺物（ＳＰ４、第Ⅲ層、地点不明）

第４章　樽味四反地遺跡16次調査
図版６　１．調査地全景（北東より）
　　２．西壁土層（南東より）
図版７　１．北半部遺構検出状況（南より）
　　２．南半部遺構検出状況（北より）
図版８　１．北半部完掘状況（北東より）
　　２．南半部完掘状況（北より）
図版９　１．ＳＢ４検出状況（北より）
　　２．ＳＫ１遺物出土状況（南東より）
図版10　１．ＳＫ１完掘状況（南より）
　　２．ＳＢ１・２検出状況（東より）
図版11　１．ＳＢ１遺物出土状況①（北より）
　　２．ＳＢ１遺物出土状況②（南より）
図版12　１．ＳＢ11・12検出状況（西より）
　　２．ＳＢ11カマド検出状況（東より）
図版13　１．ＳＢ10検出状況（南より）
　　２．ＳＢ10カマド検出状況（西より）
図版14　１．ＳＢ５検出状況（南より）
　　２．ＳＢ５カマド遺物出土状況（南東より）
図版15　１．ＳＢ５カマド検出状況（南より）
　　２．ＳＢ６・７検出状況（北より）
図版16　１．ＳＢ８・９検出状況（北東より）
　　２．掘立５検出状況（北より）
図版17　１．作業風景（南より）
　　２．現地説明会（北より）
図版18　１．出土遺物（ＳＫ１、ＳＢ１①）
図版19　１．出土遺物（ＳＢ１②、ＳＢ２）
図版20　１．出土遺物（ＳＢ11、ＳＢ12、ＳＢ10）
図版21　１．出土遺物（ＳＢ５、ＳＢ８・９、ＳＸ１、柱穴）
図版22　１．出土遺物（第Ⅴ層、地点不明）

第1章　はじめに

1．調査に至る経緯

平成18年度に、松山市樽味地区は国より重要遺跡確認地域に指定された。この結果を受け、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は委託契約を結び、樽味地区における重要遺跡確認調査を実施することになった。

まず、平成18年度は松山市樽味４丁目219番１と樽味４丁目222番１の２箇所を調査対象地とした。なお、既往の調査より前者を樽味四反地遺跡14次調査地、後者を樽味四反地遺跡16次調査地とした。とりわけ、16次調査地は平成８年度に実施した樽味四反地遺跡６次調査地（超大型建物検出遺跡）の西側に隣接した場所にあたる。

これらのことから、文化財課と埋文センターは協議をおこない、国庫補助事業として発掘調査を実施することが決定した。樽味四反地遺跡14次調査は平成18年７月、樽味四反地遺跡16次調査は11月より発掘調査を開始した。

2．調査・整理の経緯

調査　樽味四反地遺跡14次調査は、平成18年７月から２ケ月間、同16次調査は平成18年11月から平成19年３月までの５ケ月間実施した。発掘調査は埋文センターが主体となり、重機の使用による表土掘削をおこない、その後、作業員を導入し包含層の掘り下げや遺構・遺物の検出及び測量作業を実施した。なお、調査は国庫補助事業であり遺構保護のため住居や土坑、柱穴等の遺構は半截を基本としたため未掘部分がある。そのため、未掘部分については配置図や測量図では点描または「未掘」として表記している。また、調査にあたり国家座標第Ⅳ座標系にもとづく４級基準点の設置業務を測量業者に委託した。発掘調査中には、下條信行氏（元愛媛大学教授）を中心とした委員会のメンバーによる遺跡検討会を数回実施し、調査方法や遺構・遺物の分析等の指導を受けた。なお、調査終了時には一般市民対象の現地説明会を開催し、啓蒙普及活動にも努めた。

整理　発掘調査の翌年度、平成19年度には埋文センター内にて報告書作成に伴う整理作業を実施した。発掘調査と同様、埋文センターと文化財課が整理作業に伴う委託契約を結び、14次調査の整理作業は平成19年４月から平成20年３月、16次調査は平成19年７月から平成20年３月までの間に出土遺物の復元や実測、測量図の合成や作図等をおこなった。その後、平成20年度には、調査報告書刊行に伴う編集や校正作業を実施した。

3．刊行組織（平成21年１月31日現在）

松山市教育委員会		教育長	山内　泰
	事務局	局　長	石丸　修
		企画官	仙波　和典
		企画官	古鎌　靖
		企画官	岸　紀明

文化財課	課　長	家久　則雄
	主　幹	森　正経
	主　幹	森川　惠克
(財)松山市生涯学習振興財団	理事長	中村　時広
	事務局長	吉岡　一雄
埋蔵文化財センター	所長兼考古館長	丹生谷博一
	次長兼教育普及担当リーダー	折手　均
	次長兼調査担当リーダー	重松　佳久
	調査員	宮内　慎一
	調査員	水本　完児
	調査員	大西　朋子（写真担当）

第2章　遺跡の立地と歴史的環境

1．立　地（第1図）

樽味四反地遺跡14次・16次調査地が所在する松山平野は四国山地北西部に位置し、石手川や重信川などの大小河川で形成された複合扇状地性の平野である。このうち、調査地北側を流れる石手川は高縄山から西方に流れ、途中に重信川と合流する。石手川が形成した扇状地は、松山市石手付近（標高50m）を扇頂とし南西方向に広がりをみせ、その範囲は半径約4km、標高20mの地点までを含んでいる。石手川扇状地は、山麓裾の松山市正円寺や畑寺にかけての古期扇状地面と、道後、中村に広がる新期扇状地面、さらには石手川南岸東側に広がる洪積世の段丘化した低位段丘面とに区分される。このうち、調査地は石手川南岸新期扇状地面に立地している。なお、調査地が所在する扇状地面は、今から約23,000年前、姶良Tn火山灰の降下、堆積時には既に段丘化していたものと推測されている。近年の発掘調査において、樽味遺跡1次調査や樽味四反地遺跡1次調査で、2次的な堆積状況の火山灰が検出されているほか、同じ扇状地面にある東本遺跡4次調査からも同様の火山灰が確認されている。一方で、洪積世の最終氷期、約2万年～1.8万年前には、石手川は道後城北地区を通り、松山市堀江地区へ流化していたものと推定されており、石手川南岸にある樽味地区では洪積世最末期から完新世にかけて石手川北岸に比べ、安定した地形を形成していたものと考えられている。

2．環　境（第2図）

樽味四反地遺跡14次・16次調査地が所在する松山市樽味地区では、道路建設工事や民間の開発行為等により近年発掘調査が増加している。ここでは、樽味地区をはじめ、前述の新期扇状地面上に展開する遺跡を中心に遺跡の状況を概観する。

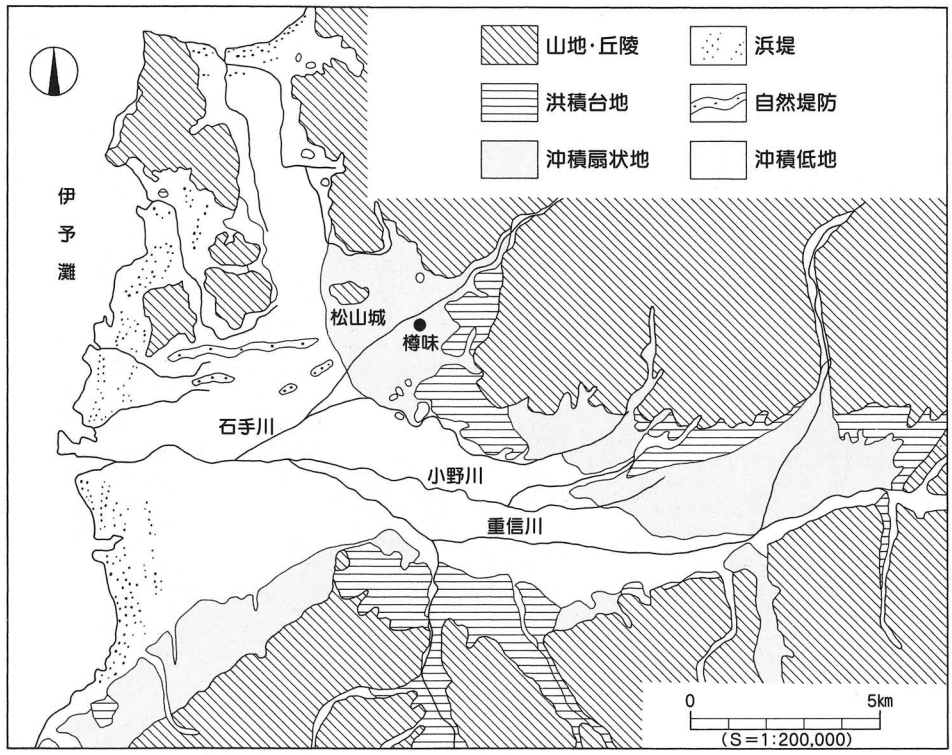
旧石器時代　当該期の遺構は確認されておらず、遺物は表面採集や後世の遺構への流入資料である。経石山古墳からはスクレーパーや楔形石器、桑原西稲葉遺跡2次調査では角錐状石器、さらには樽味四反地遺跡6次調査や東本遺跡4次調査よりナイフ形石器が出土している。このほか、姶良Tn火山灰（AT火山灰）の確認された事例が、近年の発掘調査で報告されており、樽味遺跡1次調査や樽味四反地遺跡1次調査、枝松遺跡3次調査では2次的な堆積状況、東本遺跡4次調査では1次的堆積状況の

テフラが確認されている。

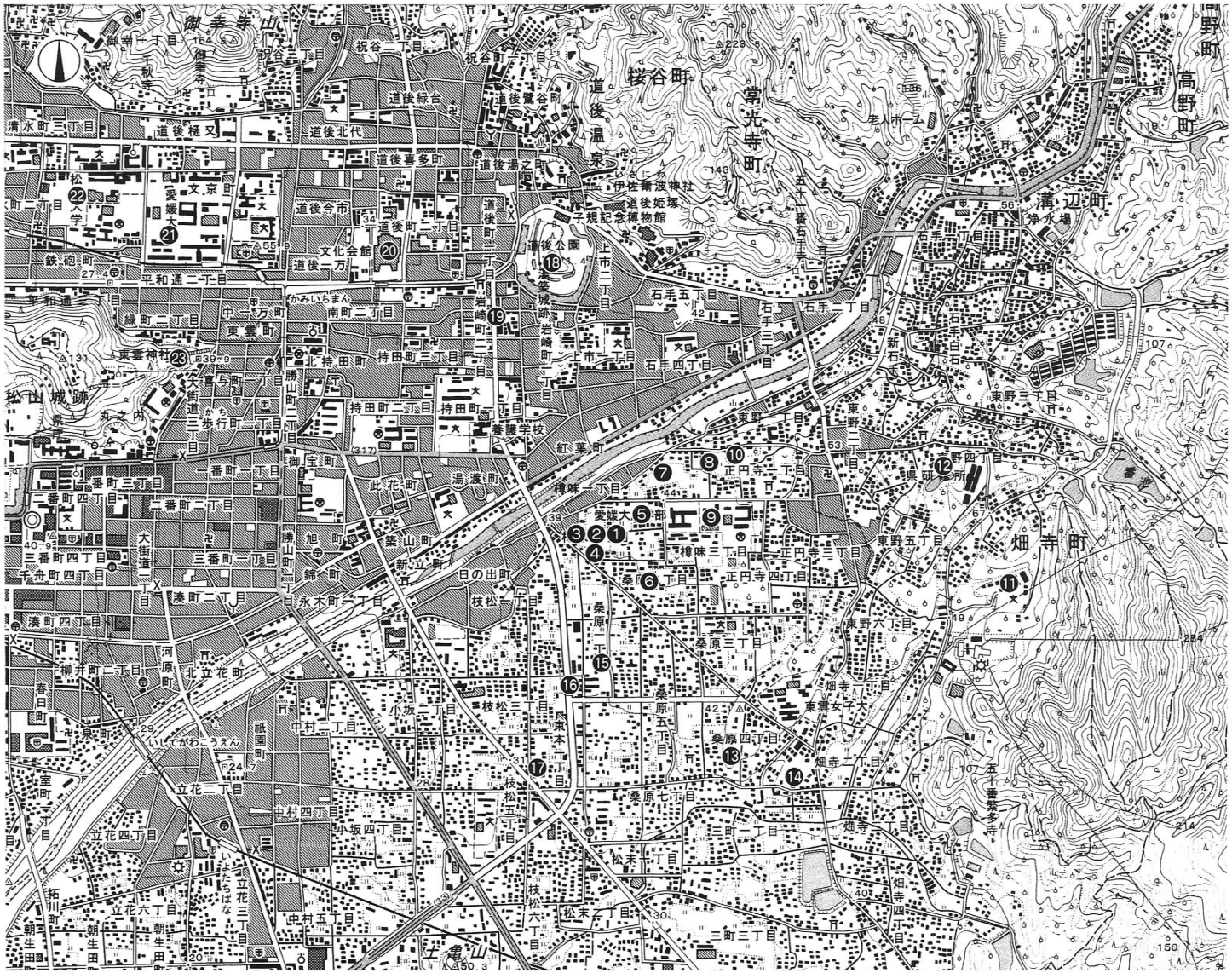
縄文時代　当該期の遺構は稀少であるが、近年の調査で縄文時代晩期とされる遺構が検出されている。松山市道「樽味溝辺線」関連の調査において、東野森ノ木遺跡２次・４次調査と樽味立添遺跡３次調査では晩期の土器を含む貯蔵穴が数基検出され、樽味地区における集落の出現期を考えるうえで貴重な事例となっている。このほか、束本遺跡４次調査では、今から約6,300万年前に降下したとされる鬼界アカホヤ火山灰（K－Ah）が確認され、火山灰の下位層からは縄文時代早期の槍先形石器やスクレーパーが出土している。

弥生時代　弥生時代になると、対象となる遺跡数が増加する。前期では、樽味四反地遺跡５次調査において竪穴住居や土坑が検出され、さらに樽味立添遺跡３次調査や樽味四反地遺跡７次調査では前期末の溝が確認されている。中期では前半の資料はなく、後半の資料が大半を占める。樽味高木遺跡２次調査や樽味四反地遺跡５次調査では、円形及び方形竪穴住居が検出され、樽味高木遺跡３次調査からは土坑が検出されており、当該期の集落構造や住居構造を知る手がかりとなっている。

後期では、後葉から終末期における竪穴住居の検出事例が増加すると共に、他地域との交流が知れる貴重な資料が数多く確認されている。後期後葉では、樽味立添遺跡や樽味四反地遺跡、樽味高木遺跡のほか、扇状地南側に所在する桑原高井遺跡１次調査や束本遺跡２・４・５次調査、枝松遺跡３・５次調査において竪穴住居が多数確認されている。特に、束本遺跡で検出した竪穴住居のうち、円形を呈する住居は直径８ｍを超える大型住居で、住居内からは鉄鏃や鉄斧などの鉄製品が多く出土することから、鍛冶関連の遺構である可能性が示唆されている。



第1図　松山平野の地形概要図



第2図　周辺主要遺跡分布図(S＝1:25,000)

このほか、東本遺跡４次調査検出のＳＢ203号住居からは破鏡、包含層資料ではあるが樽味立添遺跡１次調査からは中国銭である『貨泉』、樽味高木遺跡３次調査では準構造船が描かれた絵画土器片などが出土しており、他地域との交流を知る貴重な考古資料が注目される。

古墳時代　古墳時代初頭では、３棟の超大型建物が注目されている。平成８年度に実施した樽味四反地遺跡６次調査において、床面積約130㎡を測る総柱構造の床束式建物が発見された。その７年後、平成15年度には樽味四反地遺跡8次調査にて床面積160㎡前後を測る３棟のうち最大規模の建物が発見された。さらに、平成17年度には樽味四反地遺跡13次調査において、床面積100㎡前後を測る大型建物が発見された。これら３棟の建物は樽味地区において、当該期の首長層などに関係する特殊建物ではないかと考えられている。なお、前期の集落遺構は樽味地区のみならず、松山平野内においても検出事例が非常に少なく、集落様相は不明な点が多い。

中期から後期では、遺跡数が飛躍的に増大する。中期では樽味高木遺跡１次調査をはじめ、樽味四反地遺跡や樽味立添遺跡など多くの遺跡で竪穴住居や土坑が検出され、集落経営がさかんに営まれていたことがわかる。なお、樽味高木遺跡８・９・11次調査では竪穴住居内から渡来系遺物が数多く出土している。後期では、樽味四反地遺跡７・８次調査や樽味高木遺跡７・９次調査などから竪穴住居や溝が確認されている。以上のことから、古墳時代中期から後期を通して集落が継続的に営まれていたものと推測される。一方、丘陵部や古期扇状地面上には中期から後期の古墳が数多く存在する。丘陵上では、中期後半の築造とされる畑寺竹ケ谷古墳や東野お茶屋台古墳があり、古期扇状地面上には中期から後期の前方後円墳である経石山古墳や三島神社古墳が造営されている。

古　代　樽味四反地遺跡１・５次調査では自然流路が検出され、５次調査からは円面硯や奈良三彩の壺が出土している。また、東野森ノ木遺跡１次調査や樽味四反地遺跡８次調査では土坑が検出されるなど、古代の集落関連遺構の検出事例が近年増加傾向にある。

中　世　樽味遺跡１・２次調査では、14～16世紀の溝や掘立柱建物が検出されている。また、東野森ノ木遺跡１次調査からは溝や掘立柱建物のほか、完形の白磁四耳壺が埋納された土坑が検出され、樽味四反地遺跡８次調査では素掘りの井戸が検出されている。これらのことから、当該期の生活関連遺構が部分的ではあるが、広く分布していることがわかる。なお、その中心は愛媛大学農学部構内あたりであると考えられている。

【文　献】

① 平井　幸弘　1989　「樽味遺跡及び樽味遺跡をとりまく地形環境」『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅰ

② 重松　佳久　1992　「石手川水系に於ける旧石器文化」『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書第26集

③ 宮本　一夫　1989　『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅰ

④ 梅木　謙一　1992　「樽味四反地遺跡」『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書第26集

⑤ 高尾　和長　1996　「東本遺跡４次調査」『東本遺跡４次調査・枝松遺跡４次調査』松山市文化財調査報告書第54集

⑥ 梅木　謙一　1992　「桑原西稲葉遺跡２次調査」松山市文化財調査報告書第26集

⑦ 宮内　慎一　1994　「樽味高木遺跡３次調査」『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書第46集

⑧ 河野　史知　2007　「東野森ノ木遺跡1･2･3･4次調査」『東野森ノ木遺跡1･2･3･4次調査地、樽味立添遺跡３次調査地、樽味高木遺跡7･8･9･11次調査地、

樽味四反地遺跡7·8·9·11次調査地、枝松遺跡６次調査地』
松山市文化財調査報告書第117集
⑨ 高尾 和長 2007 「樽味立添遺跡３次調査」松山市文化財調査報告書第117集
⑩ 河野 史知 1994 「樽味高木遺跡２次調査」松山市文化財調査報告書第46集
⑪ 高尾 和長 2002 『樽味四反地遺跡５次調査』松山市文化財調査報告書第87集
⑫ 梅木 謙一 1996 「桑原高井遺跡１次調査」松山市文化財調査報告書第54集
⑬ 梅木 謙一 1996 「束本遺跡２次調査」松山市文化財調査報告書第54集
⑭ 河野 史知 2001 「束本遺跡５次調査」松山市埋蔵文化財調査年報12
⑮ 相原 浩二 1995 「枝松遺跡５次調査」松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ
⑯ 宮内 慎一 1994 「樽味四反地遺跡４次調査」松山市文化財調査報告書第46集
⑰ 橋本 雄一 2005 『樽味四反地遺跡Ⅱ－６次調査－』松山市文化財調査報告書第106集
⑱ 加島 次郎 2007 「樽味四反地遺跡7·8次調査」松山市文化財調査報告書第117集
⑲ 相原 秀仁 2006 「樽味四反地遺跡13次調査」松山市埋蔵文化財調査年報18
⑳ 高尾 和長 2007 「樽味高木遺跡7·8·11次調査」松山市文化財調査報告書第117集
㉑ 加島 次郎 2007 「樽味高木遺跡９次調査」松山市文化財調査報告書第117集
㉒ 田﨑 博之 1993 『樽味遺跡Ⅱ－樽味遺跡２次調査－』愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ

第３章　樽味四反地遺跡14次調査

１．調査の経緯

（１）調査に至る経緯

調査地が所在する松山市樽味地区では近年、宅地開発や道路建設工事等により発掘調査が盛んにおこなわれ、縄文時代から中世に至る集落関連遺構や遺物が多数発見されている。松山市が建設した『市道樽味溝辺線』関連の発掘調査では縄文時代の土坑や弥生時代前期の溝など、樽味地区において初例となる遺構が検出されたほか、朝鮮半島系の土器が数多く出土した。また、古墳時代初頭とされる大型建物が３棟発見されるなど、松山平野において重要な地域であったことが近年の調査・研究の結果、明らかになってきた。

平成15年度には松山市教育委員会が主体となり、樽味地区重要遺跡確認調査として樽味地区内における試掘調査を実施した。このうちＢ区として実施した調査の結果、柱穴や遺物包含層を確認した。この結果を受け、平成17年度に財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）と松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）は協議を重ね、国庫補助事業として発掘調査を実施することを決定した。

発掘調査は埋文センターと文化財課が委託契約を結び、平成18年７月より開始した。

（２）調査の経緯

2006（平成18）年７月３日、調査前の準備作業として調査地内に安全対策用の杭やロープを設定し、発掘用具を搬入する。７月５日より重機（バックホー0.1㎥）の使用により、表土層の掘削を開始する。７月７日、作業員を投入し第Ⅴ層上面にて遺構検出作業をおこない、溝や土坑、柱穴等を検出する。７月10日、測量業者（国際航業株式会社）に国家座標杭の設置業務を委託し、調査地内に５ｍ四方のグリットを設定する。７月12日、遺構検出状況写真を撮影後、土坑から順に掘り下げ及び測量作業をおこなう。７月26日、検出した溝の全体像が不明であったため、調査区を西側へ約１ｍ拡張し、再度、遺構検出作業を実施する。8月25日、遺構完掘状況写真を撮影し、測量作業を終了する。８月26日、一般市民対象の現地説明会を開催し、参加者50名を得た。８月28日、重機により調査区北壁沿いに深掘トレンチを掘削し、遺構検出面下の土層堆積を確認する。８月29日、遺構保護の為、遺構内に真砂土を投入し、その後、重機により埋め戻し作業をおこなう。８月31日、発掘用具や事務所を撤去し、屋外調査を終了する。

（３）調査組織

所　在　地：松山市樽味４丁目219番１
調 査 期 間：2006（平成18）年７月３日～同年８月31日
調 査 面 積：64㎡
土地所有者：浅川　光夫
調 査 目 的：樽味地区重要遺跡確認調査
調 査 担 当：松山市教育委員会文化財課主査　栗田　正芳
　　財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター調査員　水本　完児

2．層　位（第４・５図）

（１）基本層位

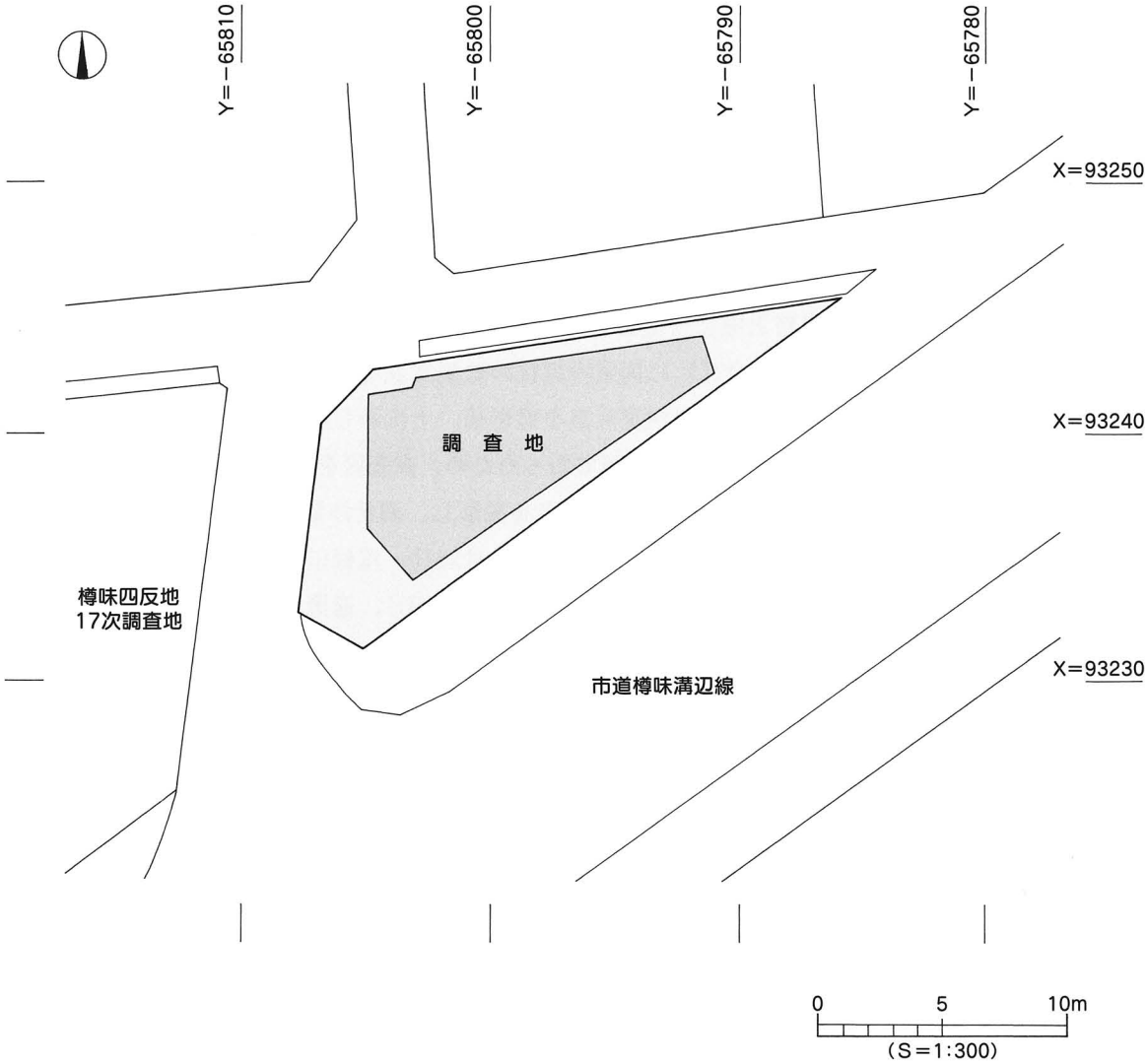
調査地は、調査以前は雑種地であった。現況では標高40m前後を測る。調査地の基本層位は、以下の７層である。なお、６・７層は調査区北壁沿いに設定した深掘トレンチにて確認した土層である。

Ⅰ層：青灰色（10BG6/1）砂質シルトで、水田耕作に伴う耕作土である。層厚10～20cm。

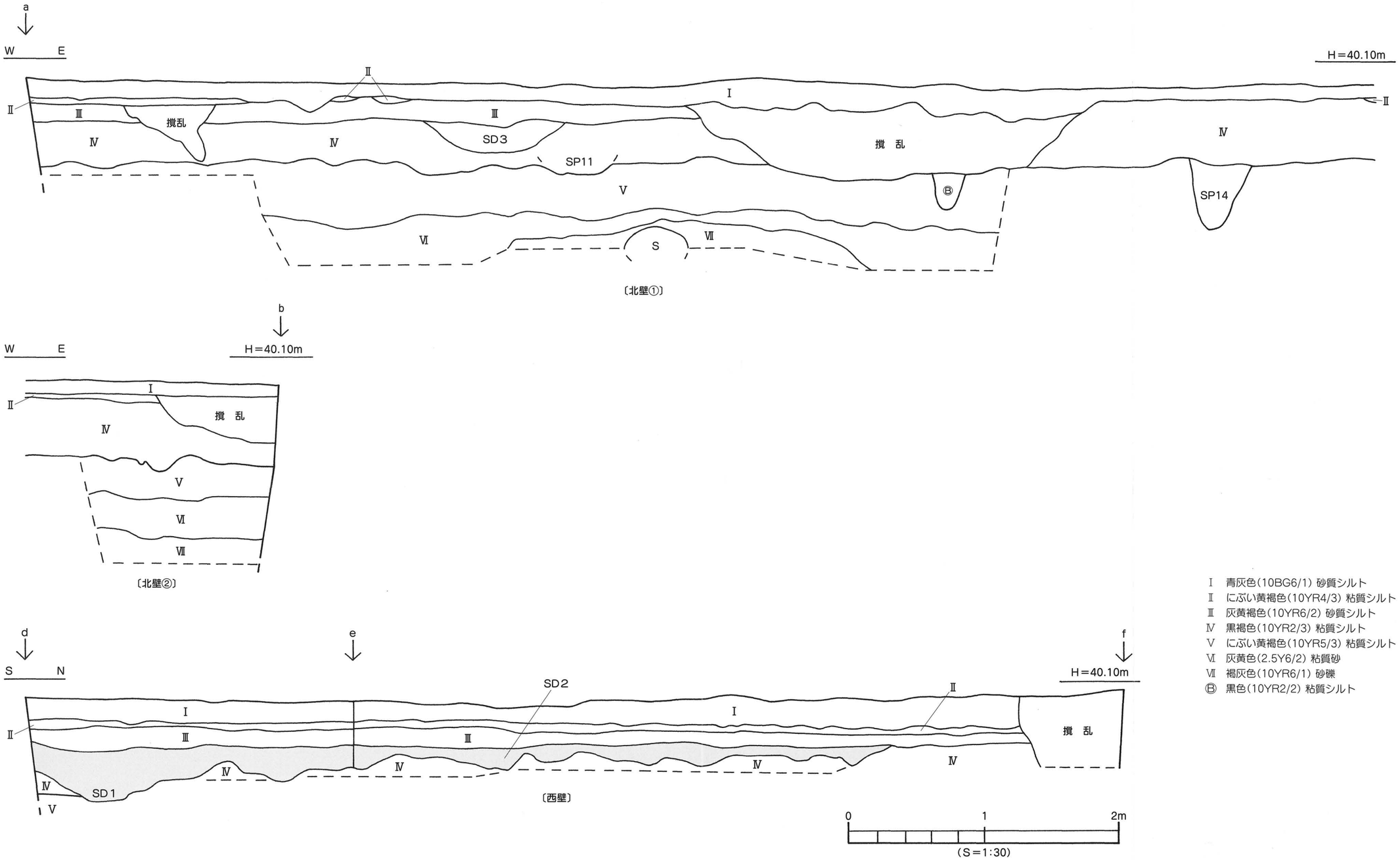
Ⅱ層：にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質シルトで、水田耕作に伴う床土である。調査区内にて部分的に見られる。層厚２～５cm。

Ⅲ層：灰黄褐色（10YR6/2）砂質シルトで、調査区ほぼ全域に見られる。層厚５～30cm。本層中からは、重機掘削時に弥生土器や土師器、須恵器が混在して出土した。

Ⅳ層：黒褐色（10YR2/3）粘質シルトで、調査区ほぼ全域に見られる。層厚10～40cm。調査壁の土層観察により、溝（ＳＤ１～３）や暗褐色粘質シルトを埋土とする遺構〔Ⓐ〕が本層上面から掘り込まれていることを確認した。本層中からは、主に古墳時代から古代に時期比定される土師器や須恵器が出土した。

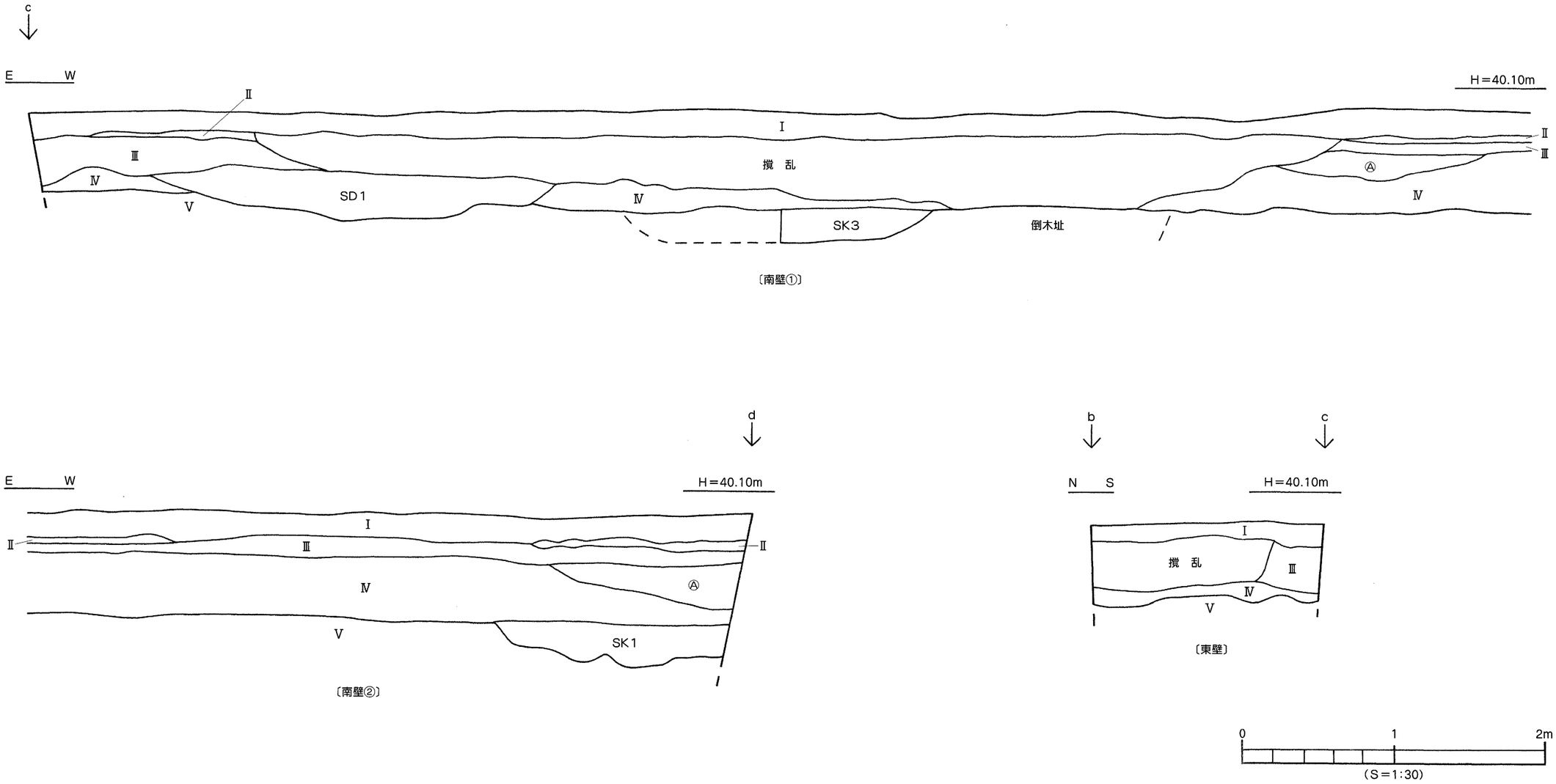


第3図　調査地測量図



Ⅰ　青灰色(10BG6/1) 砂質シルト
Ⅱ　にぶい黄褐色(10YR4/3) 粘質シルト
Ⅲ　灰黄褐色(10YR6/2) 砂質シルト
Ⅳ　黒褐色(10YR2/3) 粘質シルト
Ⅴ　にぶい黄褐色(10YR5/3) 粘質シルト
Ⅵ　灰黄色(2.5Y6/2) 粘質砂
Ⅶ　褐灰色(10YR6/1) 砂礫
Ⓑ　黒色(10YR2/2) 粘質シルト

第4図　調査区北壁・西壁土層図



Ⅰ　青灰色(10BG6/1) 砂質シルト
Ⅱ　にぶい黄褐色(10YR4/3) 粘質シルト
Ⅲ　灰黄褐色(10YR6/2) 砂質シルト
Ⅳ　黒褐色(10YR2/3) 粘質シルト
Ⅴ　にぶい黄褐色(10YR5/3) 粘質シルト
Ⓐ　暗褐色(7.5YR3/3) 粘質シルト

第5図　調査区南壁・東壁土層図

Ⅴ層：にぶい黄褐色（10YR5/3）粘質シルトで、深掘トレンチの土層観察により厚さ50cm程度の堆積をなす。本層上面は、調査における最終遺構検出面である。なお、本層上面は調査区東側から西側へ向けて緩傾斜をなし、東端では標高39.4m、西端では39.2mを測る。

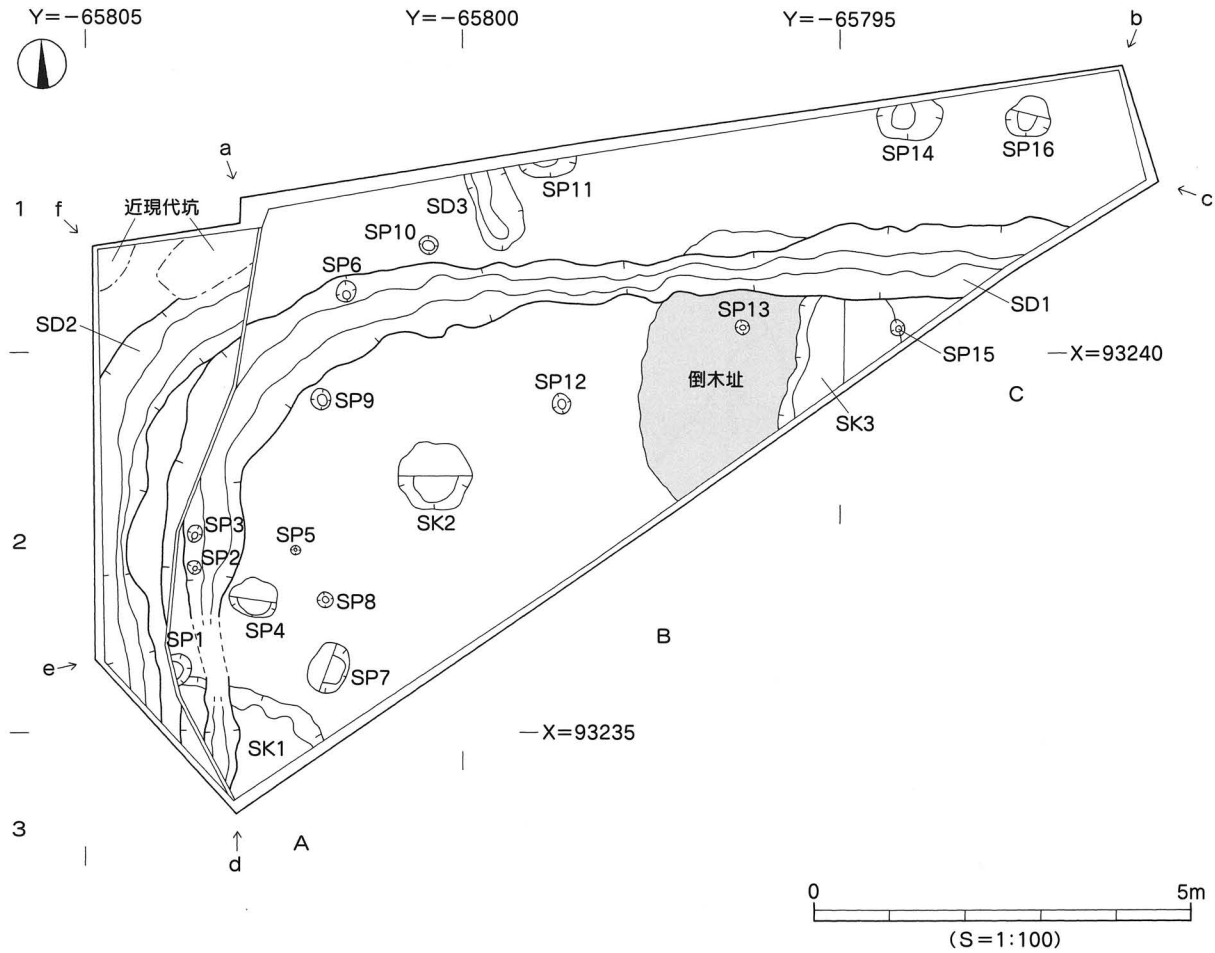
Ⅵ層：灰黄色（2.5Y6/2）を呈する粘質砂で、層厚30cm以上を測る。

Ⅶ層：褐灰色（10YR6/1）を呈する砂礫層で、径５～15cm大の円礫が混入する。

検出遺構や出土遺物から、Ⅳ層は古墳時代、Ⅲ層は中世までに堆積したものと考えられる。なお、調査にあたり調査区内を５m四方のグリットに分けた。グリットは遺構の位置表示や遺物の取り上げに利用した。

（２）検出遺構・遺物

調査で検出した遺構は、溝３条（古墳～古代）、土坑３基（弥生）、柱穴16基、倒木址１基である。遺物は遺構や包含層、及び重機掘削時に出土したもので、弥生土器（中～後期）、土師器（古墳～中世）、須恵器（古墳～古代）、輸入陶磁器、石器である。



第6図　遺構配置図

3．遺構と遺物

（1）弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、土坑３基を検出した。

ＳＫ１（第６・７図、図版３）

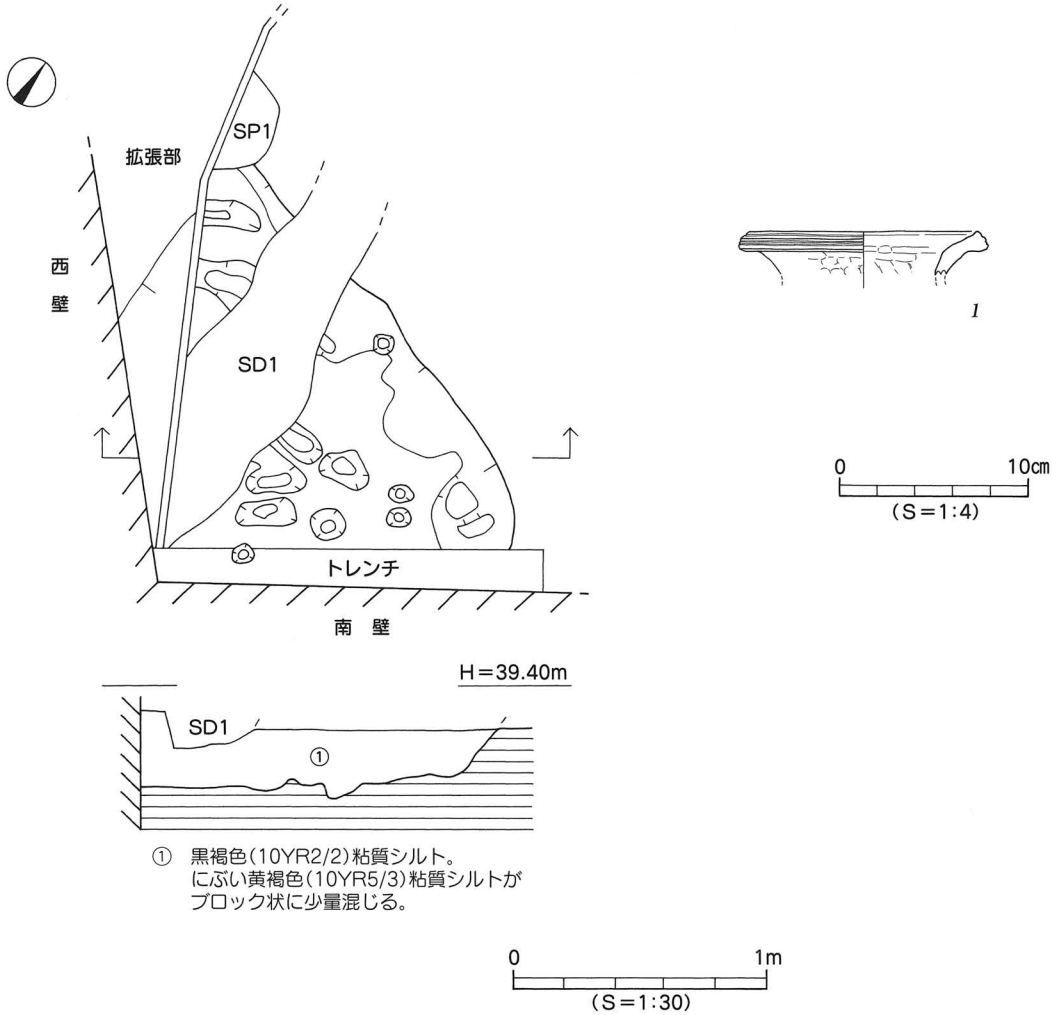
調査区南東隅Ａ２・３区に位置する。土坑中央部上面には溝ＳＤ１、北西部はＳＰ１（埋土：暗褐色粘質シルト）に切られ、南側は調査区外に続く。第Ⅴ層上面での検出であり、第Ⅳ層が覆う。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長1.40m、南北検出長1.50m、深さは検出面下25cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に少量混入）である。土坑底面にて小ピットや小溝が検出されたが、埋土はすべて土坑埋土と同様の黒褐色粘質シルトである。

遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。図化しうるものを１点掲載した。

ＳＫ１出土遺物（第７図）

１は弥生土器の壺である。口縁端部を上下方に拡張させ、口縁端面に凹線文３条を施す。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、検出層位や出土遺物から、概ね弥生時代中期後半以降とする。



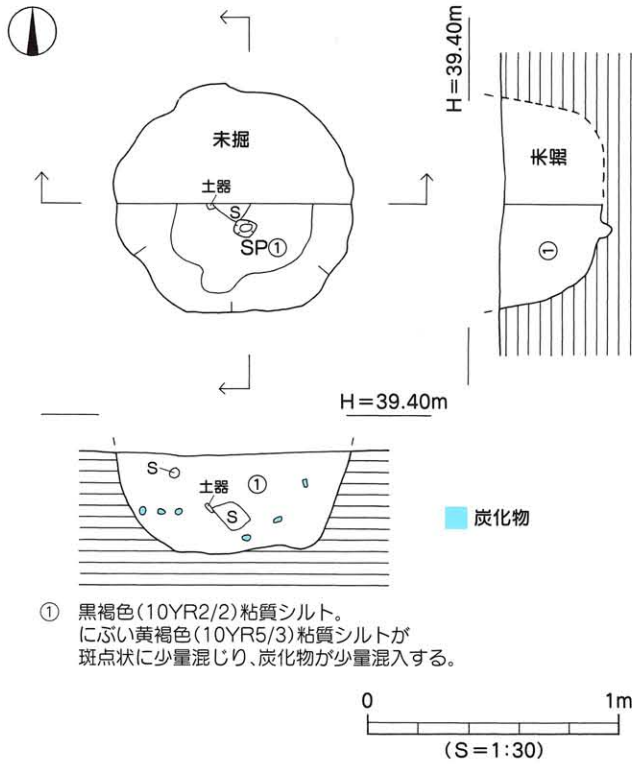
第7図　SK1 測量図・出土遺物実測図

ＳＫ２（第６・８図）

調査区中央部やや南西寄りＡ２区に位置する。第Ｖ層上面での検出であるが、土坑北半部は遺構保護の為、未掘である。平面形態は円形を呈し、規模は径0.80m、深さは検出面下38cmを測る。断面形態は丸みのある逆台形状を呈し、埋土は黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質シルトが斑点状に少量混入）である。なお、埋土中には少量の炭化物が含まれている。土坑中央部底面にて、径15cm、深さ10cm程度の小ピットを検出した。ピット埋土は、黒褐色粘質シルトである。

遺物は埋土中より弥生土器の小片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、検出層位や埋土から、概ね弥生時代の遺構とする。



第8図　SK2 測量図

ＳＫ３（第６・９図）

調査区中央部東寄りＢ１～Ｃ２区に位置する。土坑北側は溝ＳＤ１に切られ、東側はＳＰ15（埋土：暗褐色粘質シルト）に切られている。第Ｖ層上面での検出であり、第Ⅳ層が覆う。土坑東半部は遺構保護の為、未掘である。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長1.70m、南北検出長2.00m、深さは検出面下15cmを測る。断面形態は丸みのある逆台形状を呈し、埋土は黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に少量混入）である。土坑底面は起伏があり、土坑壁体及び底面は倒木址（埋土：極暗褐色粘質シルト）となる。

遺物は埋土中より弥生土器片と径５～10cm大の礫が数点出土したが、図化しうるものはない。

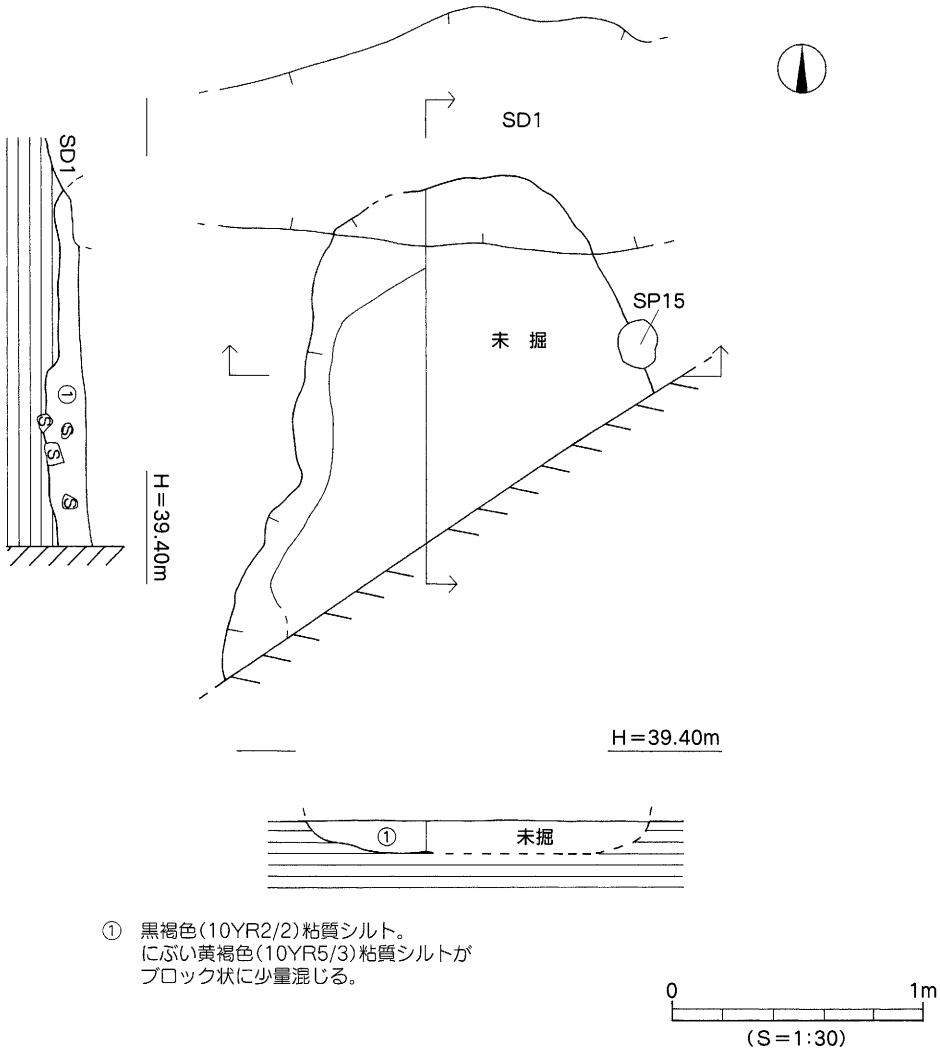
時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、検出層位や埋土等から、概ね弥生時代の遺構とする。

（２）古墳時代から古代の遺構と遺物

古墳時代から古代の遺構は、溝３条を検出した。

ＳＤ１（第６・10図、図版４）

調査区中央部を東西方向に延び、北西部で南側へ「Ｌ」字状に折れ曲がる溝である。Ａ１～Ｃ１区に位置する。溝南西部は土坑ＳＫ１、東側は土坑ＳＫ３を切り、溝東端及び南端は調査区外に続く。第Ｖ層上面での検出であるが、調査区南壁の土層観察により第Ⅳ層上面から掘り込まれていることを確認した。なお、溝上面は第Ⅲ層が覆う。規模は検出長約17m、幅30～120cm、深さは検出面下６～20cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は暗褐色粘質シルトである。溝底面は東側から南側へ

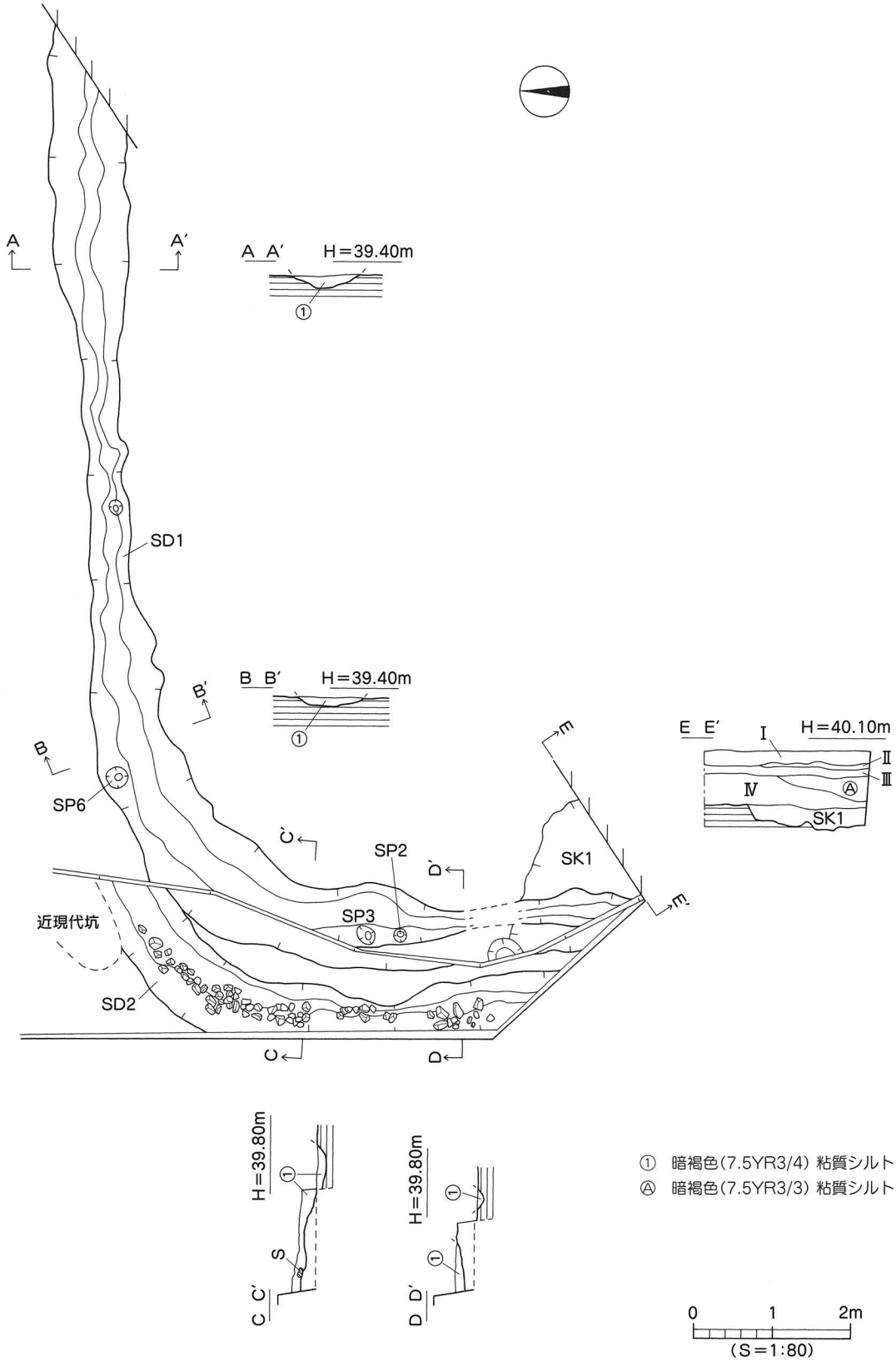


第9図　SK3 測量図

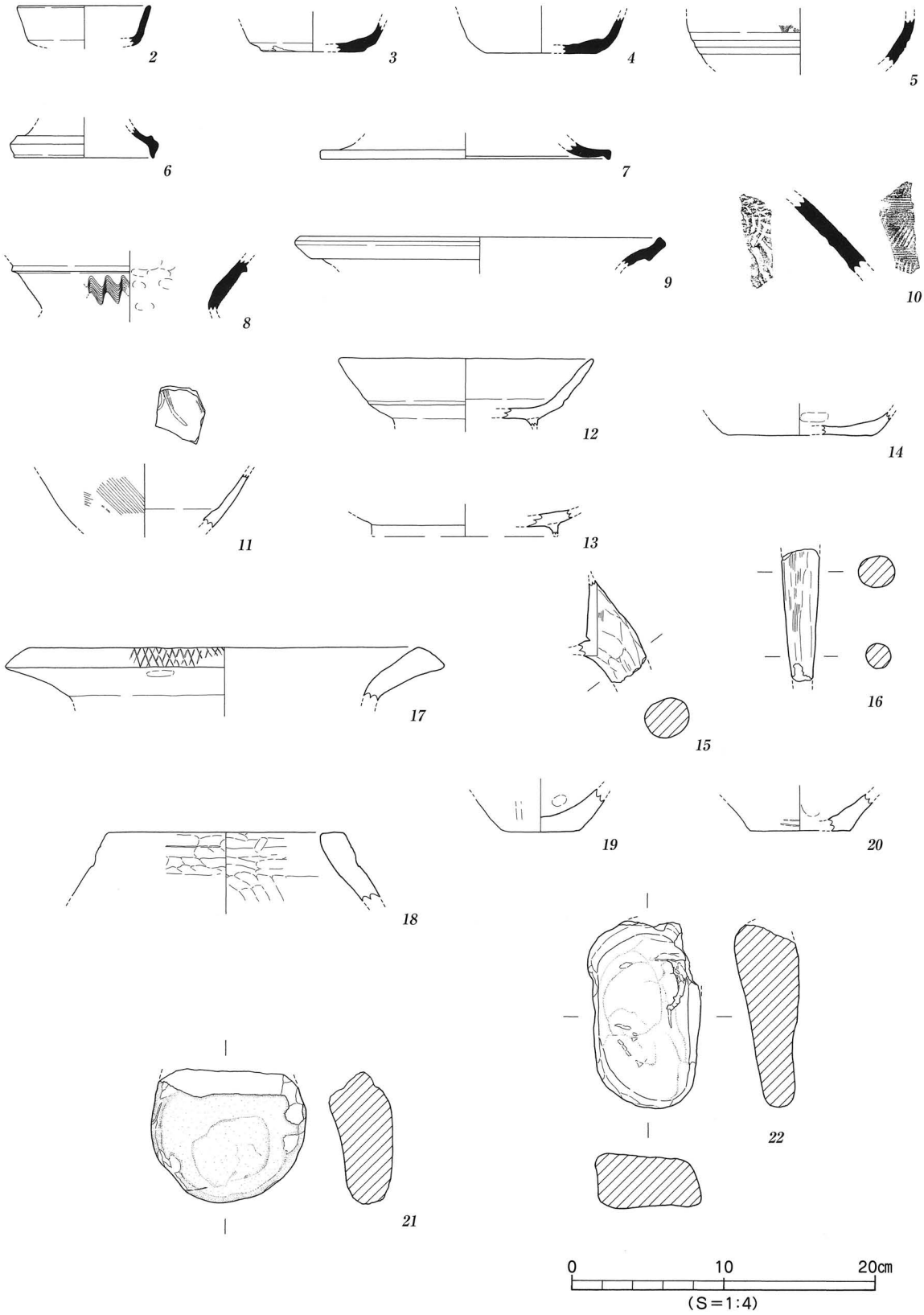
向けて傾斜をなし、比高差約15cmを測る。溝西側壁体にて3基の柱穴（ＳＰ２・３・６）を検出した。柱穴規模は径15～30cm、深さ３～10cmを測る。柱穴掘り方埋土は暗褐色粘質シルトである。溝内からは弥生土器片や土師器片、須恵器片のほか石器が混在して出土した。

ＳＤ１出土遺物（第11図、図版５）

２～４は須恵器の坏で、２の坏部下位には１条の沈線が巡る。３・４は平底で、底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。５～７は須恵器の高坏である。５は無蓋高坏の坏部で、坏部下位に波状文と凸線２条を施す。６・７は脚部片で、裾端部は下方に屈曲する。８は須恵器の壺で、頸部に凸線１条と波状文を施す。９・10は須恵器の甕である。９は口縁端部が断面長方形状を呈する。10は肩部片で外面に平行叩き、内面には円弧叩きを施す。11は龍泉窯系の青磁碗で、釉調は薄緑灰色を呈する。12・13は土師



第10図　SD1・2 測量図



第11図　SD1 出土遺物実測図

器の椀である。12は体部が直線的に立ち上がり、体部下位に稜をもつ。13は断面三角形状の高台をもつ。14は土師器坏の底部で平底となるが、底部調整は摩滅の為不明である。15・16は土師器土釜の脚部であり、断面円形状を呈する。17・18は弥生土器の壺である。17は広口壺で、口縁端面に斜格子目文を施す。18は無頸壺で、口縁端面は面をなす。19は甕、20は壺の底部で平底となる。21は敲石、22は磨石で、21は中央部が凹む。

時期：遺物が混在しており時期特定は難しいが、出土品のうち古墳時代から古代に時期比定される須恵器片や土師器片の占める割合が多く、土坑との切り合いや検出層位から、概ね古墳時代から古代の遺構とする。

ＳＤ２（第６・10図、図版３・４）

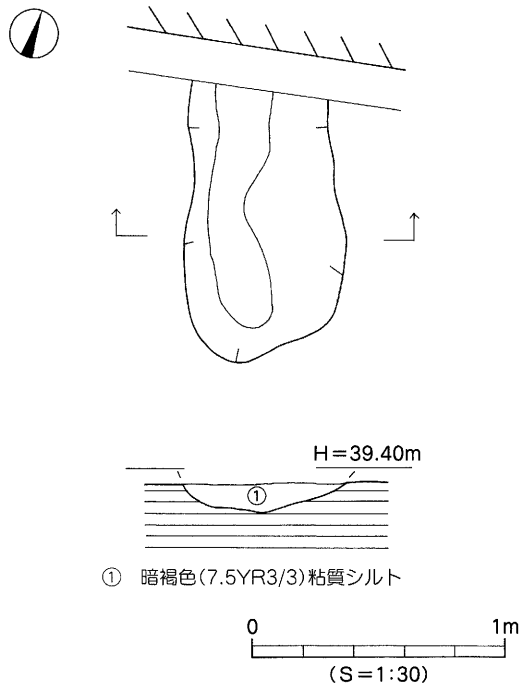
調査区西側Ａ１～３区に位置する。調査区を西側に拡張した際に検出した溝で、溝北側は近現代坑に削平され、南端は調査区外に続く。第Ⅳ層上面での検出であり、第Ⅲ層が覆う。規模は検出長6.5m、幅30～90cm、深さは検出面下５～10cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土はＳＤ１と酷似する暗褐色粘質シルトである。溝底面は北側から南側へ向けて緩傾斜をなし、比高差約７cmを測る。溝内からは少量の弥生土器片や土師器片が出土したほか、埋土中位から下位にて径５～20cm大の河原石が列をなして出土した。なお、ＳＤ１と一部重複する箇所があり、ＳＤ１とＳＤ２は同一の溝である可能性がある。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、検出層位や埋土がＳＤ１と同様であることから、概ね古墳時代から古代の遺構としておく。

ＳＤ３（第６・12図）

調査区北側中央部Ｂ１区で検出した南北方向の溝で溝南端は消失し、北側は調査区外に続く。第Ⅴ層上面での検出であるが、調査区北壁の土層観察により第Ⅳ層上面から掘り込まれた遺構であることを確認した。規模は検出長1.12m、幅0.66m、深さは検出面下10cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は暗褐色粘質シルトである。溝底面はほぼ平坦である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定はできないが、検出層位や埋土等から、概ね古墳時代から古代の遺構としておく。



第12図　SD3 測量図

（3）その他の遺構と遺物

調査では、倒木址１基と16基の柱穴を検出したほか、包含層や重機掘削時に遺物が出土した。重機掘削時に出土した遺物は層位や地点が不明なものがあり、それらは「地点不明出土遺物」として実測図を掲載した。

１）倒木址（第６図）

調査区東側Ｂ１・２区で検出した。倒木址上面には溝ＳＤ１や土坑ＳＫ３のほか、ＳＰ13（埋土：灰褐色粘質シルト）が存在する。倒木の規模は東西検出長2.3m、南北検出長3.7mを測る。なお、発掘調査時は平面プランのみを測量し、掘り下げ等は行っていない。埋土は粘性の強い極暗褐色粘質シルトである。倒木上面は第Ⅳ層が覆う。

２）柱穴（第６図）

調査では16基の柱穴を検出した。埋土で分類すると、以下の４種類（１類～４類）に分けられる。

１類：灰褐色粘質シルト……ＳＰ８～10・12・13　（５基）〔土師器が出土〕
２類：暗褐色粘質シルト……ＳＰ１～３・６・15　（５基）〔弥生土器･土師器･須恵器が出土〕
３類：黒褐色粘質シルト……ＳＰ４・５・７・11・14（５基）〔弥生土器･土師器が出土〕
４類：黒色粘質シルト……ＳＰ16　（１基）〔弥生土器が出土〕

上記の柱穴のうち、３類と４類の柱穴から出土した遺物を４点掲載した。

出土遺物（第13図、図版５）

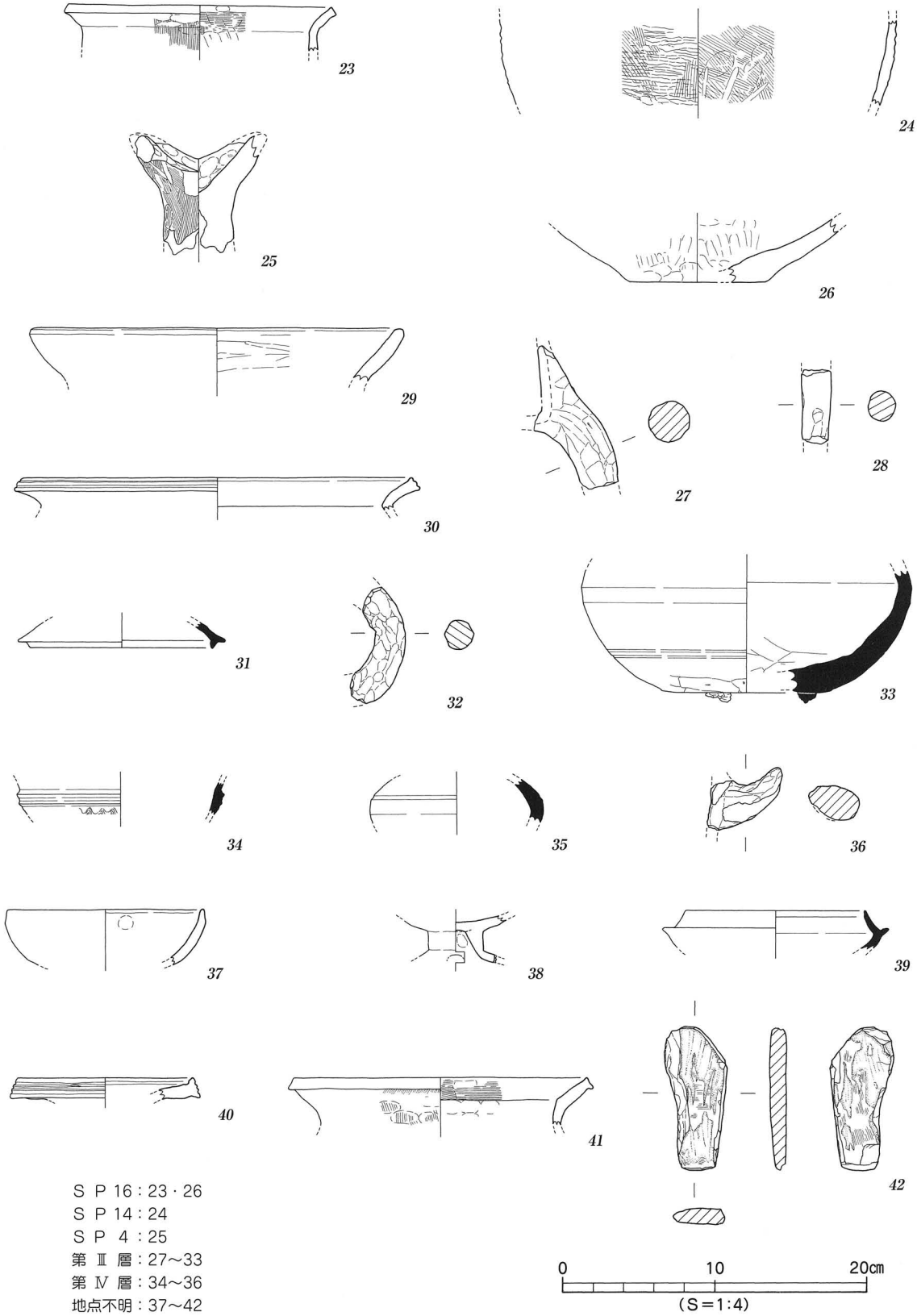
23・26はＳＰ16出土品、24はＳＰ14出土品、25はＳＰ４出土品である。23・24は弥生土器の甕で、24は外面にタタキ調整、内面にはヘラミガキ調整を施す。25は弥生土器の支脚で、受部は「Ｕ」字状にカットされ、柱部は中実となる。弥生時代末。26は弥生土器の壺で、平底となる。弥生時代中期後半。

３）包含層出土遺物（第13図、図版５）

27～33は第Ⅲ層、34～36は第Ⅳ層出土品。27・28は土師器土釜の脚部片で、断面円形状を呈する。14～15世紀。29は土師器の甕で、口縁端部は丸く仕上げる。６世紀。30は弥生土器の甕で、口縁端部に凹線文２条を施す。弥生時代中期後半。31は須恵器の坏蓋で、かえり端部は尖る。７世紀前半。32は須恵器四耳壺の把手部で、断面円形状を呈する。６世紀。33は須恵器長頸壺の底部で、焼成時の火ぶくれが残る。７世紀。34は須恵器の無蓋高坏で、凸線２条と波状文を施す。５世紀後半。35は須恵器の甑で、胴部上位に１条の沈線が巡る。６世紀。36は土師器甑の把手部で、やや上方に外反し、断面楕円形を呈する。６世紀。

４）地点不明出土遺物（第13図、図版５）

37は土師器の椀である。体部は内湾し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。５世紀。38は土師器の高坏である。低脚で、脚裾部に径1.0cm大の円孔を穿つ。４世紀。39は須恵器の坏身で、たちあがりは低く内傾し、たちあがり端部は尖る。６世紀。40は弥生土器の壺で、口縁端部に凹線文３条を施す。弥生時代中期後半。41は弥生土器の甕で、口縁端部は「コ」の字状に仕上げる。弥生時代後期前半。42は緑色片岩製の扁平片刃石斧で、敲打段階の未成品である。



第13図　柱穴・包含層・地点不明出土遺物実測図

4．小　結

調査では、弥生時代から中世までの遺構や遺物を確認することができた。遺構は弥生時代の土坑と、古墳時代から古代までに存在したと考えられる溝のほか、柱穴を検出した。ＳＫ１は弥生時代中期後半の土器が出土した不整形状の土坑であるが、近年の調査において該期の竪穴住居や土坑が点在して確認されており、その分布範囲が調査地周辺まで広がっていることが判明した。溝は「Ｌ」字状に折れ曲がる形状をなし、第Ⅳ層（黒褐色粘質シルト）上面から掘り込まれた遺構である。樽味地区で検出される黒褐色系のシルト層は主に弥生土器や土師器、須恵器を包含しており、古墳時代までに堆積したものと推測されている。溝の時期特定は困難であるが、少なくとも古墳時代以降に掘削されており、古代まで存続した可能性がある。樽味地区における古代遺構の検出例は少ないが、調査地南東部に所在する樽味四反地遺跡５次調査では流路内から硯や奈良三彩など、古代寺院や官衛遺構に関連すると思われる資料が出土している。今回検出の溝や周辺調査の結果などから、今後は弥生時代や古墳時代のみならず、樽味地区における古代集落の解明が急務となる。

遺物一覧　－凡例－

（１）以下の表は、本調査地検出の遺物の計測値及び観察一覧である。

（２）遺物観察表の各記載について。

法量欄　　（　）：復元推定値

調整欄　　土器の各部位名称を略記した。

例）口→口縁部、口端→口縁端部、胴→胴部、体→体部、脚→脚部、底→底部、坏→坏部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土。

（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（１～４）→「１～４㎜大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表1　ＳＫ１出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	壺	口径 (12.0) 残高 2.2	口縁端面に凹線文3条。	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	茶色 茶色	石・長(1～2) ◎		

表2　ＳＤ１出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
2	坏	口径 (8.6) 残高 3.5	坏部下位に1条の沈線が巡る。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 白灰色	密 ◎		
3	坏	底径 (6.8) 残高 1.9	体部下位に稜あり。小片。	回転ナデ (底)回転ヘラ切り	回転ナデ	淡乳灰白色 淡乳灰白色	密 ◎		
4	坏	底径 (7.5) 残高 2.4	小片。	回転ナデ (底)回転ヘラ切り	回転ナデ	灰茶色 灰色	密 ◎		5
5	高坏	残高 3.0	無蓋高坏。波状文＋凸線2条。	回転ナデ	回転ナデ	青灰白色 灰色	密 ◎		
6	高坏	底径 (9.0) 残高 2.0	脚部小片。 脚裾部は下方に屈曲する。	カキメ？ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
7	高坏	底径 (18.7) 残高 1.1	脚裾部小片。 裾端部は下方に屈曲する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
8	壺	残高 3.3	頸部片。凸線1条＋波状文14条。	回転ナデ	ナデ・回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
9	甕	口径 (23.5) 残高 1.9	断面長方形状の口縁部。小片。	マメツ	マメツ	乳白褐色 乳白褐色	密 ○		5
10	甕	残高 4.9	肩部小片。	カキメ→ 平行叩き	円弧叩き	灰白色 黒灰色	密 ◎		
11	碗	残高 3.5	青磁碗。	施釉	施釉	薄緑灰色 薄緑灰色	密 ◎	胎土： 灰色	
12	椀	口径 (16.4) 残高 4.4	体部下位に稜あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 淡茶褐色	密 ◎	黒斑？	
13	椀	残高 1.6	断面三角形状の高台。	ヨコナデ	マメツ	灰色 淡茶色	密・金 ◎	黒斑？	5
14	坏	底径 (9.3) 残高 1.5	平底。	マメツ	ナデ・マメツ	乳茶褐色 乳茶褐色	石・長(1～2) ◎		
15	土釜	残高 6.7	脚部片。断面円形。	ナデ ハケ？	—	暗茶褐色	石・長(1～3) ◎		5
16	土釜	残高 8.6	脚部片。断面円形。	ナデ ハケ？	—	淡茶褐色	石・長(1～2)金 ◎		
17	壺	口径 (25.4) 残高 3.4	広口壺。 口縁端面に斜格子目文あり。	ナデ	ナデ（マメツ）	乳白褐色 橙乳灰褐色	石・長(1～3) ◎		5
18	壺	口径 (15.4) 残高 4.5	無頸壺。口縁端面は面をもつ。	ヨコナデ	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	淡灰色 灰色	石・長(1～2)金 ◎		5
19	甕	底径 (5.0) 残高 2.8	平底。	ナデ	ナデ	淡黄橙色 淡黄橙色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	
20	壺	底径 (6.5) 残高 2.4	平底。	タタキ (マメツ)	ナデ	淡褐色 暗灰色	石・長(1～3) ◎		

表3　ＳＤ１出土遺物観察表　　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
21	敲石	2／3	安山岩	8.7	10.1	4.0	479.3		5
22	磨石	ほぼ完存	不明	12.2	7.0	4.1	506.3		5

表4　柱穴出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
23	甕	口径 (17.2) 残高 2.9	「く」の字状口縁。口縁端部は「コ」の字状に仕上げる。小片。	(口)ハケ→ヨコナデ (胴)ハケ	(口)ハケ→ヨコナデ (胴)板ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長(1～2) ◎	SP16	
24	甕	残高 5.1	胴部片。	タタキ→ ハケ(4～5本／cm)	ハケ(4～5本／cm) →ミガキ	黒色 橙茶色	石・長(1～3) ◎	SP14 煤付着	
25	支脚	残高 7.7	受部は「U」字状にカットされる。中実。	ナデ→ハケ	ナデ	淡乳褐色 淡乳褐色	石・長(1～3)金 ◎	SP4	5
26	壺	底径 (8.8) 残高 4.1	平底。	ナデ(マメツ)	ナデ	橙茶色 橙茶色	石・長(1～2) ◎	SP16	

表5　包含層出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
27	土釜	残高　9.3	脚部片。断面円形。	ナデ	ナデ(マメツ)	淡茶色 乳茶色	密・金 ◎	Ⅲ層	
28	土釜	残高　4.8	脚部片。断面円形。	ナデ	—	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2)金 ◎	Ⅲ層	
29	甕	口径 (23.5) 残高　3.5	内湾口縁。口縁端部は丸い。	マメツ (ナデ?)	マメツ (ミガキ?)	乳茶色 乳橙褐色	石・長(1～4) ◎	Ⅲ層	
30	甕	口径 (25.2) 残高　2.1	口縁端面に凹線文2条あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶色 茶色	石・長(1～2)金 ◎	Ⅲ層	
31	坏蓋	口径 (11.8) 残高　1.6	小片。	マメツ (口端)回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	Ⅲ層	
32	壺	残長　7.6	四耳壺。断面円形。	ナデ	—	青灰色	密 ◎	Ⅲ層	5
33	壺	底径 (11.0) 残高　8.6	焼成時の火ぶくれあり。	(体)回転ナデ (底)板ナデかケズリ	(体)回転ナデ (底)板ナデ?	灰色 灰色	密 ◎	Ⅲ層 自然釉	5
34	高坏	残高　2.1	無蓋高坏。 凸線2条＋波状文5条以上。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 黒灰色	密 ◎	Ⅳ層	
35	瓶	残高　2.8	小片。	(胴上)回転ナデ (胴下)回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎	Ⅳ層	
36	甑	残高　4.1	把手部。断面楕円形。	ナデ	ナデ	茶色 茶色	石・長(1～2) ◎	Ⅳ層	

表6　地点不明出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
37	椀	口径 (12.8) 残高　3.5	体部は内湾し、 口縁端部は尖り気味。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙褐色 橙褐色	密・金 ◎	黒斑	
38	高坏	残高　3.1	低脚。裾部にφ1.0cmの円孔あり。	マメツ	(坏)マメツ (脚)ナデ(マメツ)	明橙色 明橙色	密 ◎		5
39	坏身	口径 (11.6) 残高　2.4	たちあがりは低く内傾し、 端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
40	壺	口径 (11.4) 残高　1.3	口縁端面に凹線文3条あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶色 茶色	石・長(1)金 ◎		
41	甕	口径 (18.2) 残高　3.0	「く」の字状口縁。 口縁端部は「コ」の字状に仕上げる。	ハケ(7本／cm) →ヨコナデ	ヨコハケ→ヨコナデ ナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1～3) ◎		

表7　地点不明出土遺物観察表　　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
42	扁平片刃石斧	不明	緑色片岩	9.3	4.1	1.0	66.0	未成品	5

第４章　樽味四反地遺跡16次調査

１．調査の経緯

（１）調査に至る経緯

調査地が所在する石手川中流域左岸では、樽味遺跡（愛媛大学農学部構内）をはじめ、樽味四反地遺跡や樽味高木遺跡など数多くの発掘調査が実施され、縄文時代から中世までの複合遺跡であることが近年の調査・研究の結果、明らかになりつつある。調査地を含む樽味地区は、平成18年度には国から重要遺跡確認地域としての指定を受け、今回の調査は、重要遺跡確認調査として実施する最初の発掘調査である。調査は、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）と松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）が国庫補助事業として委託契約を結び、埋文センターが主体となり文化財課の協力のもと、平成18年11月より開始した。

（２）調査の経緯

調査は廃土置き場の都合上、調査地を北側と南側とに分けて実施した。平成18年11月1日より北半部の調査を開始する。重機（バックホー0.25㎥）を使用し、表土層及び包含層を掘削し、土層ごとに遺物を取り上げる。11月15日、第Ⅶ層上面にて竪穴住居や柱穴等の遺構を検出する。11月16日、測量業者（セントラルエンジニアリング株式会社）に国家座標軸測量業務を委託し、調査地内に５m四方のグリットを設定する。遺構検出時には切り合いが多数見られ、各遺構の平面プランや重複関係が判断できなかったため、調査地内に東西、及び南北方向のベルトを設定し断面観察により掘り方や埋土、平面プラン等を決定した。その後、竪穴住居を中心に調査を進めた。平成18年12月20日、北半部の調査を終了し、重機による埋め戻し作業をおこなう。

平成19年１月５日より、南半部の調査を開始する。北半部と同様、重機の使用により表土層を掘削し、１月９日からは包含層の掘削と遺物の取り上げをおこなう。１月18日、第Ⅳ層掘り下げ時に焼土が数箇所で検出され、さらに焼土内からまとまって土器が出土した。カマドの遺存する可能性があるため、焼土周辺は掘削せず部分的に残すことにした。１月22日、第Ⅶ層上面にて多数の竪穴住居や柱穴を検出した。１月29日、測量業者に再度、座標軸測量業務を委託する。その後、竪穴住居を中心に遺構の掘り下げや測量作業をおこなう。３月14日よりカマドの断ち割り作業をおこない、３月15日、完掘状況写真を撮影する。３月17日、一般市民対象の現地説明会をおこない、約80名の参加者を得る。説明会終了後はカマドの測量作業をおこなう。なお、調査地は調査終了後も水田耕作をおこなうため、遺構は真砂土で保護した後、３月19日より重機の使用により包含層、表土の順に埋め戻し作業をおこなった。３月30日、すべての埋め戻し作業を終了し、発掘調査を終了する。

（３）調査組織

所 在 地：松山市樽味４丁目222番１

調査期間：2006（平成18）年11月１日～2007（平成19）年３月30日

調査面積：523㎡

調査担当：財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター調査員　　宮内　慎一

2．層　位（第16～18図）

（1）基本層位

調査地は、調査以前は水田として利用されていた。現況では標高39.4m前後を測る。調査地の基本層位は、以下の７層である。

Ⅰ層：近現代の農耕に伴う客土で、土色、土質の違いにより4層に分層される。

Ⅰ①層－青灰色（10BG6/1）砂質シルトで、水田耕作土である。層厚10～40cm。

Ⅰ②層－明赤褐色（2.5YR5/6）粘質シルトで、水田床土である。層厚５～18cm。

Ⅰ③層－灰色（7.5Y6/1）砂質シルトで、旧水田耕作土である。層厚４～10cm。

Ⅰ④層－にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質シルトで、旧水田床土である。層厚２～８cm。

Ⅱ層：灰黄褐色（10YR6/2）砂質シルトで、調査区中央部付近にみられる。層厚３～20cm。本層中からは、中世の土師器片や陶磁器片が重機掘削時に少量出土した。

Ⅲ層：褐灰色（10YR4/1）砂質シルトで、調査区南西部にみられる。層厚５～30cm。調査区東壁及び南壁の土層観察により、Ⅲ層上面から灰褐色（7.5YR6/2）砂質シルトを埋土とする遺構〔Ⓑ〕が掘り込まれていることを確認した。本層中からは、古代の土師器片や須恵器片が重機掘削時に少量出土した。

Ⅳ層：暗褐色（7.5YR3/3）粘質シルトで、調査区北半部にみられる。層厚10～30cm。調査区西壁の土層観察により、Ⅳ層上面にて灰褐色（7.5YR6/2）砂質シルトや褐灰色（7.5YR6/1）砂質シルトを埋土とする遺構〔Ⓑ、Ⓒ〕が掘り込まれていることを確認した。本層中からは、主に古墳時代から古代の土師器や須恵器が重機掘削時に少量出土した。

Ⅴ層：黒褐色（10YR2/3）粘質シルトで、調査区北東部を除く地域に見られる。層厚10～30cmを測る。調査区西壁の土層観察により、Ⅴ層上面より掘立柱建物や褐色（7.5YR4/6）粘質シルトを埋土とする遺構〔Ⓕ〕が掘り込まれていることを確認した。また、検出した竪穴住居は、いずれもⅤ層上面またはⅤ層中から掘り込まれた可能性が高いものばかりである。なお、調査区北半部にて楕円形状の凹み（ＳＸ１）を検出したが、ＳＸ１はⅤ層で埋没している。本層中からは、弥生土器や古墳時代の土師器、須恵器が数多く出土した。

Ⅵ層：暗褐色（7.5YR3/4）を呈する粘性の極めて強いシルト層で、調査区南半部に部分的に見られる。層厚３～20cm。本層中からは、少量の弥生土器片や土師器片が出土した。

Ⅶ層：にぶい黄褐色（10YR5/3）粘質シルトで、下部には礫が混入する。本層上面は、調査における最終遺構検出面である。なお、本層上面の標高を測量すると北側から南側に向けて傾斜をなし、調査区北西隅が最も高く標高39.1m、南西隅が最も低く標高38.9mとなる。

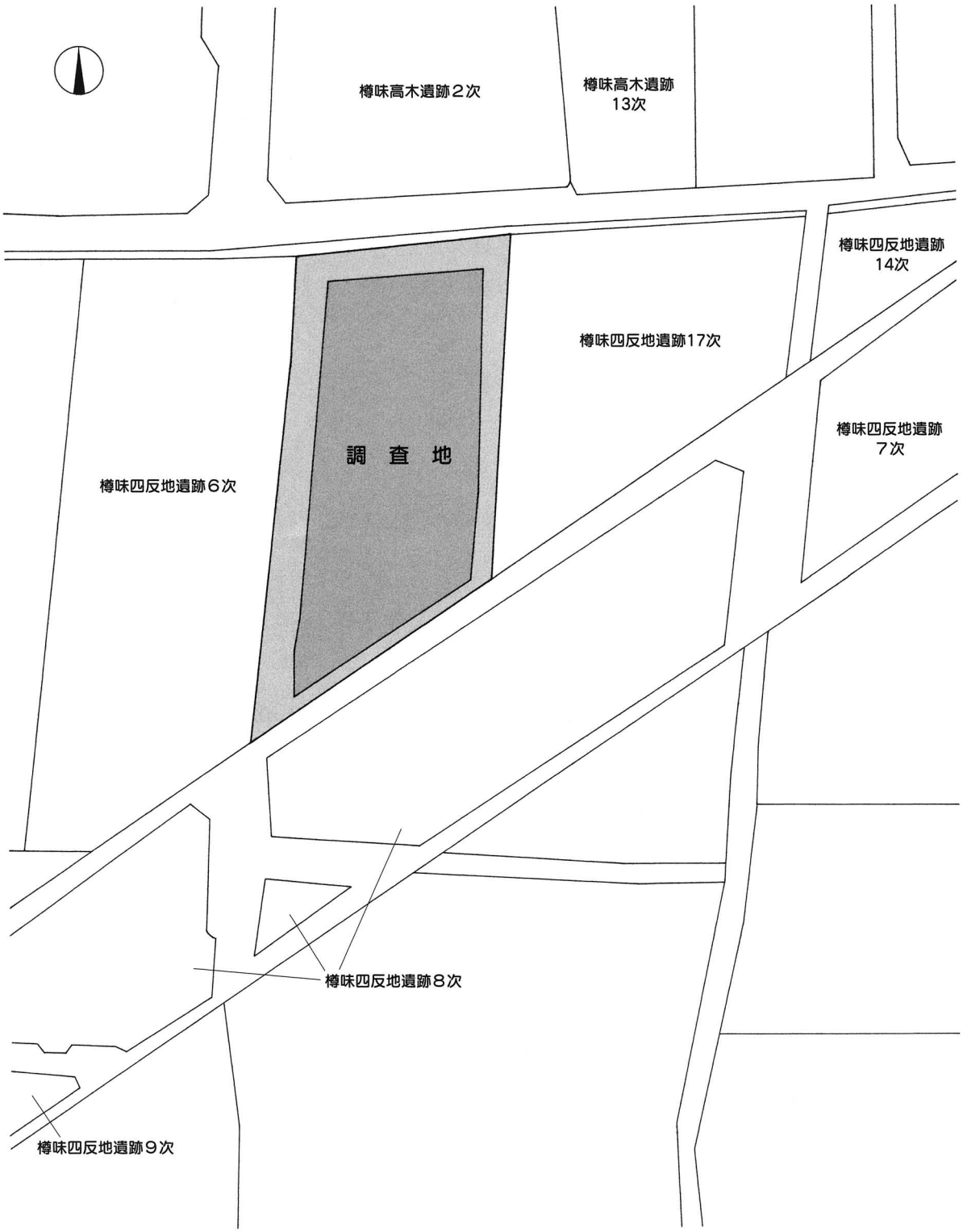
検出状況や出土遺物から、Ⅴ・Ⅵ層は古墳時代、Ⅲ・Ⅳ層は古代、Ⅱ層は中世までに堆積したものと考えられる。なお、調査にあたり調査区内を５m四方のグリットに分けた。グリットは遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。

（2）検出遺構・遺物

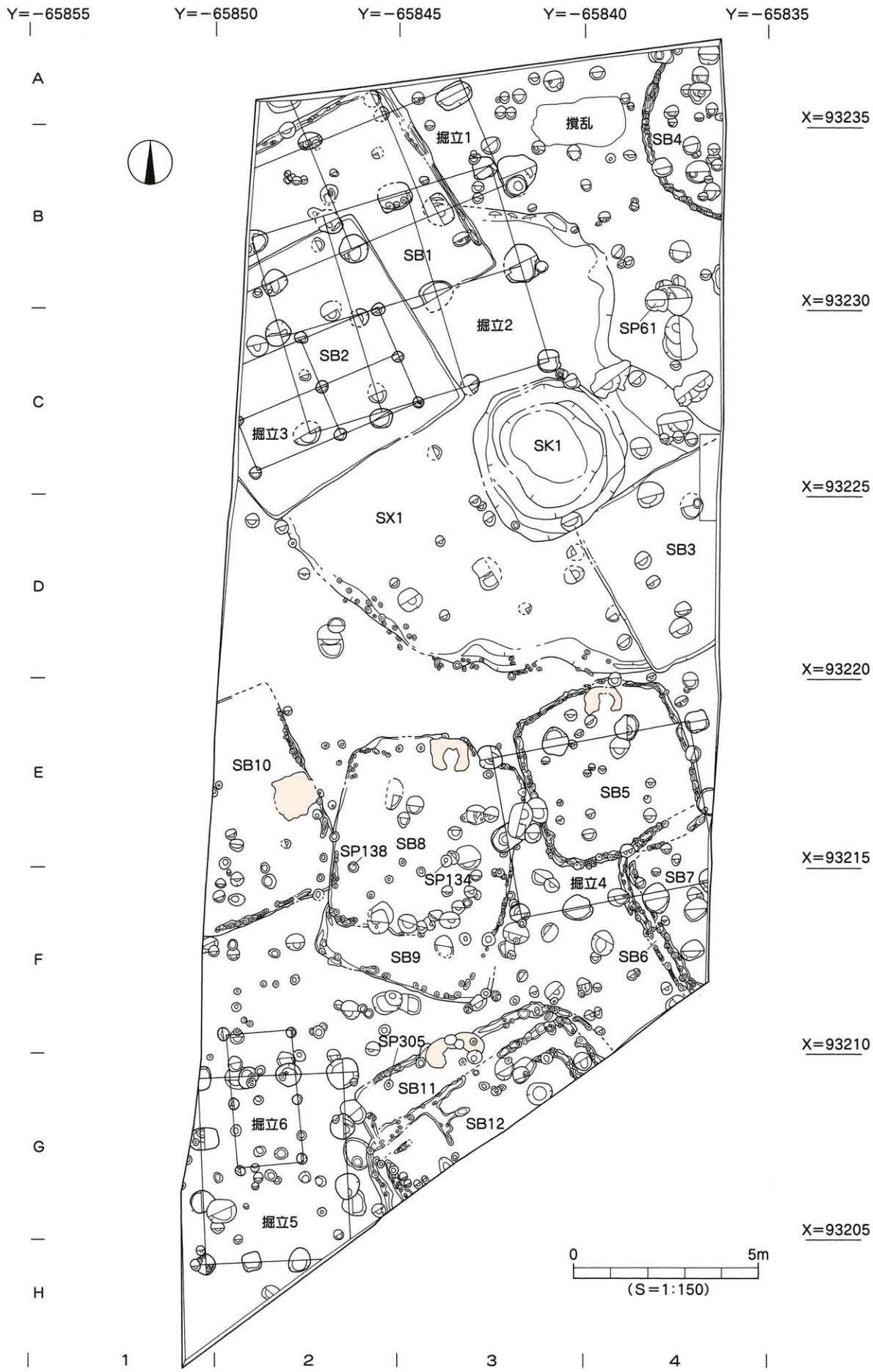
調査で検出した遺構は、竪穴住居12棟（弥生：１棟、古墳：11棟）、掘立柱建物６棟（古墳：４棟、古代：１棟、中世：１棟）、土坑１基（弥生）、性格不明遺構１基（古墳）、柱穴205基（掘立柱建物柱穴、及び住居床面検出の柱穴を除く）である。なお、今回の調査では、竪穴住居や土坑底面で検出し

た溝や柱穴は、遺構ごとに通し番号を付けた（例：ＳＢ１内ＳＰ①、ＳＢ６内ＳＤ②）。

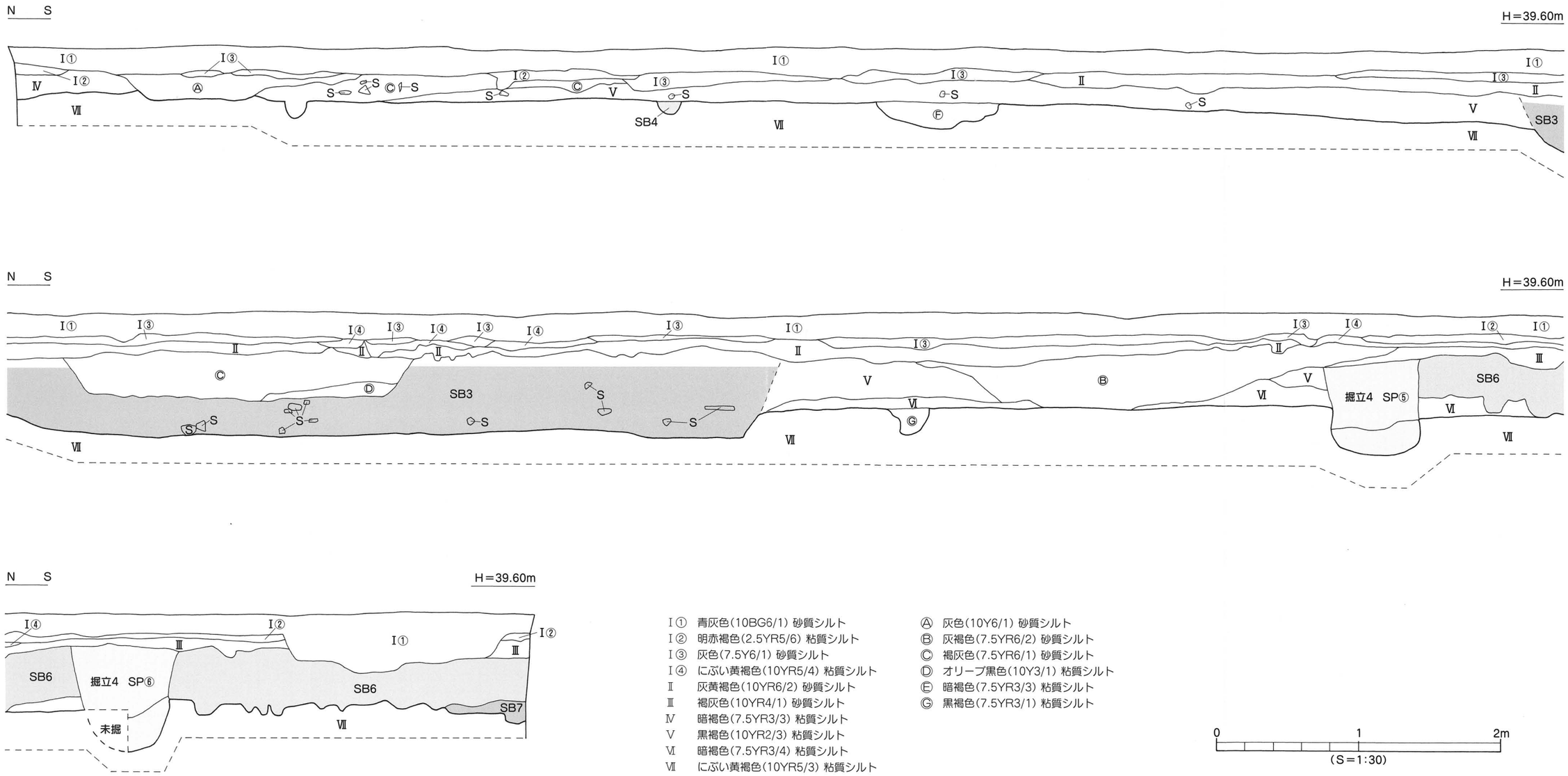
遺物は遺構や包含層、及び重機掘削時に出土したもので、縄文土器（晩期）、弥生土器（前期～後期）、土師器（古墳～中世）、須恵器（古墳～古代）、陶磁器（備前）、輸入陶磁器、石器、鉄器のほか臼玉、ガラス玉、管玉などが出土した。



第14図　調査地位置図（S＝1:500）


Y=−65855
Y=−65850
Y=−65845
Y=−65840
Y=−65835
A
B
C
D
E
F
G
H
X=93235
X=93230
X=93225
X=93220
X=93215
X=93210
X=93205
1
2
3
4
掘立1
撹乱
SB4
SB1
掘立2
SP61
SB2
掘立3
SK1
SX1
SB3
SB10
SB5
SP138
SB8
SP134
掘立4
SB7
SB9
SB6
SP305
SB11
SB12
掘立6
掘立5
0
5m
(S=1:150)

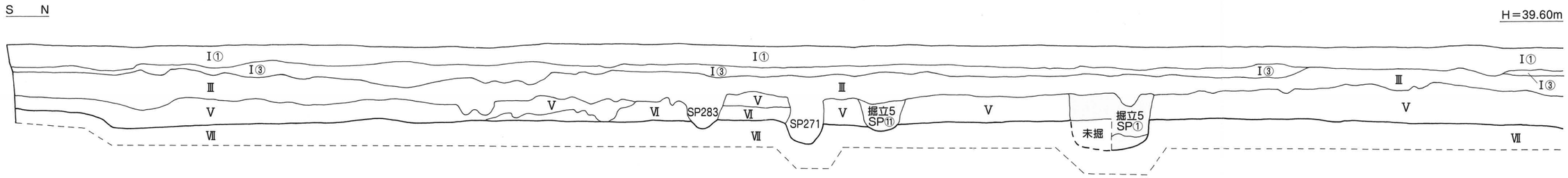
第15図　遺構配置図

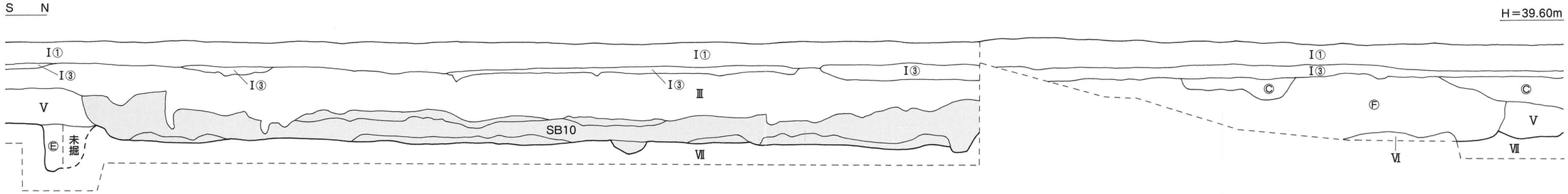


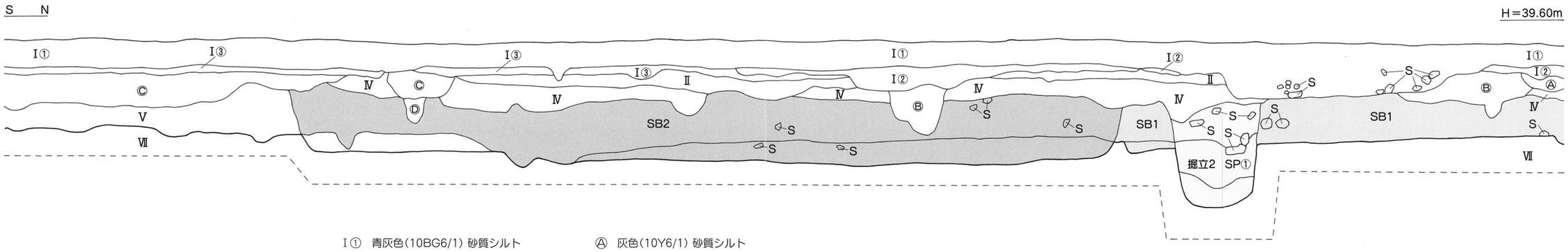
Ⅰ① 青灰色(10BG6/1) 砂質シルト
Ⅰ② 明赤褐色(2.5YR5/6) 粘質シルト
Ⅰ③ 灰色(7.5Y6/1) 砂質シルト
Ⅰ④ にぶい黄褐色(10YR5/4) 粘質シルト
Ⅱ 灰黄褐色(10YR6/2) 砂質シルト
Ⅲ 褐灰色(10YR4/1) 砂質シルト
Ⅳ 暗褐色(7.5YR3/3) 粘質シルト
Ⅴ 黒褐色(10YR2/3) 粘質シルト
Ⅵ 暗褐色(7.5YR3/4) 粘質シルト
Ⅶ にぶい黄褐色(10YR5/3) 粘質シルト

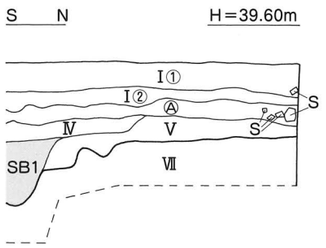
Ⓐ 灰色(10Y6/1) 砂質シルト
Ⓑ 灰褐色(7.5YR6/2) 砂質シルト
Ⓒ 褐灰色(7.5YR6/1) 砂質シルト
Ⓓ オリーブ黒色(10Y3/1) 粘質シルト
Ⓔ 暗褐色(7.5YR3/3) 粘質シルト
Ⓖ 黒褐色(7.5YR3/1) 粘質シルト

第16図　東壁土層図







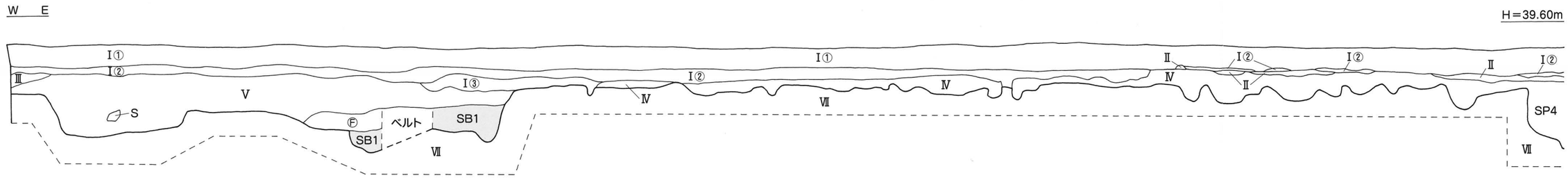


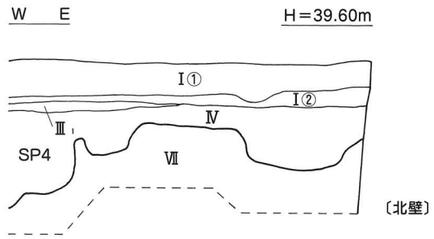
Ⅰ① 青灰色(10BG6/1) 砂質シルト
Ⅰ② 明赤褐色(2.5YR5/6) 粘質シルト
Ⅰ③ 灰色(7.5Y6/1) 砂質シルト
Ⅱ 灰黄褐色(10YR6/2) 砂質シルト
Ⅲ 褐灰色(10YR4/1) 砂質シルト
Ⅳ 暗褐色(7.5YR3/3) 粘質シルト
Ⅴ 黒褐色(10YR2/3) 粘質シルト
Ⅵ 暗褐色(7.5YR3/4) 粘質シルト
Ⅶ にぶい黄褐色(10YR5/3) 粘質シルト

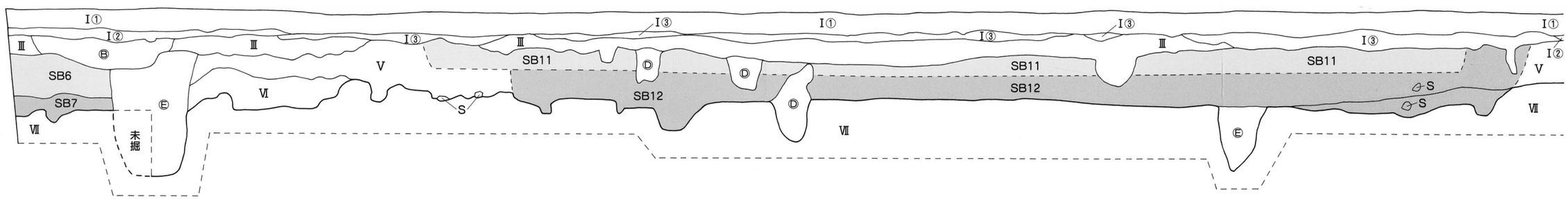
Ⓐ 灰色(10Y6/1) 砂質シルト
Ⓑ 灰褐色(7.5YR6/2) 砂質シルト
Ⓒ 褐灰色(7.5YR6/1) 砂質シルト
Ⓓ オリーブ黒色(10Y3/1) 粘質シルト
Ⓔ 暗褐色(7.5YR3/3) 粘質シルト
Ⓕ 褐色(7.5YR4/6) 粘質シルト

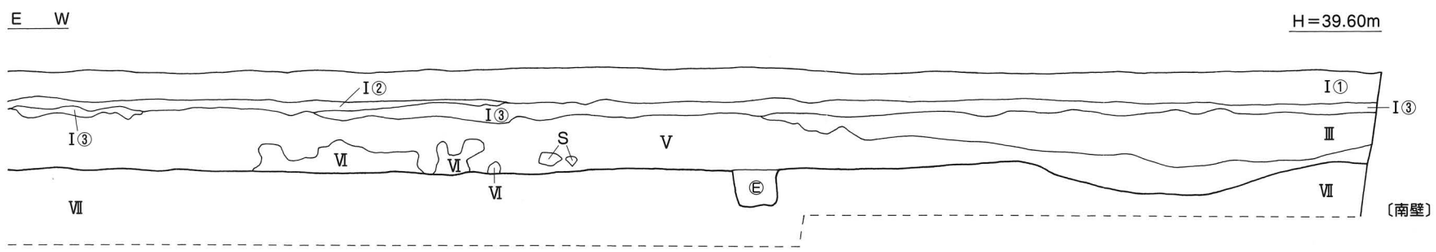
0 1 2m
(S=1:30)

第17図 西壁土層図









Ⅰ① 青灰色(10BG6/1) 砂質シルト
Ⅰ② 明赤褐色(2.5YR5/6) 粘質シルト
Ⅰ③ 灰色(7.5Y6/1) 砂質シルト
Ⅱ 灰黄褐色(10YR6/2) 砂質シルト
Ⅲ 褐灰色(10YR4/1) 砂質シルト
Ⅳ 暗褐色(7.5YR3/3) 粘質シルト
Ⅴ 黒褐色(10YR2/3) 粘質シルト
Ⅵ 暗褐色(7.5YR3/4) 粘質シルト
Ⅶ にぶい黄褐色(10YR5/3) 粘質シルト

Ⓑ 灰褐色(7.5YR6/2) 砂質シルト
Ⓓ オリーブ黒色(10Y3/1) 粘質シルト
Ⓔ 暗褐色(7.5YR3/3) 粘質シルト
Ⓕ 褐色(7.5YR4/6) 粘質シルト

0 1 2m
(S=1:30)

第18図 北壁・南壁土層図

3．遺構と遺物

（1）弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、竪穴住居１棟と土坑１基を検出した。

1）竪穴住居

ＳＢ４（第15・19図、図版９）

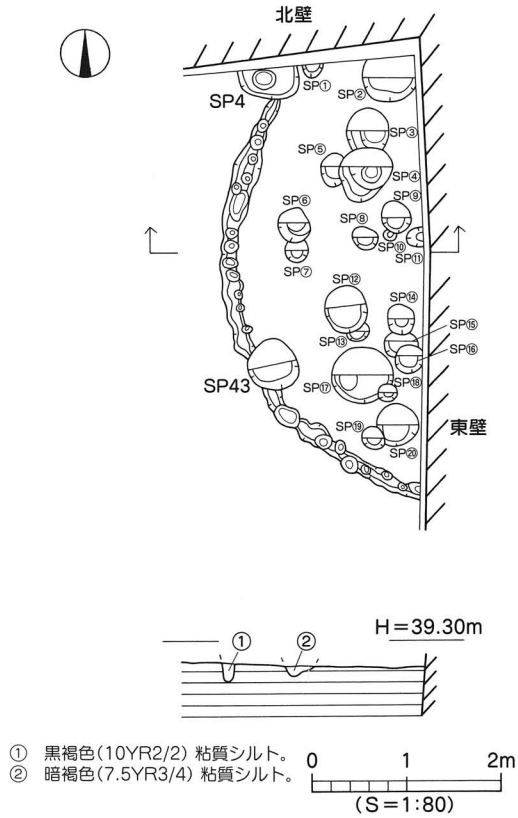
調査区北東隅Ａ・Ｂ４区に位置し、住居北壁はＳＰ４（埋土：暗褐色粘質シルト）、南西壁はＳＰ43（埋土：褐色粘質土）に切られ、住居北側及び東側は調査区外に続く。第Ⅶ層上面での検出であり、第Ⅳ層が覆う。なお、住居検出時には既に壁体は遺存しておらず、周壁溝のみの検出である。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長2.13m、南北検出長4.65mを測る。壁溝はほぼ全周し、規模は幅６～27cm、深さ２～10cmを測る。壁溝埋土は黒褐色粘質シルトである。壁溝内からは径３～10cm、深さ３～５cmを測る小ピットを多数検出したことから、小ピットは壁溝に打ち込まれた杭痕と考えられる。このほか、住居床面からは大小20基の柱穴を検出したが、主柱穴を特定することはできなかった。各柱穴の規模は径10～66cm、深さ10～30cmを測る。柱穴埋土は３種類あり、ＳＰ①・②・⑧～⑪・⑭・⑱・⑲は褐灰色シルト、ＳＰ③・⑤～⑦・⑫・⑬・⑮～⑰・⑳は暗褐色粘質シルト、ＳＰ④は灰色シルトである。住居床面は第Ⅶ層であり、わずかに住居中央部に向けて緩傾斜をなす。遺物は周壁溝内より少量の弥生土器片が出土したが、図化しうるものはない。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は困難であるが、切り合いや住居埋土などからＳＢ４の廃棄・埋没時期は概ね弥生時代後期とする。

2）土　坑

ＳＫ１（第15・20図、図版９・10）

調査区中央部やや北東寄り、Ｃ３～Ｄ４区に位置する。土坑北側はＳＰ76（埋土：灰色砂質シルト）に切られている。第Ⅶ層上面での検出であり、土坑上部はＳＸ１埋土が覆う。平面形態は南側がやや広がる円形を呈し、規模は南北長4.46m、東西長4.10m、深さは検出面下1.3mを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑下部は舟底状となる。埋土は７層に分層でき、①層黒褐色粘質シルト、②層オリーブ黒色粘質シルト、③層灰黄褐色砂質シルト、④層黒色粘質シルト、⑤層黒褐色粘質シルト、⑥層黒褐色粘質シルト、⑦層灰黄色粘質砂である。なお、②層及び⑤層中には径１～５cm大の小礫が少量混じり、④層中には径３～15cm大の比較的大型の円礫がレンズ状の堆積をなしていた。また、⑥層中には径１～３cm大の小礫が大量に含まれていた。土坑壁体は中位付近までは第Ⅶ層であるが、土坑下位から底面は黄色の砂層



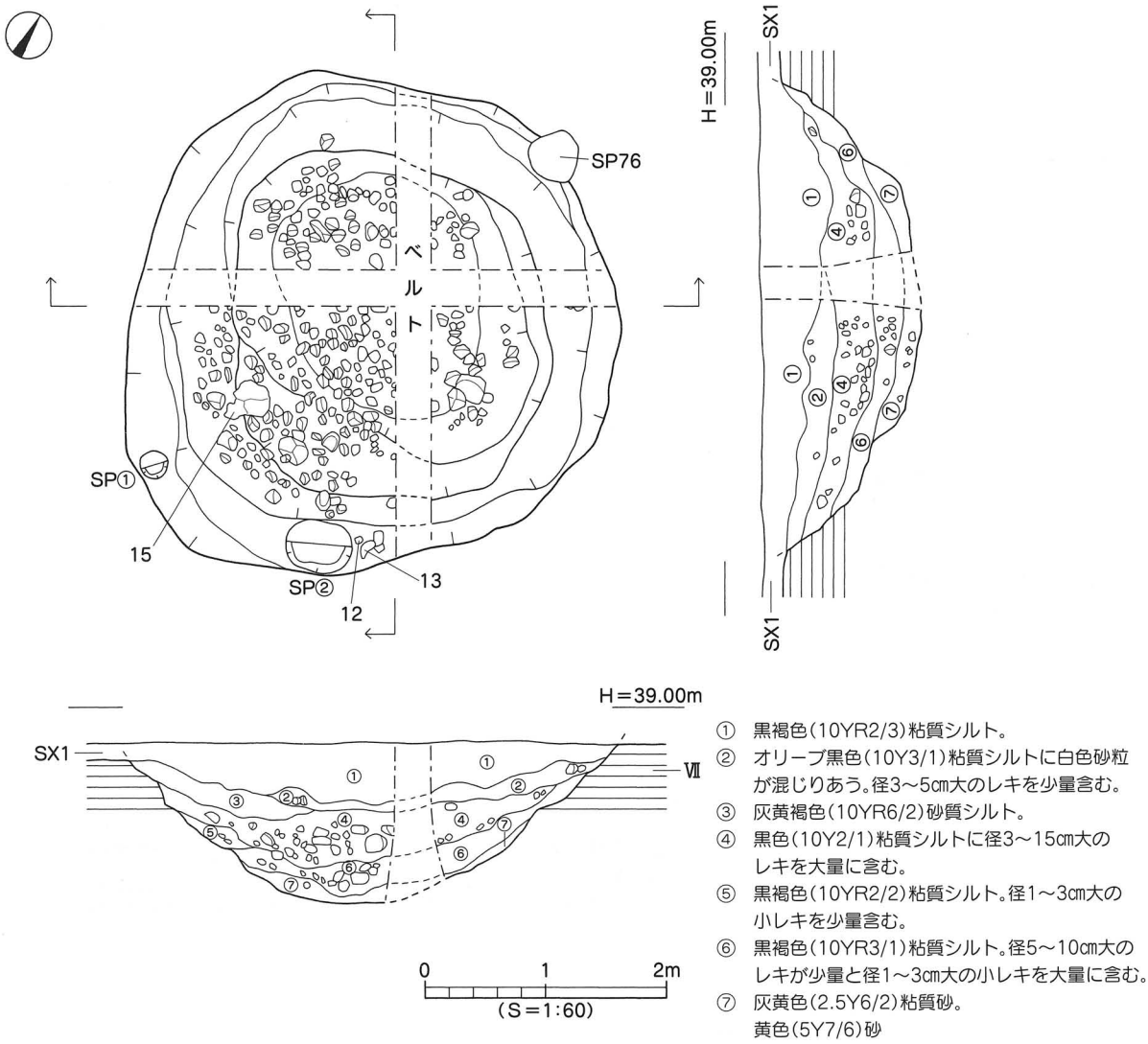
第19図　SB4 測量図

である。底面付近からは、発掘調査時に多少の湧水が認められた。土坑南側壁体にて２基のピット（ＳＰ①・②）を検出した。ＳＰ①は径20～22cm、深さ８cmを測る円形ピット、ＳＰ②は長径54cm、短径42cm、深さ18cmを測る楕円形ピットで、埋土はＳＰ①、ＳＰ②共に黒褐色粘質シルトである。

遺物は土坑南側壁体付近の②層中より、弥生土器の壺（12・13）が出土したほか、④層中からは弥生土器片が礫に混じって出土した。このほか、土坑検出時に土坑中央部南寄りの①層上面付近から土師器甕（15）が押しつぶされた状態で出土した。

出土遺物（第21図、図版18）

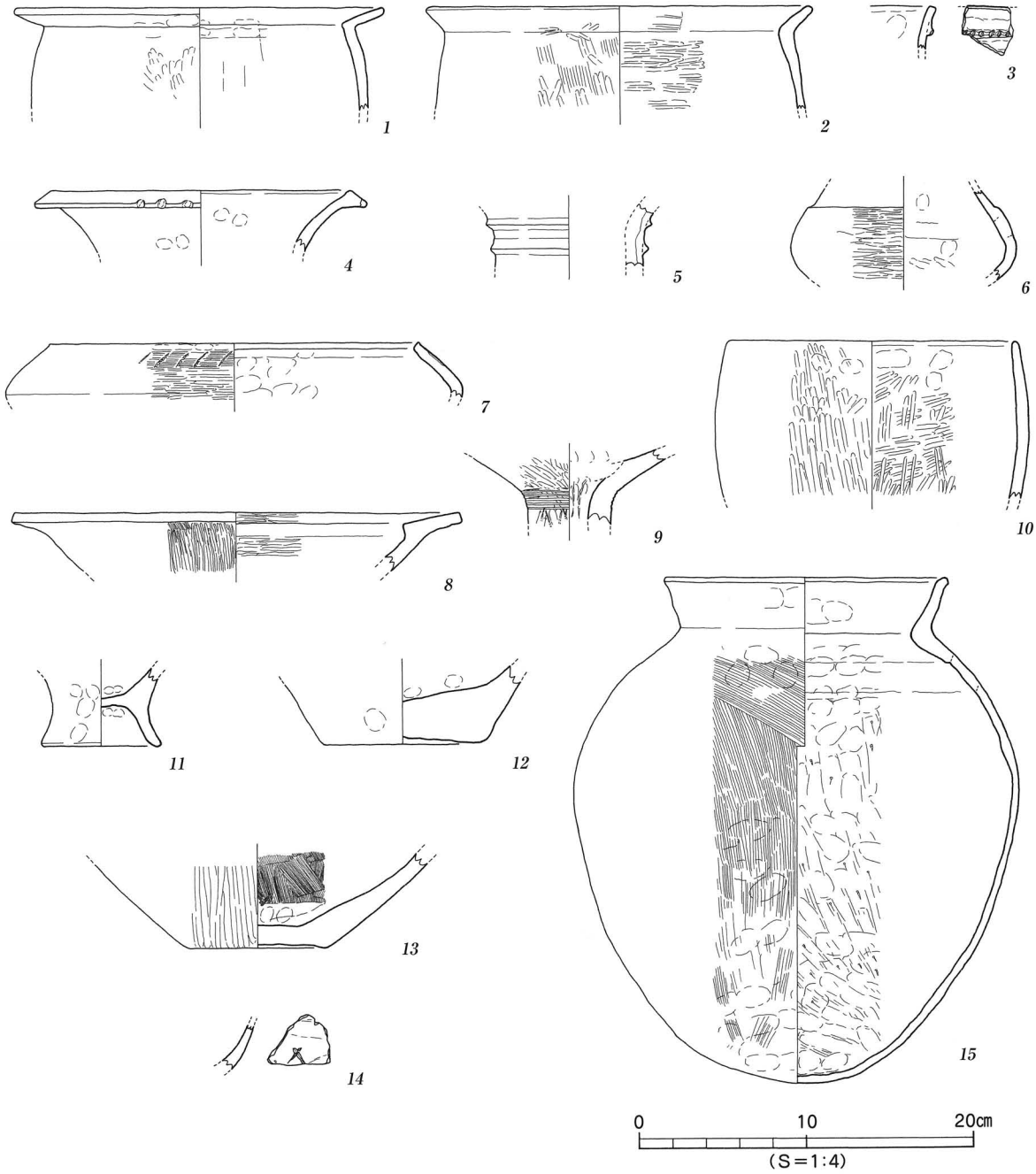
１～３は弥生土器の甕である。１・２の口縁部は「く」の字状を呈し、胴部外面にはヘラミガキ調整を施す。弥生中期後半。３は弥生前期の甕で、口縁部に刻目凸帯文を貼り付ける。４～６は弥生土器の壺である。４は広口壺で、口縁端面に刻目を施す。５は頸部片で、凸帯文２条を貼り付ける。弥生中期中葉。６は弥生前期の壺で、頸部に段をもつ。胴部外面にはヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。７～９は高坏で、７は口縁部に貝殻施文による列点文を施す。弥生中期後半。８は口縁内面に段をもち、外面にヘラミガキ調整を施す。弥生中期中葉。９は坏柱部片で、柱部にヘラ描き沈線文５条と山



第20図　SK1 測量図

形文を施す。弥生中期後半。10はジョッキ形土器で、口縁端部は尖り気味に仕上げ、内外面共にヘラミガキ調整を施す。弥生中期中葉。11は甕、12・13は壺の底部である。11はくびれをもつ上げ底、12・13はやや上げ底となる。弥生中期中葉～後半。14は器種不明品であるが、外面に「×」状の線刻が残る。15は土師器の甕である。復元完形品で、口径17.0cm、器高30.1cmを測る。口縁部及び口縁端部は内傾する。胴部外面はハケメ調整、内面は板ナデを施す。

時期：出土遺物が混在しており時期特定は困難であるが、上限を弥生時代中期後半、下限を古墳時代中期とする。



第21図　SK1 出土遺物実測図

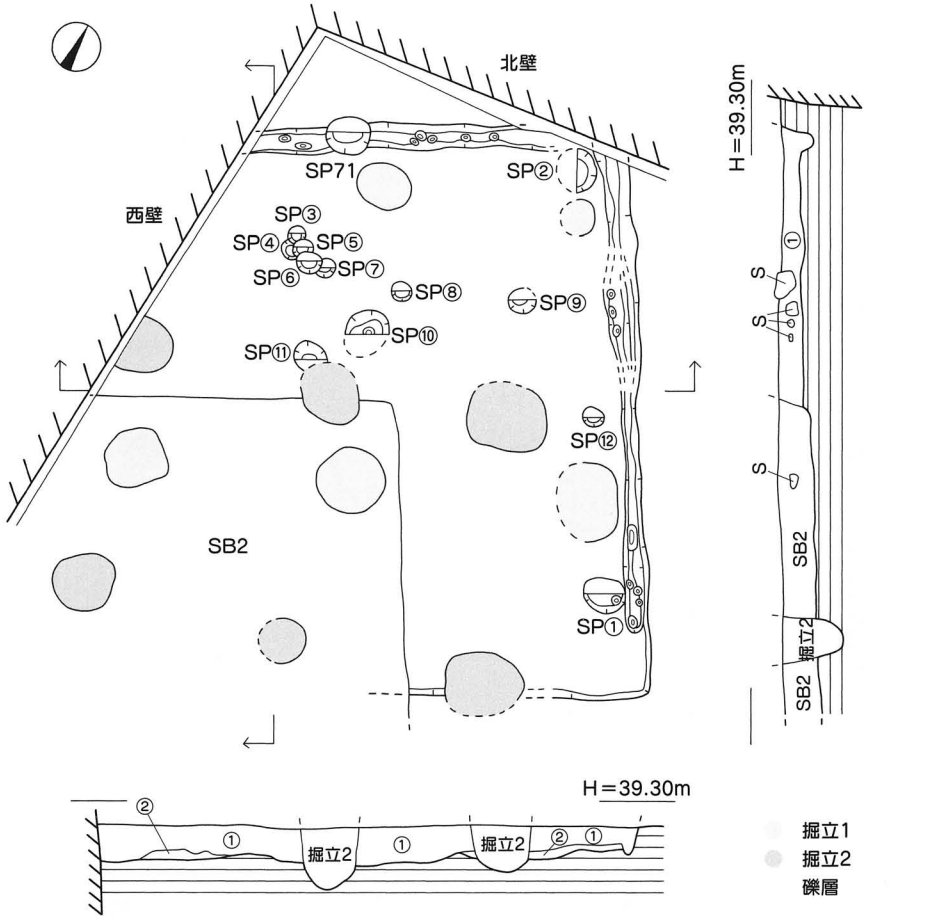
（2）古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、竪穴住居11棟、掘立柱建物４棟、性格不明遺構１基を検出した。

１）竪穴住居

ＳＢ１（第15・22・23図、図版10・11）

調査区北西部Ａ２～Ｂ３区に位置する。第Ⅶ層上面で検出した住居で、住居南西部はＳＢ２、住居北壁はＳＰ71（埋土：灰色土）に切られ、西側は調査区外に続く。また、ベルトの土層観察により、ＳＢ１上面から掘立２柱穴が掘り込まれていることを確認した。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は南北長5.88m、東西検出長5.64m、壁高は検出面下約30cmを測る。住居埋土は２層に分層でき、①層オリーブ黒色粘質土（白色砂粒混入）、②層オリーブ黒色粘質土（にぶい黄褐色シルトがブロック状に混入）である。検出状況から、②層は住居床面修復に伴う貼床土と考えられる。住居壁体に沿って周壁溝を検出した。壁溝の規模は幅10～15cm、深さ２～15cmを測る。壁溝埋土は、住居埋土①層と同様のオリーブ黒色粘質土である。なお、壁溝底面にて径８～12cm、深さ３～５cm程度の小ピットを多数検出した。このほか、住居床面にて大小12基の柱穴を検出した。各柱穴の規模は、径15～48cm、深さ５～15cmを測る。柱穴埋土は２種類あり、ＳＰ①～⑤・⑦・⑧は褐色粘質シルト、



① オリーブ黒色(10Y3/1)粘質土。白色砂粒を少量含む。
② オリーブ黒色(10Y3/1)粘質土。にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトのブロックが少量混じる。

0　1　2m
(S=1:80)

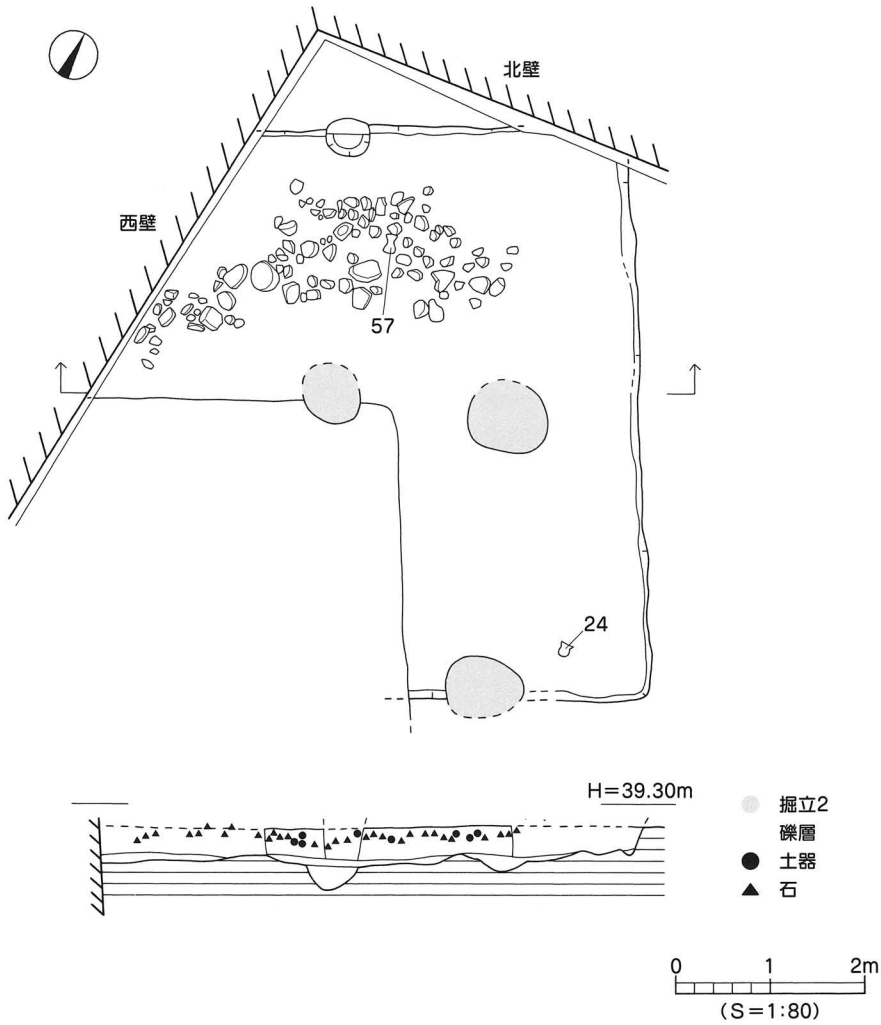
第22図　SB1 測量図

その他はオリーブ黒色粘質土である。なお、主柱穴は特定できなかった。住居底面にはやや起伏があり、住居中央部が楕円形状に凹む。

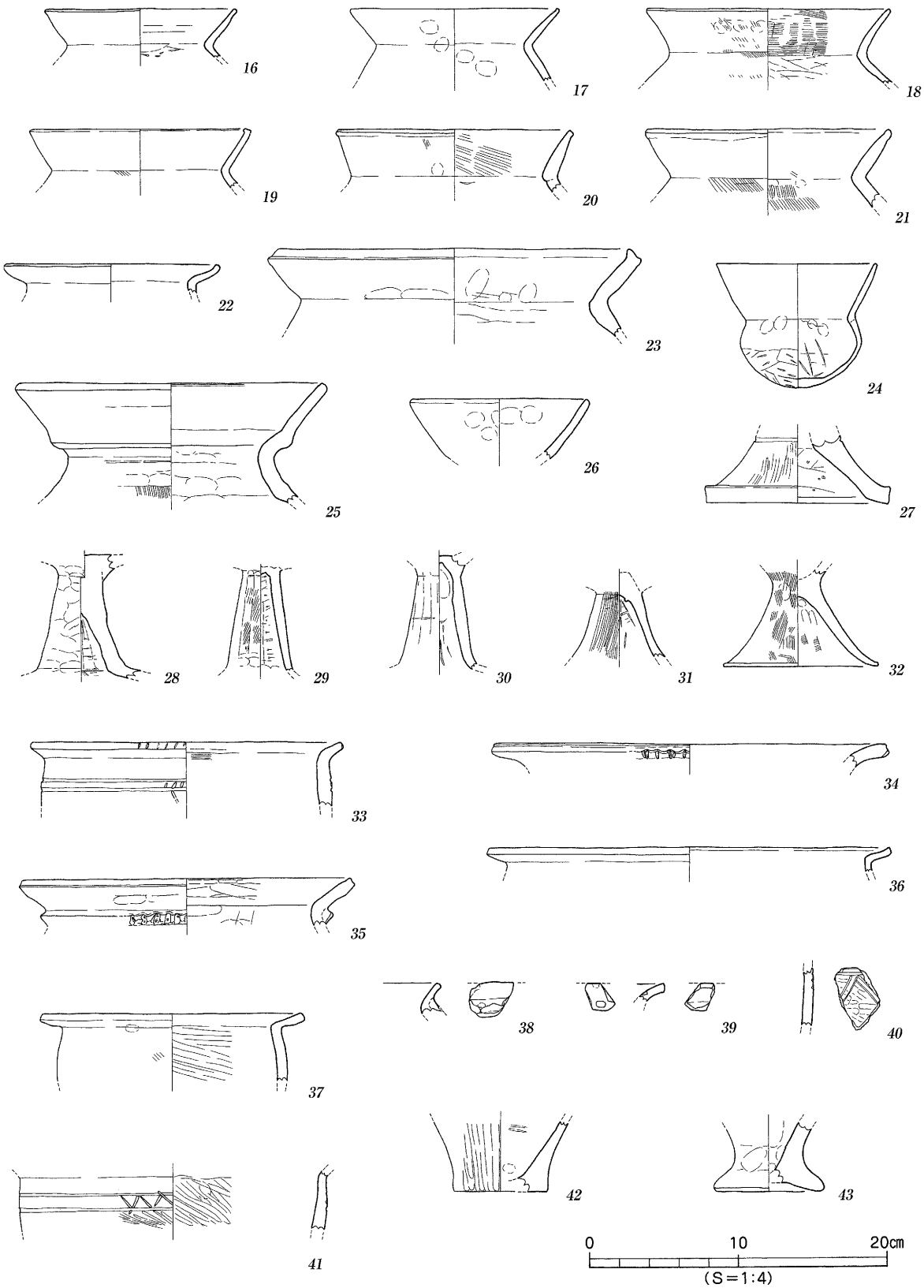
遺物は住居南東部、②層上面付近にて完形の小型丸底壺（24）が出土したほか、①層下部からは土師器片や臼玉、鉄器が散在して出土した。一方、①層上位からは径５～20cm大の河原石が住居北半部（２ｍ×４ｍの範囲）に密集して出土したほか、河原石に混じって縄文土器片や弥生土器（前期～後期）が出土した。なお、河原石が出土した周辺では明確な掘り方は検出されなかったことから、これらの石や土器は住居廃絶の際に投入されたものと推測される。

出土遺物（第24・25図、図版18・19）

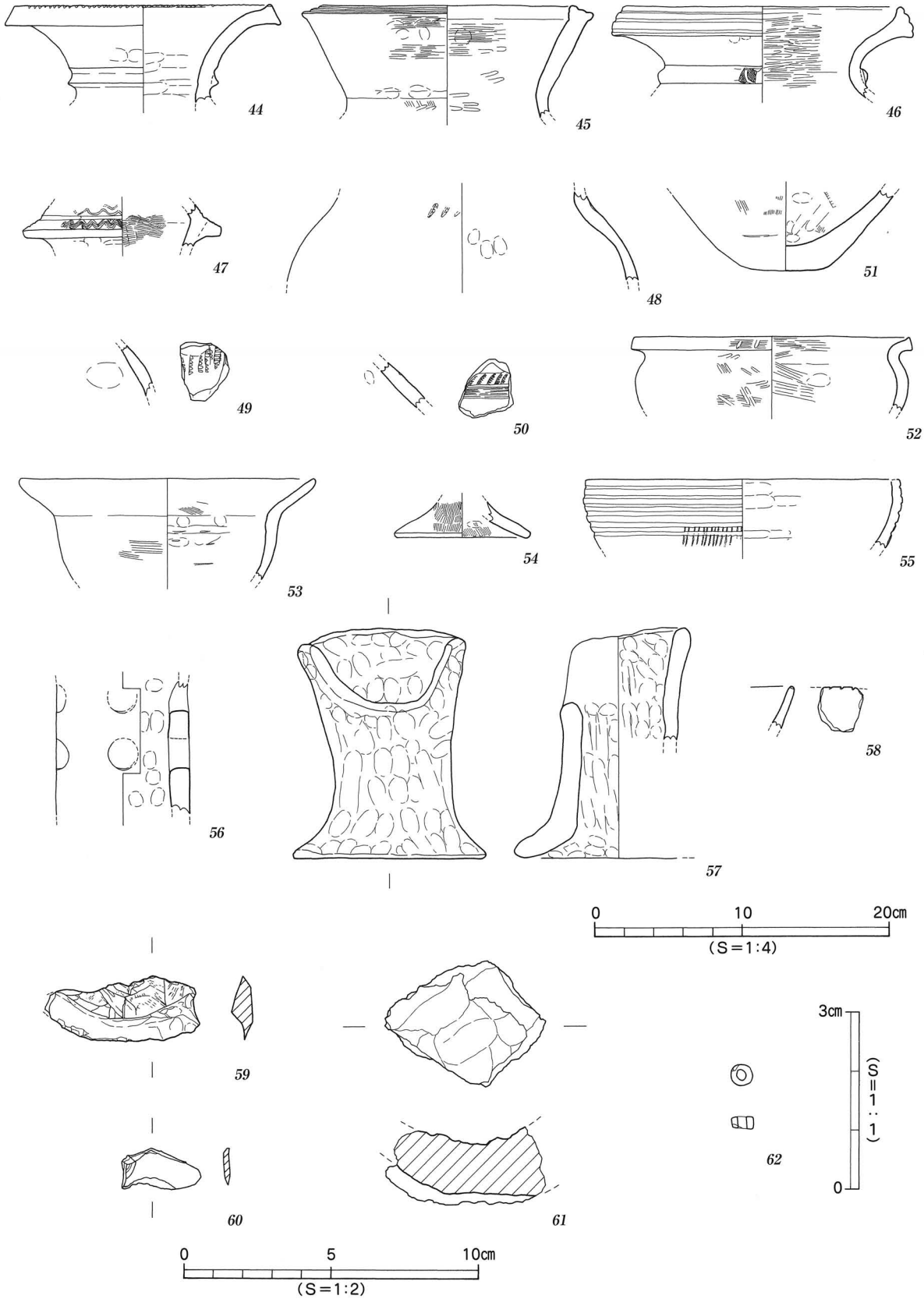
16～23は土師器の甕である。16～21は「く」の字状口縁で、16・17は口縁端部が先細りする。22・23は口縁端部が上方につまみ出され、23の口縁端面はナデ凹む。24は完形の小型丸底壺で、口径10.7cm、器高8.3cmを測り、底部外面は手持ちヘラケズリを施す。25は二重口縁壺で、口縁部は大きく外反する。26は直口鉢、27は脚付鉢である。28～32は高坏の脚部である。28～30は細脚で、28・30の柱部内面にはシボリ痕が残る。33～43は弥生土器の甕である。33・34・38・39は折曲口縁で、33・34は口縁端部に刻目、胴部にはヘラ描き沈線文を施す。39の口縁部内面には籾圧痕が残る。弥生前期。



第23図　SB1 遺物出土状況図



第24図　SB1 出土遺物実測図(1)



第25図　SB1 出土遺物実測図(2)

35～37は「く」の字状口縁で、35は口縁下に押圧凸帯文を貼り付ける。36は口縁端部を上方につまみ上げる。弥生中期後半。40・41は胴部外面に山形文を施す。弥生前期。42は平底、43は上げ底の底部である。弥生中期後半。44～51は弥生土器の壺である。44～46は広口壺で、44は口縁上端面に刻目、頸部に断面三角形状の凸帯を貼り付ける。弥生中期中葉。47は複合口縁壺で、波状文を施す。弥生後期。48～50は肩部片で、48・49は貝殻施文による列点文、50は列点文と沈線文を施す。51は底部で平底となる。弥生中期後半。52～54は弥生土器の鉢である。52は外反口縁、53は「く」の字状口縁、54は脚付鉢の脚部である。弥生後期。55は高坏の坏部で、凹線文６条と刻目を施す。弥生中期中葉。56は器台の柱部で、径2.0cm大の円孔を穿つ。弥生後期後半。57は支脚で、受部は「U」字状にカットされ、柱部は中空となる。弥生後期後半。58は縄文晩期の深鉢で、口縁端部に刻目を施す。59・60はサヌカイト製のスクレーパー、61は金属製の滓である。62は灰色を呈する滑石製の臼玉で、重量0.03gを測る。

時期：出土した土師器の特徴より、ＳＢ１の廃棄・埋没時期は古墳時代前期後半、４世紀後半とする。

ＳＢ２（第15・21図、図版10）

調査区北西部Ｂ２～Ｄ２区に位置する。第Ⅶ層上面で検出した。住居北側はＳＢ１を切り、住居西側は調査区外に続く。また、住居北側壁体は掘立２柱穴に切られている。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西長6.34m、南北長5.98m、壁高は約40cmを測る。住居埋土は３層に分層でき、①層黒褐色粘質土、②層黒褐色粘質シルト、③層黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に混入）である。なお、検出状況から③層は住居床面修復に伴う貼床土と考えられる。

主柱穴はＳＰ①～③の３本を検出したが、その配置から本来は４本と考えられるが、その位置には掘立２柱穴が存在している。主柱穴の規模は径48～55cm、深さ10～30cmを測り、埋土は暗褐色粘質土を基調とし、ＳＰ②は、にぶい黄褐色粘質シルトが少量混入する。このほか、住居床面にて10基の柱穴を検出した。このうち、住居南半部で検出した８基の柱穴は総柱構造の建物（掘立３）となった。建物を構成する柱穴の埋土はＳＢ２埋土と類似しており、調査時には両者の前後関係が判断できなかったが、掘立３柱穴出土品には平安時代頃の土師器片が少量含まれていた。そのほか、２基の柱穴（ＳＰ④・⑤）は黒褐色粘質土を埋土とする柱穴であり、柱穴内からは弥生土器片や土師器片が数点出土した。住居底面は第Ⅶ層であり、北側から南側へ向けて緩やかな傾斜をなす。

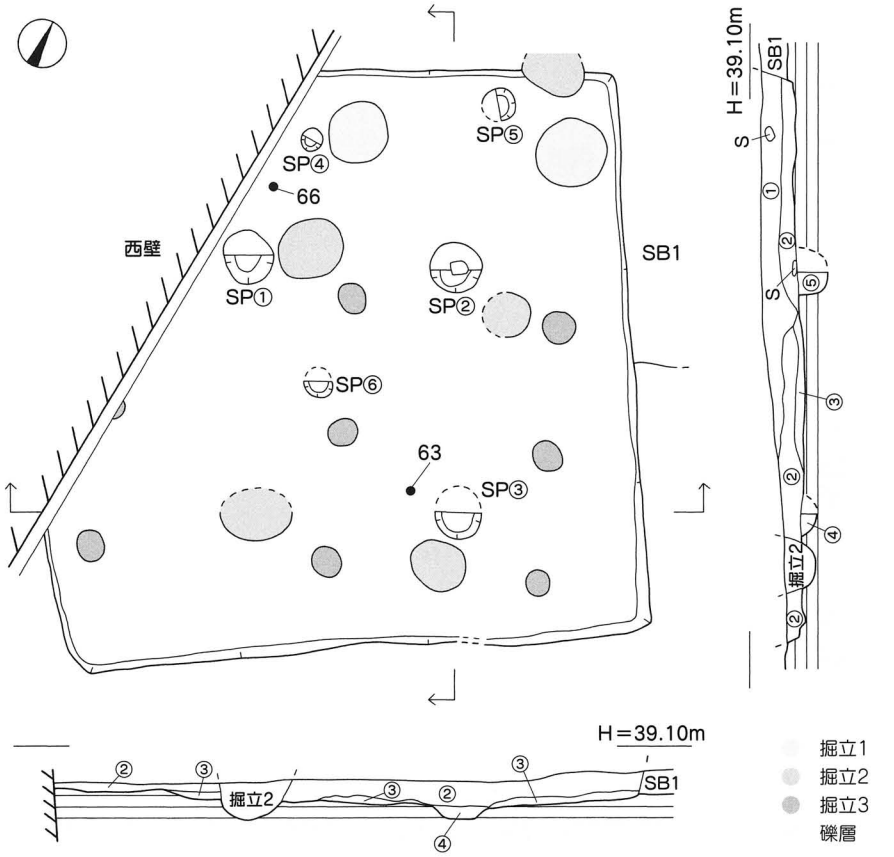
遺物は住居北西部の③層上面にて、完形の小型丸底壺（66）や住居内に設定したベルトの②層中より土師器甕（63）が出土した。また、②層中からは土師器高坏や甑片が点在して出土した。①層中からは、住居北側を中心に縄文土器や弥生土器（前期～後期）が数点出土した。

出土遺物（第27図、図版19）

63～65は土師器の甕である。63は口縁部が直立気味に立ち上がり、胴部は球形を呈する。胴部外面はハケメ調整、内面にはヘラケズリ調整を施す。64・65は口縁部がやや内湾する。66は完形の小型丸底壺で、口径9.8cm、器高6.9cmを測る。底部下半部外面には手持ちヘラケズリを施す。67～69は小型丸底壺の頸胴部片である。70～72は土師器の高坏、73は甑である。72は柱裾部境内面にわずかな稜をもつ。74～77は弥生土器の甕である。74～76は折曲口縁で、口縁端部に刻目、74・75は胴部にヘラ描き沈線文を施す。77は口縁部が断面方形状となる。弥生前期。78は弥生土器の広口壺で、口縁部は下方に垂下し、口縁端面に山形文、口縁内面に凸帯を貼り付ける。弥生中期前半～中葉。79は弥生土器

の高坏で、口縁部は大きく外反する。弥生後期後半。80は弥生土器の甕底部で、わずかに上げ底となる。弥生後期前半。81は縄文晩期の深鉢片で、口縁下端部に刻目を施す。

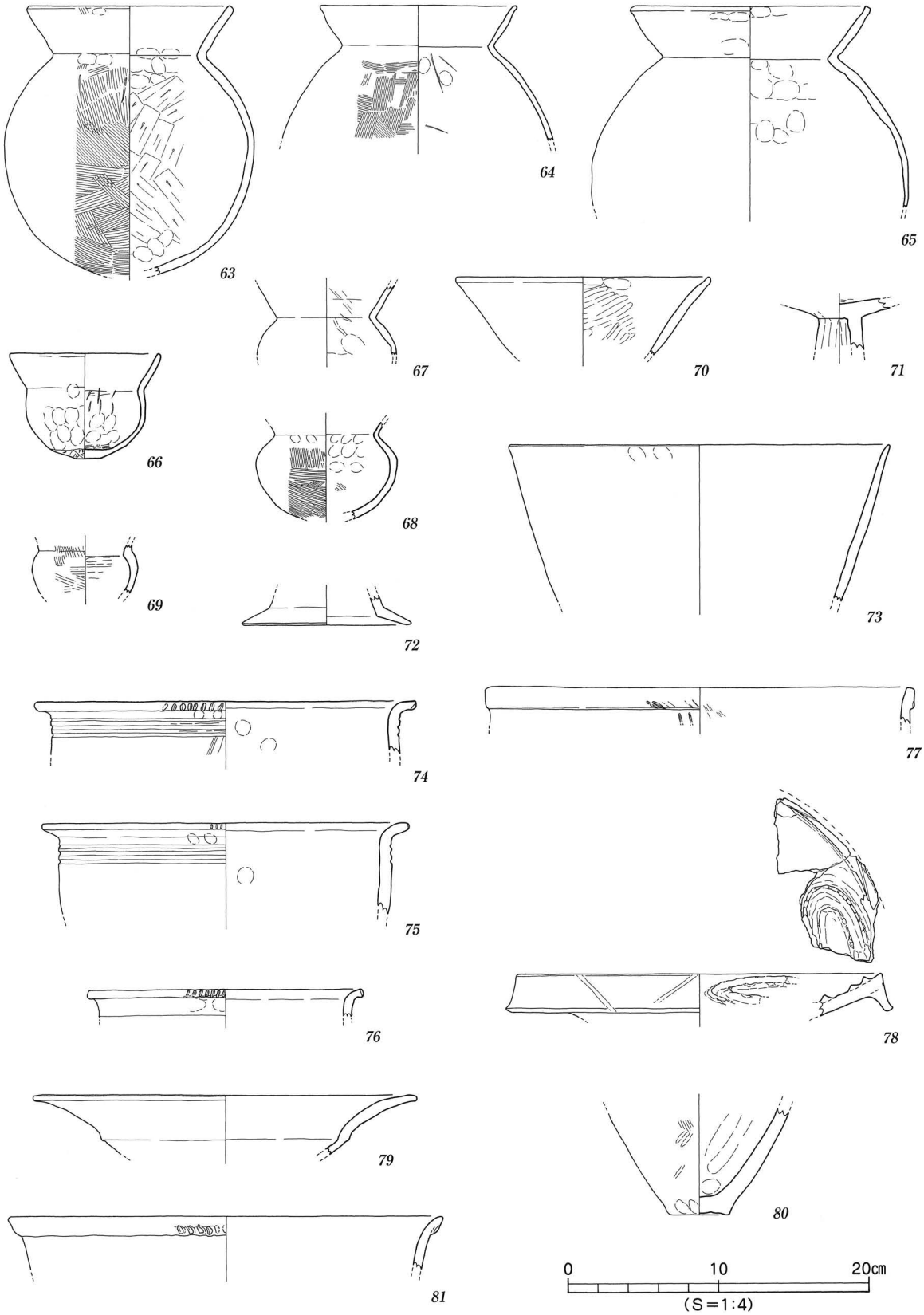
時期：出土した土師器の特徴とＳＢ１との切り合いから、ＳＢ２の廃棄・埋没時期は古墳時代中期初頭から前半、５世紀前半とする。



① 黒褐色(10YR3/1)粘質土。
② 黒褐色(10YR2/2)粘質シルト。
③ 黒褐色(10YR2/2)粘質シルト。にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質シルトがブロック状に少量混じる。
④ 暗褐色(7.5YR3/4)粘質土。
⑤ 暗褐色(7.5YR3/4)粘質土。にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質シルトの1㎝大のレンズ状ブロックが少量混じる。

0 1 2m
(S=1:80)

第26図　SB2 測量図



第27図　SB2 出土遺物実測図

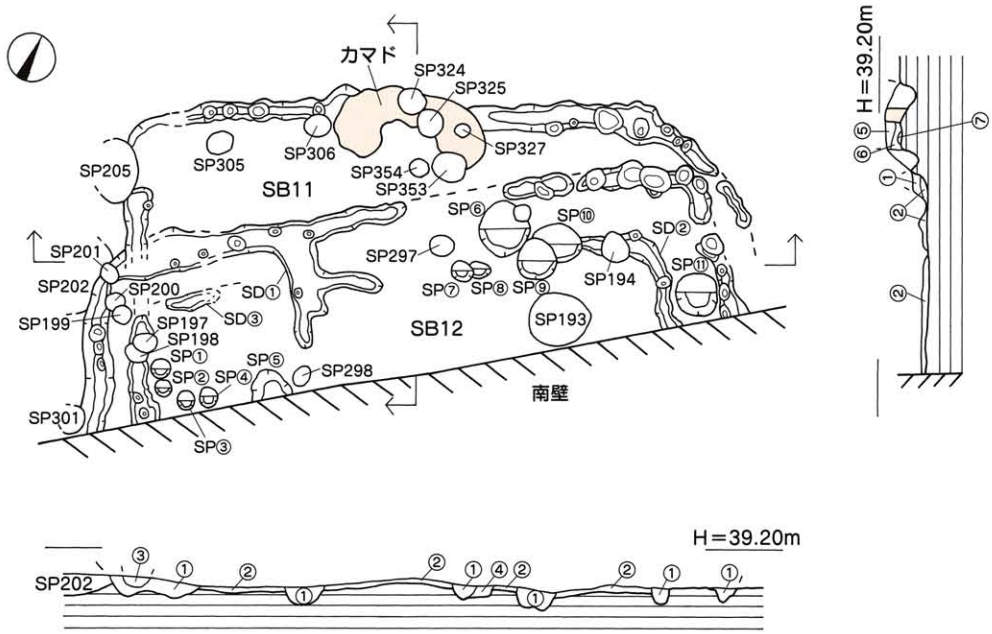
ＳＢ11（第15・28・29図、図版12）

調査区南側Ｆ２～Ｇ４区に位置する。住居南側はＳＢ12と重複し、調査区外に続く。また、住居北西隅はＳＰ205（埋土：暗褐色粘質シルト）に切られている。第Ⅶ層上面での検出であるが、調査区南壁の土層観察により第Ⅴ層中もしくは第Ⅴ層上面から掘り込まれた遺構である。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長6.8m、南北検出長3.4m、壁高は10cmを測る。住居検出時には住居埋土の大半は遺存していなかったが、調査区南壁の土層観察により住居埋土は黒褐色粘質シルトである。なお、土層観察によりＳＢ11がＳＢ12より後出することを確認した。

内部施設は周壁溝とカマドを検出した。壁溝は住居北西部と南東部を除く箇所にみられ、幅15～40cm、深さ12～16cmを測る。壁溝内には径10～20cm、深さ３～12cmを測る小ピットが点在する。壁溝及びピット埋土は住居埋土と同様の黒褐色粘質シルトである。

カマドは住居北壁中央部やや西寄りに付設されている。カマド上部は灰色土を埋土とする４基の柱穴（ＳＰ324・325・327・353）に削平され、炊口付近も一部削平を受けている。カマドは南側に開く馬蹄形状を呈し、規模は東西検出長1.62m、南北検出長0.85m、高さ約30cmを測る。カマド下部はカマド本体の形状に沿って、深さ10～15cm程度掘りくぼめた後に４層（暗灰黄褐色土）を貼って基盤としている。燃焼部中央付近に土師器の甕（84）が正置で押しつぶされた状態で出土した。接合した結果、底部は欠損していた。このほか、住居底面にて２基の柱穴（ＳＰ305・354）を検出したが、埋土は灰色土である。

遺物は埋土中より、土師器の甕や高坏の破片が少量出土した。



① 黒褐色(7.5YR3/2)粘質シルト。白色砂粒を含む。
② 黒褐色(7.5YR3/2)粘質シルト。にぶい黄褐色(10Y5/3)粘質土がブロック状に少量混じる。
③ 黒褐色(7.5YR3/2)粘質シルト。
④ 黒褐色(10YR2/2)粘質シルト。にぶい黄褐色(10Y5/3)粘質土がブロック状に少量混じる。
⑤ 灰黄褐色(10YR6/2)砂質シルト。焼土と黄色土ブロックが少量混じる。
⑥ 暗褐色(7.5YR3/3)粘質シルト。
⑦ 灰色(7.5Y5/2)粘質土。

0　1　2m
(S=1:80)

第28図　SB11・12 測量図

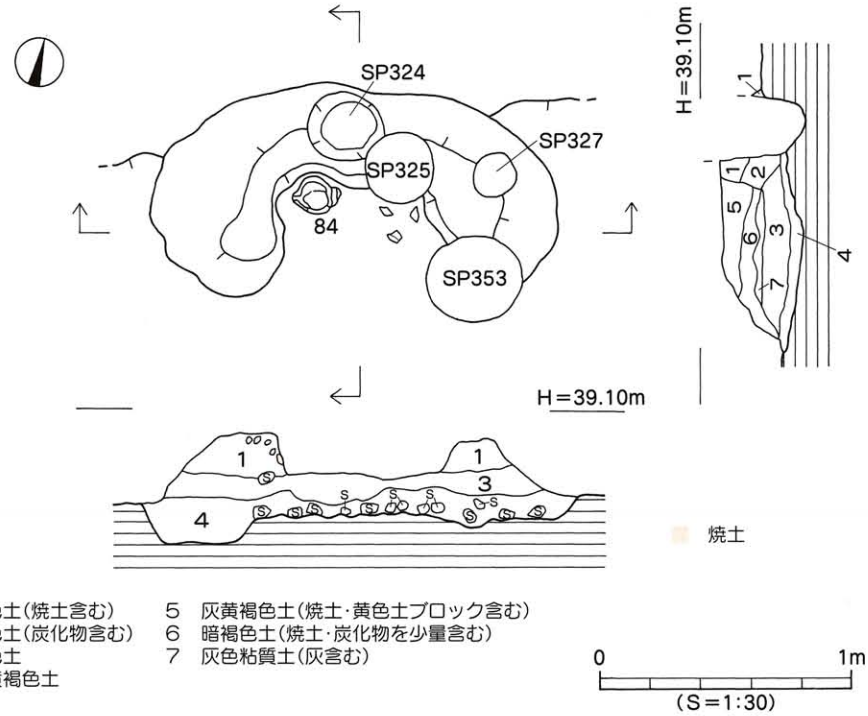
出土遺物（第30図、図版20）

82～84は土師器の甕である。82は口縁部中位が膨らみをもち、口縁端部は内方に肥厚する。83は口縁部が内湾し、口縁端部は内傾する丸みのある面をもつ。84は口縁部が外反し、口縁端部は丸く仕上げる。胴部内面にはヨコ方向の板状工具によるナデ調整を施す。85～87は土師器の高坏である。85・86は坏部片で、86は坏部下位に稜をもつ。88は土師器の椀で、口縁端部は尖り気味に仕上げる。

時期：出土遺物の特徴より、ＳＢ11の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半、５世紀後半とする。

ＳＢ12（第15・28図、図版12）

調査区南側Ｆ３～Ｇ４区に位置する。住居西壁は４基の柱穴〔ＳＰ199～201・301（埋土：灰色土）〕に切られ、南側は調査区外に続く。第Ⅶ層上面での検出である。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西長7.0m、南北検出長2.0m、壁高は検出面下15cmを測る。住居埋土は２層に分層でき、①層黒褐色粘質シルト、②層黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質土がブロック状に少量混入）である。なお、検出状況から、②層は住居床面修復に伴う貼床土と考えられる。住居壁体に沿って周壁溝を検出した。壁溝は住居北壁中央部が途切れており、幅20～40cm、深さ13～20cmを測る。壁溝埋土は住居埋土①層と同様の黒褐色粘質シルトである。このほか、埋土②層上面にて壁溝と重複する状態で溝ＳＤ①を検出した。ＳＤ①は南北方向とそれに直交する東西方向の溝で、幅16～36cm、深さ14～20cmを測る。溝埋土は壁溝埋土と同様の黒褐色粘質シルトである。両者の前後関係は判断できなかったが、埋土が酷似することから住居に伴う施設の可能性が高く、住居内を区画する仕切り溝と考えられる。また、壁溝より40～50cmほど内側にて溝ＳＤ②・③を検出した。幅16～20cm、深さ８～18cm



第29図　SB11 カマド測量図

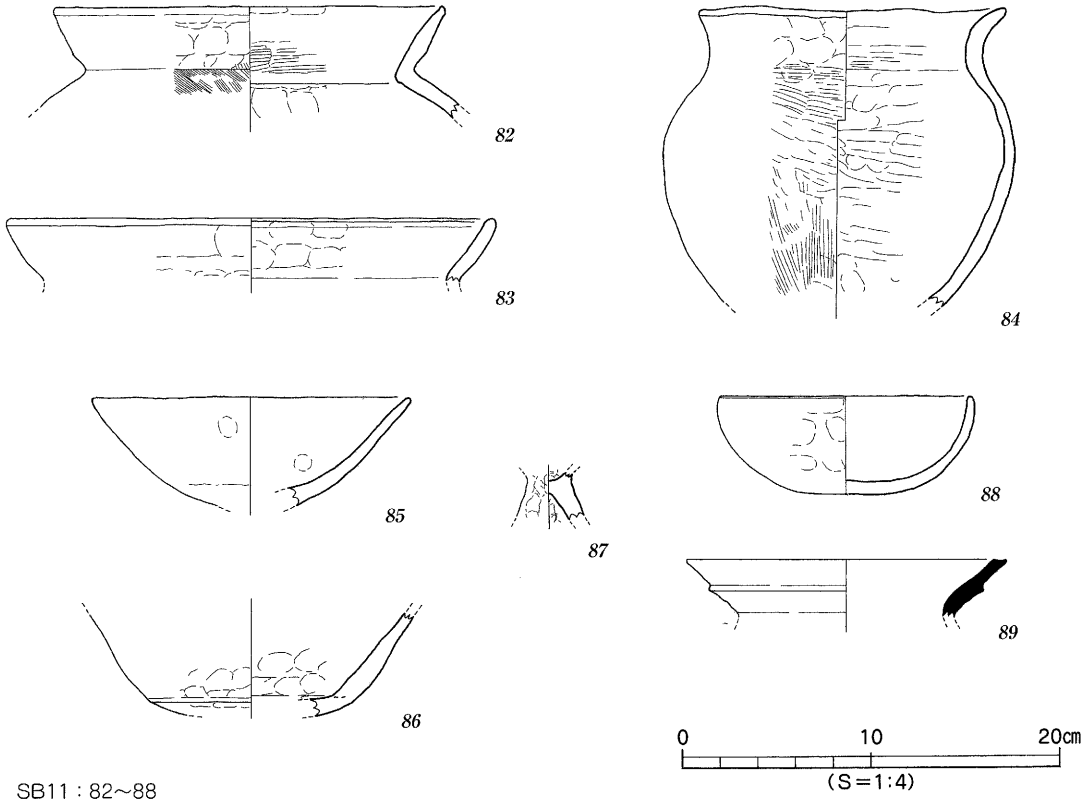
を測り、埋土は黒褐色粘質シルトである。溝内からは径６～12cm、深さ３～６cm程度の小ピットを検出したことから、ＳＤ②・③は周壁溝の可能性がある。このことから、ＳＢ12は改築が施された住居の可能性が考えられる。このほか、住居埋土②層上面にて大小11基の柱穴を検出した。各柱穴の規模は径15～44cm、深さ８～22cmを測る。埋土は２種類あり、ＳＰ①～③・⑦・⑨・⑪は黒褐色粘質シルト、ＳＰ④～⑥・⑧・⑩は黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質土がブロック状に混入）である。柱穴内からは少量の土師器片や須恵器片が出土した。住居底面はやや凹凸があり、住居中央部付近がやや高くなっている。

遺物は①層中より、土師器片や須恵器片が散在して出土した。図化しうるものを１点掲載した。

出土遺物（第30図、図版20）

89は須恵器の壺で、口縁部中位に凸線１条を施し、口縁端部は凹む。

時期：時期特定しうる遺物は少ないが、ＳＢ11に先行することから、ＳＢ12の廃棄・埋没時期は概ね、古墳時代中期後半以前、５世紀中葉から後半とする。

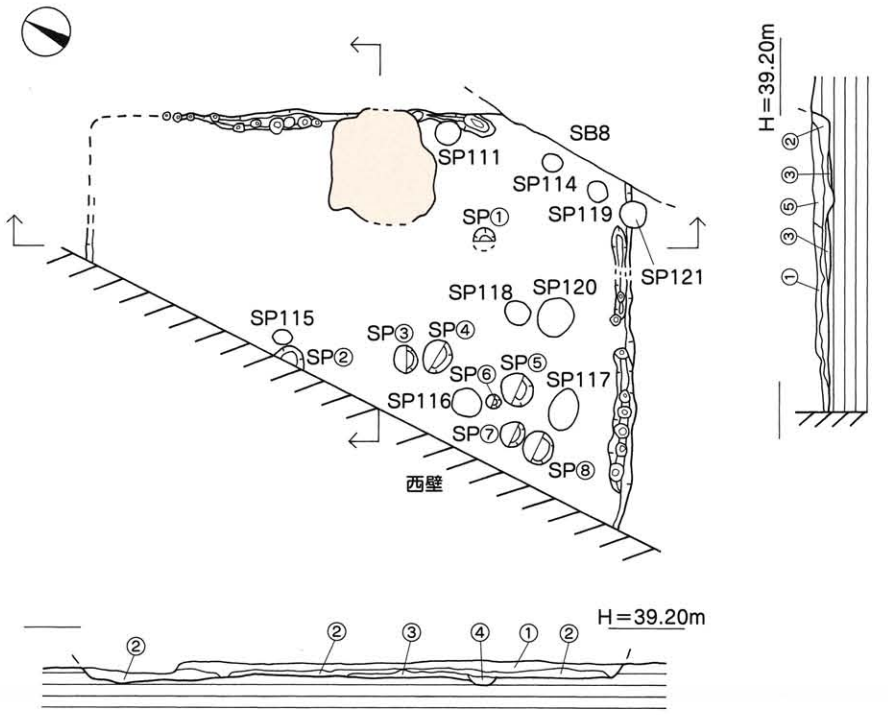


第30図　SB11・12 出土遺物実測図

ＳＢ10（第15・31・32図、図版13）

調査区中央部やや南西寄りＥ１～Ｆ２区に位置する。住居北東隅はＳＢ８に切られ、南側は調査区外に続く。住居検出時には、住居上面にて９基の柱穴（ＳＰ111・114～121）を検出した。柱穴埋土はすべて灰色土である。第Ⅶ層上面での検出であるが、調査区西壁の土層観察により第Ⅴ層中もしくは第Ⅴ層上面から掘り込まれた遺構である。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は南北長5.72m、東西検出長4.36m、壁高は15～20cmを測る。住居埋土は３層に分層でき、①層黒褐色粘質シルト、②層黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質土がブロック状に少量混入）、③層黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質土が縞状のレンズ状に混入）である。なお、検出状況から③層は住居床面修復に伴う貼床土と考えられる。内部施設は、周壁溝とカマドを検出した。壁溝は住居北壁及び東壁にて部分的に検出され、径10～16cm、深さ８～18cmを測る。また壁溝内にて径８～16cm、深さ３～８cmを測る小ピットを検出した。小ピットは壁溝に伴う杭痕と考えられる。壁溝及びピット埋土は、黒褐色粘質シルトである。

カマドは住居北壁中央部に付設されている。第Ⅳ層掘り下げ時に住居上面にて焼土の広がりを検出したことから、カマドの存在を確認した。なお、焼土や炭を含む灰褐色土が1.1m×1.2mの範囲に検出されたがカマドの形状を確認するには至らなかった。カマド下部は円形状に３～６cm程度掘りくぼめられ、３層（黒褐色土と黄色土の混合土）を貼って基盤としている。カマド燃焼部と思われる位置に、



① 黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。
② 黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。にぶい黄褐色(10Y5/3)粘質土がブロック状に少量混じる。
③ 黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土が縞状のレンズ状に混じる。
④ 黒褐色(10YR2/2)粘質シルト。にぶい黄褐色(10Y5/3)粘質土がレンズ状に混じる。
⑤ 灰黄褐色(10YR6/2)砂質シルト。焼土が少量混じる。

第31図　SB10 測量図

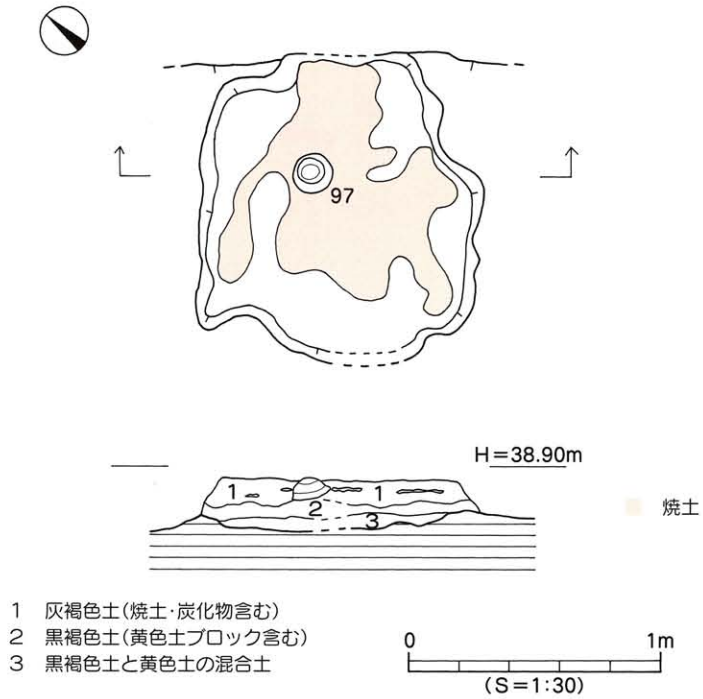
土師器高坏（97）の坏部が伏せた状態で出土した。脚部は破損している。坏部内側には黒褐色土が充填されており、高坏はカマドの廃絶まで存在したことが伺われる。よって、高坏は何らかの祭祀に伴う遺物と考えられる。なお、高坏の外面には二次的な焼成を受けた痕跡や煤などは認められなかった。

このほか、住居埋土③層上面及び住居底面にて大小８基の柱穴を検出した。③層上面では２基の柱穴〔ＳＰ①・⑤：黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質土がレンズ状に混入）〕、住居底面では６基の柱穴〔ＳＰ②～④・⑥～⑧：黒褐色粘質シルト〕を検出した。柱穴規模は径15～30cm、深さ６～10cmを測る。柱穴からは少量の土師器片が出土した。

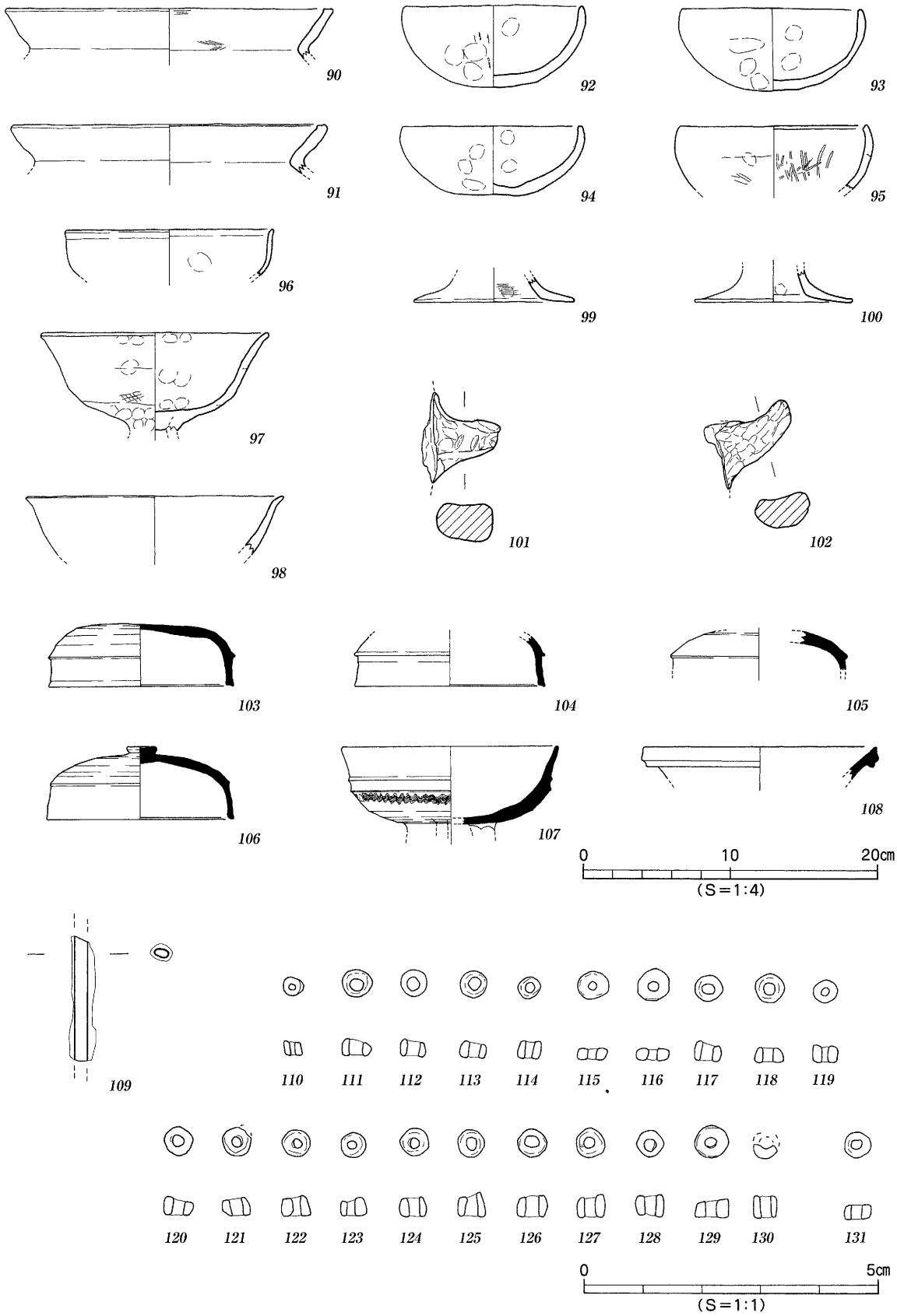
遺物は①層及び②層中より、完形の土師器椀（92）や須恵器のほか、鉄器（109）が出土した。また、整理作業時には、発掘調査で採取した住居埋土の水洗いやふるい作業をおこない臼玉21点とガラス小玉１点が出土した。

出土遺物（第33図、図版20）

90・91は土師器の甕である。口縁端部は内傾し、内側にやや肥厚する。92～96は土師器の椀である。92は口径12.0cm、器高5.5cmを測る完形品である。92～95は口縁部が内湾し、92～94は口縁端部が尖り気味、95は内傾する面をもつ。97～100は土師器の高坏である。97はカマド出土品で坏部は深く、坏部下位に稜をもつ。99・100は脚部片で、柱裾部境内面に稜をもつ。101・102は土師器甑の把手部で、断面楕円形を呈する。103～105は須恵器坏蓋である。103は天井部が扁平で、口縁端部は水平な凹面をなす。106は須恵器有蓋高坏の蓋、107は無蓋高坏である。107は口縁部が直立し、体部中位に凸線２条と波状文を施す。108は須恵器の広口壺で、口縁端部は断面三角形状となる。109は器種不明の鉄器であ



第32図　SB10 カマド測量図



第33図　SB10 出土遺物実測図

る。110～130は滑石製の臼玉である。直径0.36～0.57cm、厚さ0.18～0.41cm、重さ0.03～0.15gを測る。色調で分類すると、灰色４点、緑灰色９点、黒灰色８点となる。131はガラス小玉である。直径0.50cm、厚さ0.25cm、重さ0.09gを測る。色調は青色を呈する。

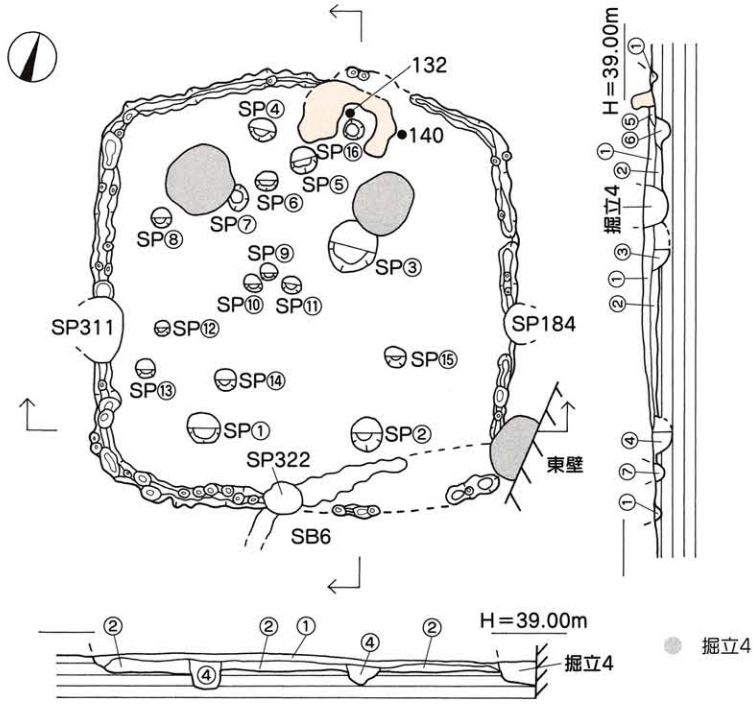
時期：出土遺物の特徴より、ＳＢ10の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半、５世紀後半とする。

ＳＢ５（第15・34・35図、図版14・15）

調査区中央部南東寄りＥ３・４区に位置する。第Ⅶ層上面にて検出した。住居南東隅はＳＢ６と掘立４柱穴に切られ、住居壁体は暗褐色粘質シルトを埋土とする３基の柱穴（ＳＰ184・311・322）に切られている。住居の平面形態は方形を呈し、規模は東西長4.47m、南北長4.74m、壁高は10～20cmを測る。住居埋土は２層に分層でき、①層黒褐色粘質シルト、②層黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質土がブロック状に少量混入）である。なお、検出状況から②層は住居床面修復に伴う貼床土と考えられる。

内部施設は、周壁溝とカマドを検出した。壁溝は住居壁体に沿ってほぼ全周し、幅６～30cm、深さ２～15cmを測る。壁溝埋土は黒褐色粘質シルトである。壁溝底面には径５～15cm、深さ２～５cmを測る小ピットを多数検出した。

カマドは住居北壁中央部、周壁溝に接して付設されている。第Ⅳ層掘り下げ時に住居上面にて焼土が検出されたことから、カマドの存在を確認した。形状は南側に開く馬蹄形状を呈するが、調査ではカマド上部は削平されており、下部のみの検出である。規模は東西長0.96m、南北長0.74m、高さ20cmを測る。カマドは壁溝に接する半円形の範囲（東西2.0m、南北1.7m）を深さ10～30cm程度掘り下げた



① 黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。
② 黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土がブロック状に少量混じる。
③ 黒色(10YR2/1)粘質シルト。
④ 黒褐色(10YR2/2)粘質シルト。
⑤ 黒褐色(10YR2/2)粘質シルト。炭化物を少量含む。
⑥ 黒褐色(10YR3/1)粘質シルト。
⑦ 極暗褐色(7.5YR2/3)粘質シルト。

0　1　2m
(S=1:80)

第34図　SB5 測量図

後、硬くしまった灰黄褐色土（５層）を貼り基盤としている。これは、住居構築以前にカマドの位置があらかじめ決められていたことを示している。また、カマド炊口のあたりには径45cm、深さ30cmのピット１基（ＳＰ⑯）を検出した。

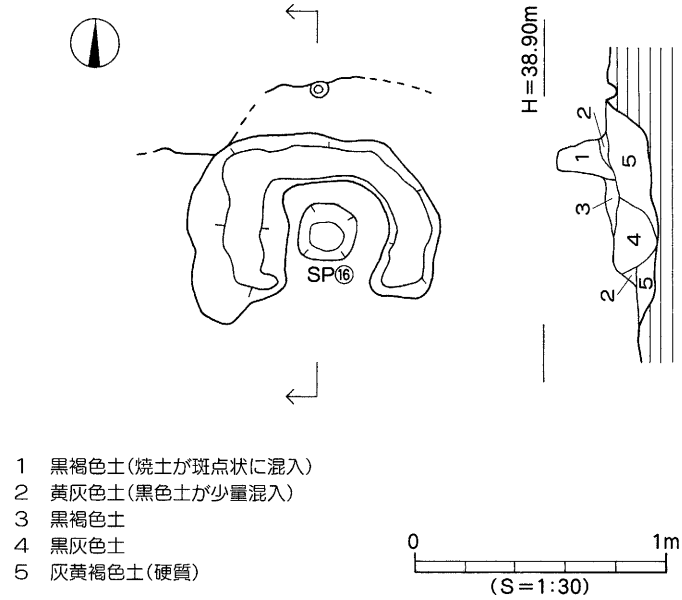
このほか、埋土②層上面にて10基の柱穴（ＳＰ①・②・⑤・⑦・⑨～⑪：黒褐色粘質シルト、ＳＰ③・⑥・⑭：黒色粘質シルト）、住居底面からは５基の柱穴（ＳＰ④・⑧・⑫・⑬・⑮：黒色粘質シルト）を検出した。各柱穴は径10～50cm、深さ10～30cmを測り、柱穴内からは土師器片や須恵器片が数点出土した。

遺物はカマド燃焼部内にて、土師器甕（132）が正置で押しつぶされた状態で出土したが、復元すると完形品となった。そのほか、カマド東側袖部付近からは須恵器坏身（140）が出土したほか、②層中からは土師器片や須恵器片が散在して出土した。

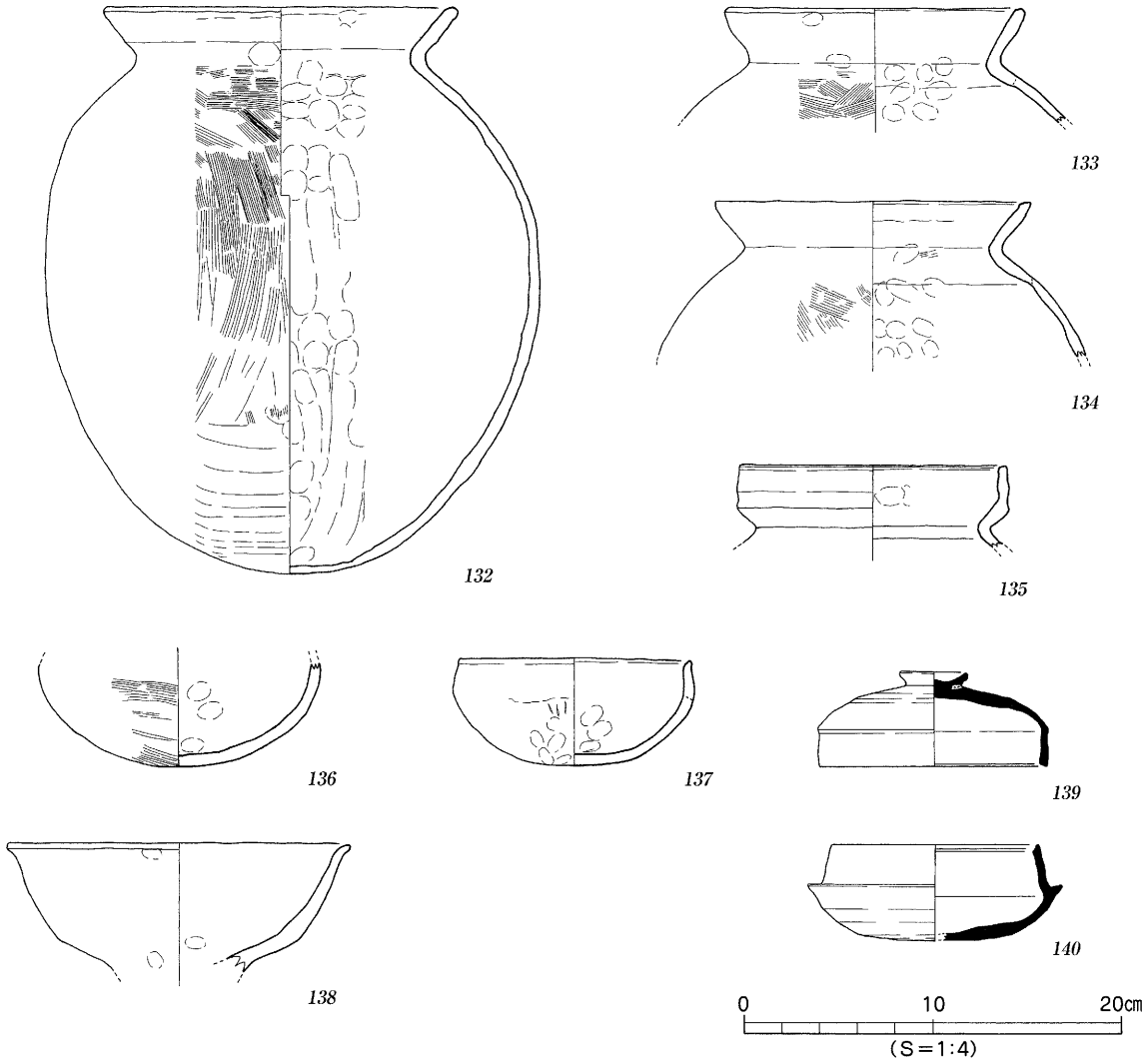
出土遺物（第36図、図版21）

132～134は土師器の甕である。132はカマド出土品で、復元完形品である。口径18.4cm、器高28.0cmを測る。口縁部は直立気味に立ち上がり、胴部外面はハケメ調整、内面はナデ調整を施す。133は口縁中位に膨らみをもち、口縁端部は内傾する。134は口縁端部が内傾する丸みのある面をもち、内側にやや肥厚する。135･136は土師器の壺である。135は二重口縁壺で、口縁端部は内傾する凹面をなす。137は土師器の椀である。口縁部は直立し、口縁端部は内傾する。138は土師器の高坏で、坏部下位はわずかに稜をなし、口縁部は外反する。139は須恵器有蓋高坏の蓋で、つまみ中央部が凹む。140は須恵器坏身で、推定口径10.8cmを測る。

時期：出土遺物の特徴より、ＳＢ５の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半、５世紀後半とする。



第35図　SB5 カマド測量図



第36図　SB5 出土遺物実測図

ＳＢ３（第15・37図）

調査区中央部東寄りＣ３～Ｄ４区に位置し、住居東側は調査区外に続く。第Ⅶ層上面での検出であるが、ベルトの土層観察によりＳＸ１上面から掘り込まれていることを確認した。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長4.56m、南北長4.74m、壁高は約20cmを測る。住居埋土は２層に分層でき、①層黒褐色粘質シルト、②層黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質土がブロック状に少量混入）である。なお、検出状況から②層は住居床面修復に伴う貼床土と考えられる。住居床面からは大小６基の柱穴を検出したが、主柱穴を特定するには至らなかった。各柱穴は径36～80cm、深さ８～25cmを測る。柱穴埋土は３種類あり、ＳＰ①・③・⑤は黒色粘質シルト、ＳＰ②・⑥は暗褐色粘質シルト（にぶい黄褐色土がブロック状に混入）、ＳＰ④は褐色粘質シルトである。なお、ＳＰ⑤からは柱痕を検出した。住居底面は第Ⅶ層であり、やや凹凸が認められる。遺物は①層中より弥生土器片や土師器片、須恵器片が混在して出土した。

出土遺物（第37図）

141は須恵器坏蓋で、推定口径11.2cmを測る。丸みのある天井部をもち、口縁部は内傾する。142・143は土師器高坏である。142は口縁部がわずかに外反する。144～147は弥生土器の甕である。144・145は口唇部に凸帯を貼り付け、144は凸帯上に押圧、145は刻目を施す。146・147は口唇部より下がった位置に凸帯を貼り付け、凸帯上に刻目を施す。弥生前期前半。148～150は弥生土器の壺である。148は肩部に貝殻施文による列点文を施す。弥生中期後半。149は肩部片で、ヘラ描き沈線文と弧文及び斜線文を施す。弥生前期。150は底部片で、外面にヘラ描き沈線文２条を施す。弥生前期。

時期：出土した土師器や須恵器の特徴より、ＳＢ３の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半、５世紀後半とする。

ＳＢ８（第15・38・39図、図版16）

調査区中央部南寄りＥ２～Ｆ３区に位置する。第Ⅶ層上面にて検出した。住居南側はＳＢ９と重複し、西側はＳＢ10を切り、北東部は掘立４柱穴及びＳＰ291（埋土：暗褐色粘質シルト）に切られている。なお、住居検出時にはＳＢ８中央部は既に床面が露出する状況であった。また、調査当初にはＳＢ９をＳＢ８と同一住居と判断し、掘り下げや遺物の取り上げをおこなったため、両者の遺物は混在している可能性が高い。ここでは、一括してＳＢ８出土遺物として実測図を掲載している。

住居の平面形態は南北にやや長い方形を呈し、規模は東西長4.88m、南北長5.40m、壁高は10～12cmを測る。住居埋土は、極暗褐色粘質シルトである。内部施設は主柱穴と周壁溝、及びカマドを検出した。主柱穴はＳＰ①・③・⑯・㉒の４本と考えられ、規模は径14～80cm、深さ20～25cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色粘質シルトである。周壁溝は、住居南東部と南西部で部分的に検出した。幅６～20cm、深さ２～10cmを測り、埋土は住居埋土と同様の極暗褐色粘質シルトである。また、住居北東部や北西部では径３～10cm、深さ３～６cmを測る小ピット列を検出した。

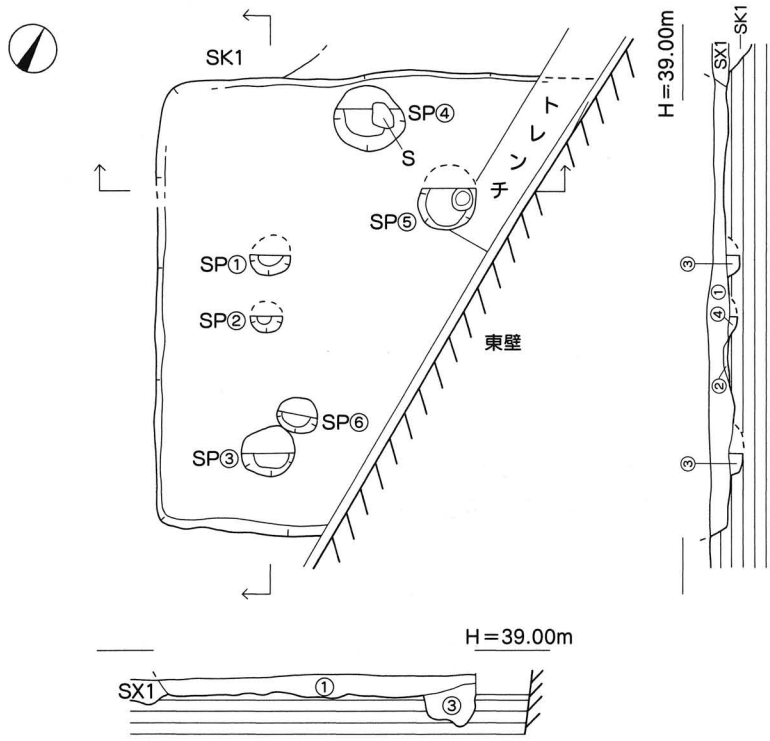
カマドは、住居北壁中央部に付設されている。第Ⅳ層掘り下げ時に住居上面付近から焼土を検出したことから、カマドの存在を確認した。平面形態は南側に開く馬蹄形状を呈し、規模は東西長1.0m、南北長0.86m、高さ15cmを測る。カマドは住居北壁に接する半円形の範囲（1.0m×1.2m）について、深さ４～10cm程度に床面を掘りくぼめた後、黄灰色土を貼り基盤としている。

このほか、住居底面にて大小21基の柱穴を検出した。柱穴規模は径10～60cm、深さ８～50cmを測る。柱穴埋土は４種類あり、極暗褐色粘質シルト：ＳＰ②・⑤・⑥・⑪～⑬・⑱・⑳・㉕、黒褐色粘質シルト：ＳＰ⑦・⑮・⑰・㉑、黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質土が混入）：ＳＰ④・⑧・⑭、黒色粘質シルト：ＳＰ⑨・⑩・⑲・㉓・㉔である。各柱穴からは、弥生土器片や土師器片、須恵器片が数点出土した。

住居底面は第Ⅶ層であり、やや凹凸が認められる。遺物はカマド内の埋土中より土師器片（154・155）や須恵器坏身（160）が出土したほか、住居埋土中より弥生土器片や土師器片、須恵器片が出土したほか、完形の土錘や石庖丁片が出土した。なお、出土した土師器、須恵器の特徴より、本来はカマド出土品や須恵器壺（164）などがＳＢ８、須恵器坏蓋（158・159）や甕（165）などがＳＢ９に帰属する遺物と考えられる。

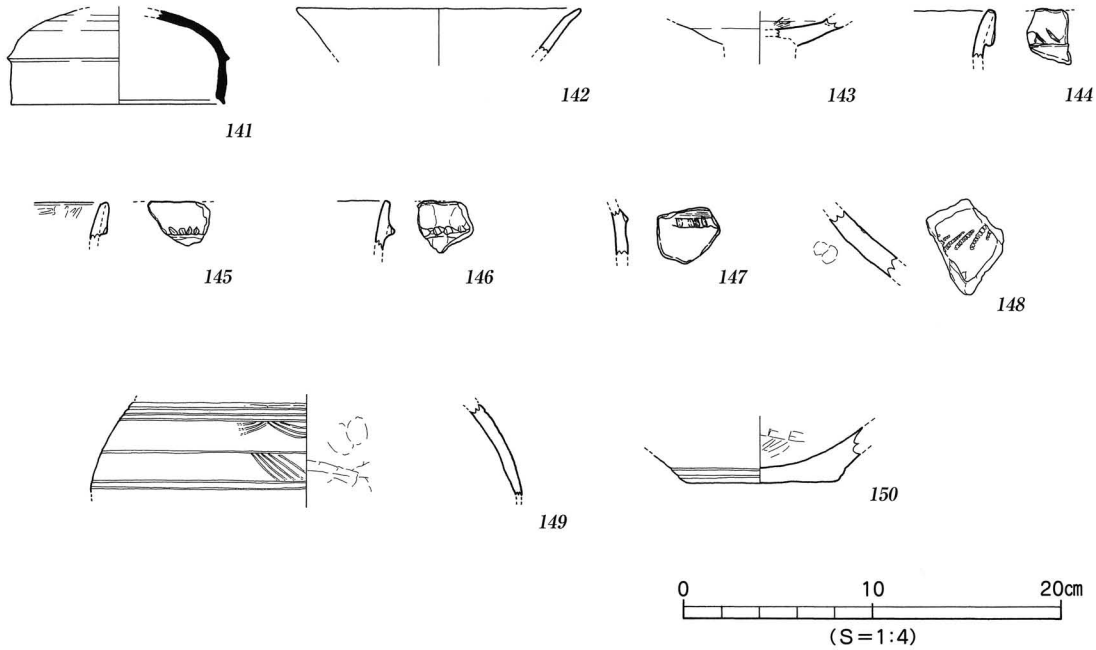
出土遺物（第40図、図版21）

151・152は土師器の甕である。151は口縁端部が内傾し、口縁端部内面は内側に肥厚する。152は口



① 黒褐色(10YR2/3)粘質シルト。
② 黒褐色(10YR2/3)粘質シルト。
にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土がブロック状に少量混じる。
③ 黒色(10Y2/1)粘質シルト。
④ 暗褐色(7.5YR3/4)粘質シルト。
にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土のレンズ状ブロックが混じる。

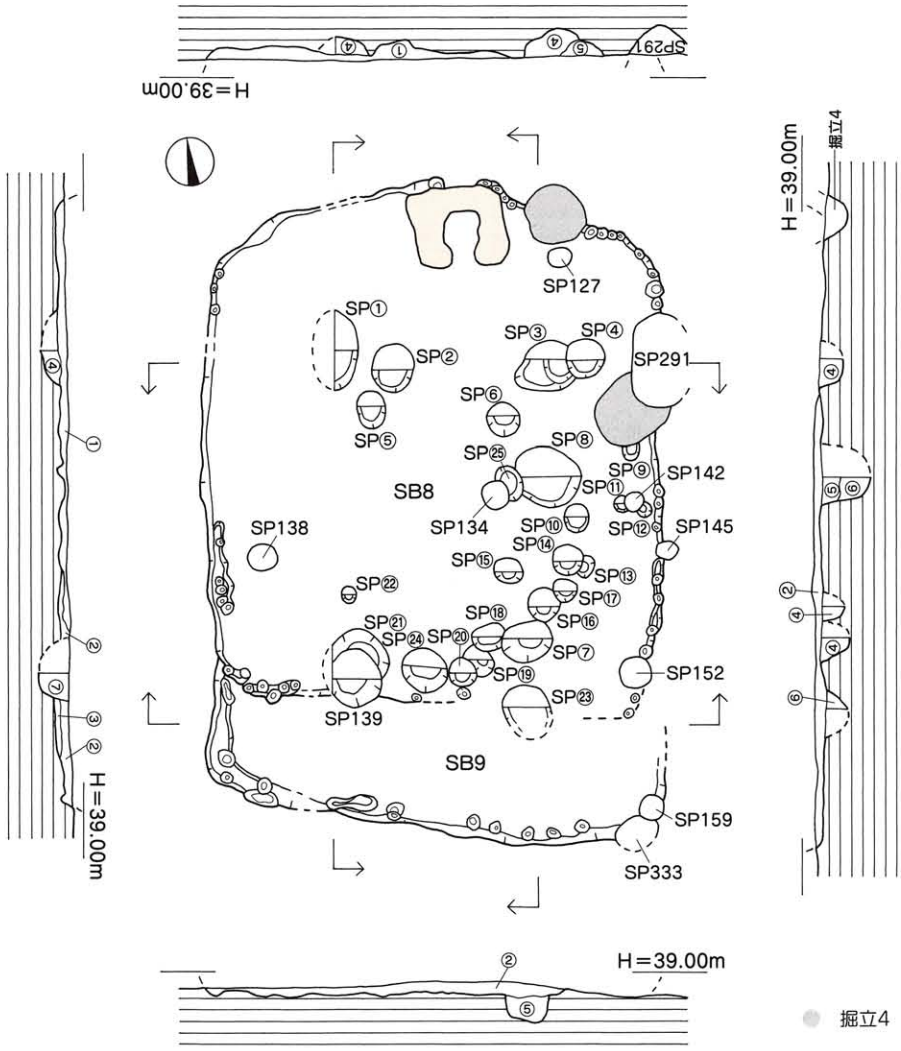
0 1 2m
(S=1:80)



第37図　SB3 測量図・出土遺物実測図

縁部が直立気味に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。153～155は土師器の高坏で、153は坏部下位に稜をもち、154・155は柱裾部境内面に明瞭な稜をもつ。156は土師器の椀で、口縁端部は丸く仕上げる。158・159は須恵器坏蓋である。推定口径12cm以上を測り、口縁端部は内傾する。160は須恵器坏身で、推定口径11.9cmを測る。たちあがりは低く内傾し、たちあがり端部は丸く仕上げる。161は須恵器有蓋高坏の蓋、162は脚部である。163は須恵器の短頸壺で、口縁端面に沈線１条が巡る。164は須恵器の広口壺で、口縁端部は上下方に拡張する。165は須恵器甕の頸部片で、波状文を施す。166は弥生前期の壺で、ヘラ描き沈線文と木葉文を施す。167は完形の土錘で、長さ4.3cm、幅1.3cmを測り、径0.4cmの孔を穿つ。168は結晶片岩製の石庖丁である。

時期：カマド内出土品の特徴より、ＳＢ８の廃棄・埋没時期は古墳時代後期後半、６世紀後半とする。



① 極暗褐色(7.5YR2/3)粘質シルト。
② 極暗褐色(7.5YR2/3)粘質シルト。にぶい黄褐色(10Y5/3)粘質土がブロック状に少量混じる。
③ 極暗褐色(7.5YR2/3)粘質シルト。にぶい黄褐色(10Y5/3)粘質土のブロックが多く混じる。
④ 黒褐色(10YR2/2)粘質シルト。
⑤ 黒褐色(10YR2/2)粘質シルト。にぶい黄褐色(10Y5/3)粘質土のレンズ状ブロックが少量混じる。
⑥ 黒色(10Y2/1)粘質シルト。
⑦ オリーブ黒色(10Y3/1)粘質シルト。

0 1 2m
(S=1:80)

第38図　SB8・9 測量図

ＳＢ９（第15・38図、図版16）

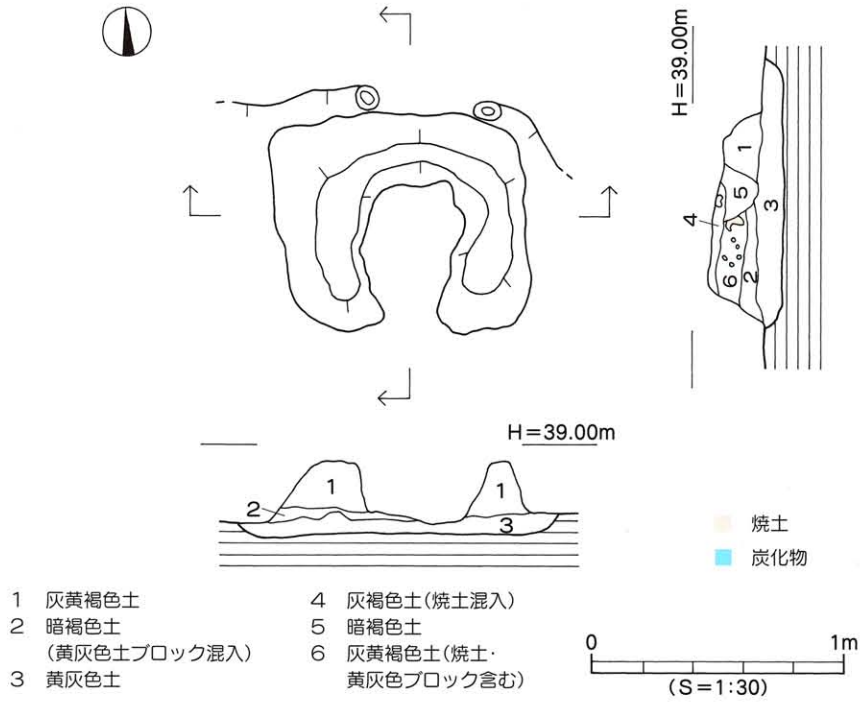
調査区南側Ｆ２・３区に位置する。第Ⅶ層上面で検出した。住居北側はＳＢ８、南東隅は２基の柱穴（埋土：灰色土）に切られ、東側壁体は消失している。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西長4.36m、南北検出長1.50m、壁高は8～12cmを測る。住居埋土は２層に分層でき、①層極暗褐色粘質シルト、②層極暗褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質土がブロック状に混入）である。なお、検出状況から②層は住居床面修復に伴う貼床土と考えられる。住居南西部壁体に沿って、幅15～20cm、深さ８～12cmを測る周壁溝を検出した。また、住居南側壁体に沿って、径10～16cm、深さ３～12cmを測る小ピットを検出した。ピットは壁溝に伴う杭痕と考えられる。壁溝及びピット埋土は、極暗褐色粘質シルト（にぶい黄褐色土がブロック状に混入）である。

住居底面は第Ⅶ層であり、やや凹凸が認められる。遺物はＳＢ８として一括で取り上げられたため、厳密には識別することはできないが、ＳＢ８出土遺物として第40図に掲載した遺物のうち、土師器甕（151）や須恵器坏蓋（158・159）などがＳＢ９帰属遺物と考えられる。

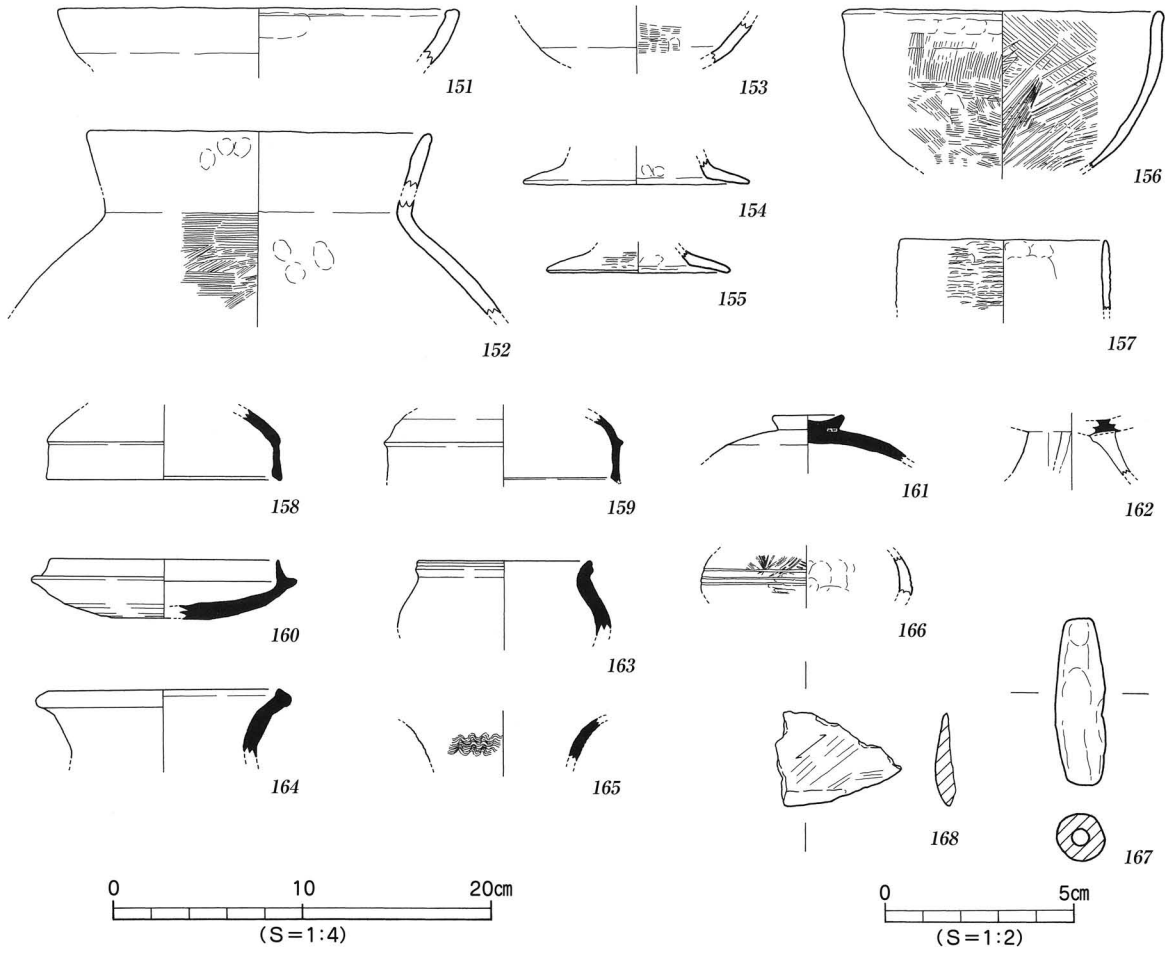
時期：出土遺物の特徴とＳＢ８に先行することから、ＳＢ９の廃棄・埋没時期は古墳時代後期前半、６世紀前半とする。

ＳＢ６・７（第15・41図、図版15）

調査区南東部Ｅ・Ｆ４区に位置する。第Ⅶ層上面での検出であるが、住居検出時には壁体が遺存しておらず、周壁溝のみの検出である。周壁溝は二重に巡っているが、平面精査では重複関係が認められず、同一住居か個別の住居の重複であるかは判断し得なかった。ここでは便宜上、外側を巡る周壁溝を持つ住居をＳＢ６、内側を巡る住居をＳＢ７として報告する。なお、整理作業において土層堆積を検討していく中で、ＳＢ７がＳＢ６に先行することが確認された。



第39図　SB8 カマド測量図



第40図　SB8 出土遺物実測図

①　SB6

住居北部はＳＢ５を切り、住居北東部は掘立４柱穴、住居北西部は２基の柱穴〔ＳＰ180・322（埋土：暗褐色粘質シルト)〕に切られている。調査区南壁及び東壁の土層観察により、第Ⅲ層が住居上面を覆う。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長3.6m、南北検出長4.4mを測る。調査区東壁の土層観察により、住居埋土は極暗褐色粘質シルトである。

壁溝は住居北西部で検出され、幅16～20cm、深さ６～20cmを測る。また、住居南西部では径８～16cm、深さ４～10cm程度の小ピット列を検出したが、壁溝に伴う杭痕と考えられる。壁溝及びピット埋土は極暗褐色粘質シルトである。遺物は壁溝内から土師器片が少量出土したが、図化しうるものはない。

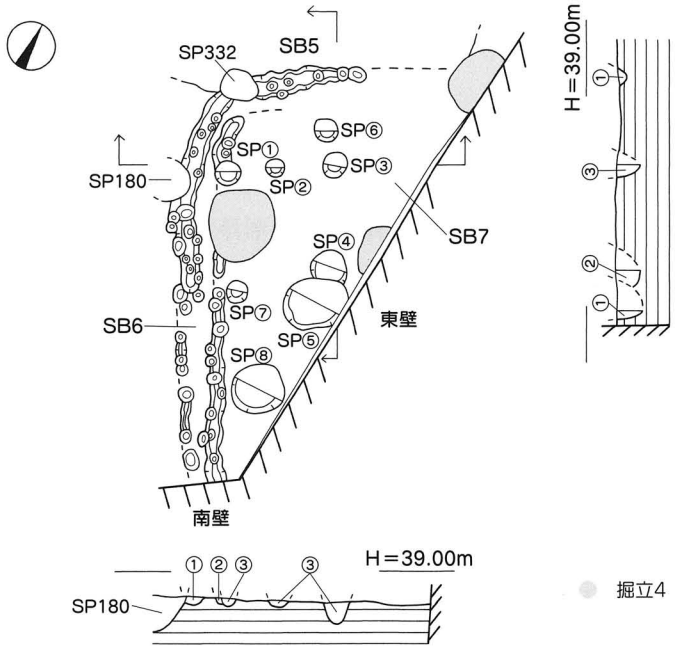
②　SB7

住居西側壁体及び東側は掘立４柱穴に切られ、住居南側や東側は調査区外に続く。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長2.8m、南北検出長3.9mを測る。調査区東壁、南壁の土層

観察により、住居埋土は極暗褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に少量混入）である。周壁溝は住居西側で検出され、幅12～20cm、深さ５～10cmを測る。壁溝内からは、径10～15cm、深さ３～10cmの小ピットを多数検出した。壁溝及びピット埋土は、住居埋土と同様の極暗褐色粘質シルトである。

住居底面にて大小８基の柱穴を検出したが、主柱穴は特定できなかった。各柱穴は径20～60cm、深さ８～30cmを測る。柱穴埋土は３種類あり、ＳＰ①～③は灰黄褐色砂質シルト、ＳＰ⑤～⑦は極暗褐色粘質シルト、ＳＰ④・⑧は極暗褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に少量混入）である。柱穴内からは土師器片や須恵器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、検出層位やＳＢ５との切りあいと住居埋土がＳＢ８と酷似することなどから、ＳＢ６・７の廃棄・埋没時期は概ね古墳時代後期、６世紀代とする。



① 極暗褐色(7.5YR2/3)粘質シルト。
② 極暗褐色(7.5YR2/3)粘質シルト。にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質シルトのブロックが少量混じる。
③ 灰黄褐色(10YR6/2)砂質シルト。

0　1　2m
(S=1:80)

第41図　SB6・7 測量図

2）掘立柱建物

掘立１（第15・42図）

調査区北西部Ａ２～Ｂ３区に位置する。東西３間以上、南北１間以上の総柱建物で、ＳＢ１及びＳＢ２との切り合いより、掘立１は２棟の住居より後出する。建物を構成する７基の柱穴（ＳＰ①～⑦）は第Ⅶ層上面及びＳＢ１、ＳＢ２床面にて検出した。建物規模は東西検出長7.19m、南北検出長3.14mを測り、建物方位をN－22°－Wにとる。各柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径36～104cm、深さは検出面下18～30cmを測る。柱穴掘り方埋土は８層あり、①層暗褐色粘質シルト、②層暗褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質シルトが混入）、③層黒褐色粘質シルト、④層黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質シルトが混入）、⑤層黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に混入）、⑥層暗褐色粘質シルト、⑦層暗褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に少量混入）、⑧層黒褐色粘質シルトである。なお、②層や⑦層中には径３～５cm大の礫が少量含まれている。柱痕は５基の柱穴（ＳＰ③～⑦）で検出した。規模は径12～24cm、深さは検出面下44～80cmを測る。柱痕埋土はオリーブ黒色粘質土である。ＳＰ④・⑤では、柱痕上面にて径10cmと30cm大の扁平な石を検出したほか、ＳＰ⑤・⑥は柱穴上位が部分的ではあるが段掘り状となっている。いずれの柱痕も②層または⑤層が覆っていることから、柱は抜き取られたものと考えられる。

遺物は、柱穴掘り方埋土中より弥生土器片や土師器片、須恵器片が少量出土した。

出土遺物（第42図）

169は須恵器坏蓋で、推定口径12.2cmを測る。170は須恵器高坏の脚部片で、長方形状の透かしを２箇所で看取する。171は弥生土器の甕で、頸部に貼付凸帯文１条を施し、凸帯上に布目痕が残る。172・173は弥生土器の壺で、172は口縁端面に凹線文と円形浮文を施す。173は肩部に刻目を施す。171～173は弥生中期後半。174は弥生土器の高坏である。弥生後期。

時期：出土した須恵器の特徴とＳＢ１・２に後出することから、古墳時代後期後半、６世紀後半とする。

掘立２（第15・43図）

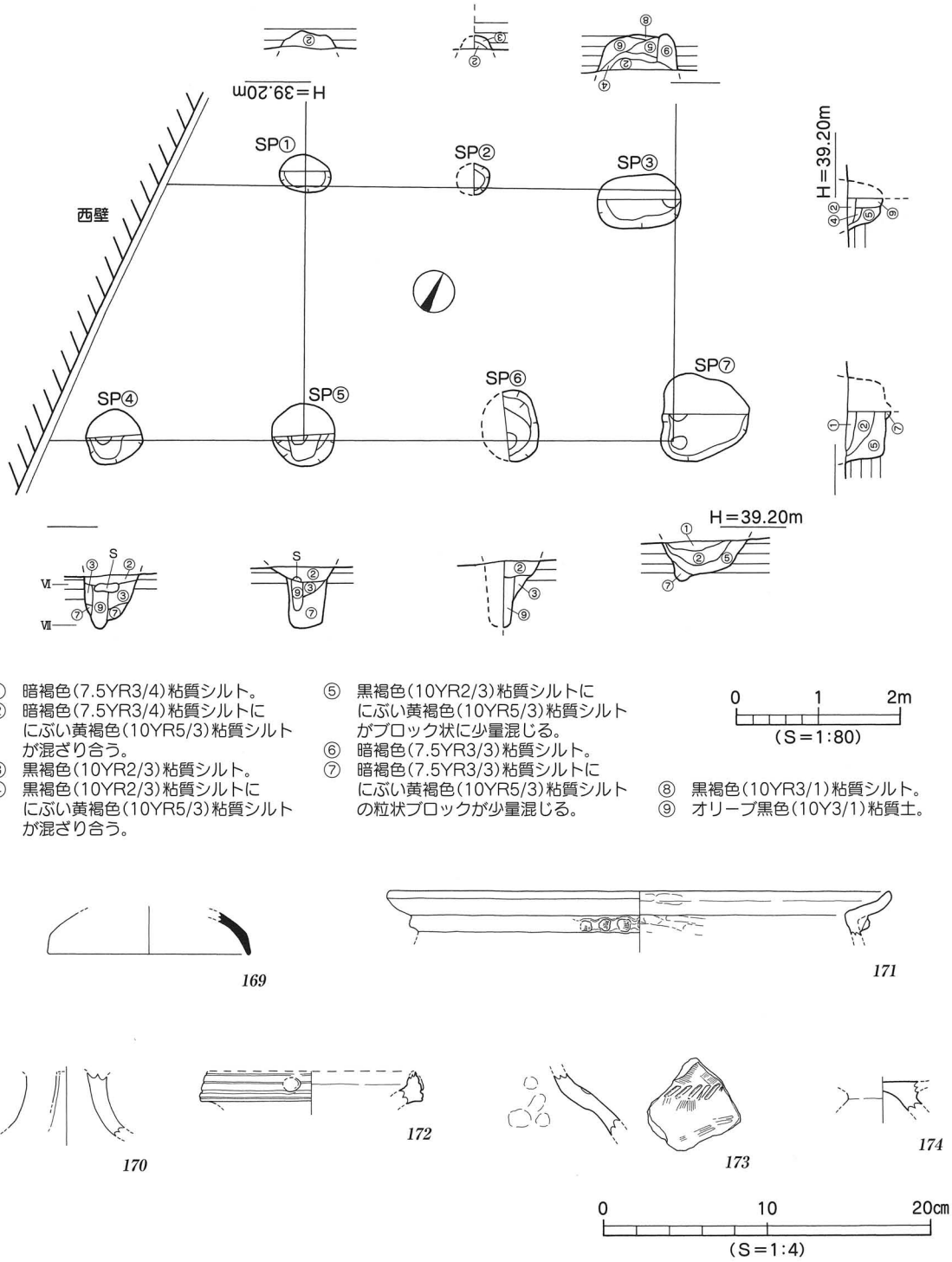
調査区北西部Ｂ２～Ｃ３区に位置する。桁行３間、梁行２間を測る総柱建物で、ＳＢ１・２より後出する。建物を構成する12基の柱穴（ＳＰ①～⑫）は第Ⅶ層上面及びＳＢ１・２床面にて検出した。調査区西壁の土層観察により掘立２は第Ⅴ層上面より掘り込まれており、第Ⅳ層が覆っていることを確認した。建物規模は、桁行長6.80m、梁行長5.42mを測り、建物方位をN－14°－Wにとる。各柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径48～100cm、深さは検出面下16～56cmを測る。柱穴掘り方埋土は５層あり、①層暗褐色粘質シルト、②層暗褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に少量混入）、③層黒褐色粘質シルト、④層にぶい黄褐色粘質シルト、⑤層黒褐色粘質シルト（黄色砂が混入）である。なお、①層や②層中には径３～５cm大の礫が少量含まれている。柱痕は3基の柱穴（ＳＰ③・④・⑦）で検出した。規模は径12～16cm、深さは検出面下32～64cmを測る。柱痕埋土はオリーブ黒色粘質土である。なお、ＳＰ⑦では柱痕上面に①層が覆っていることから、柱は抜き取られた可能性が高い。

遺物は柱穴掘り方埋土中より、弥生土器片や土師器片、須恵器片が少量出土した。

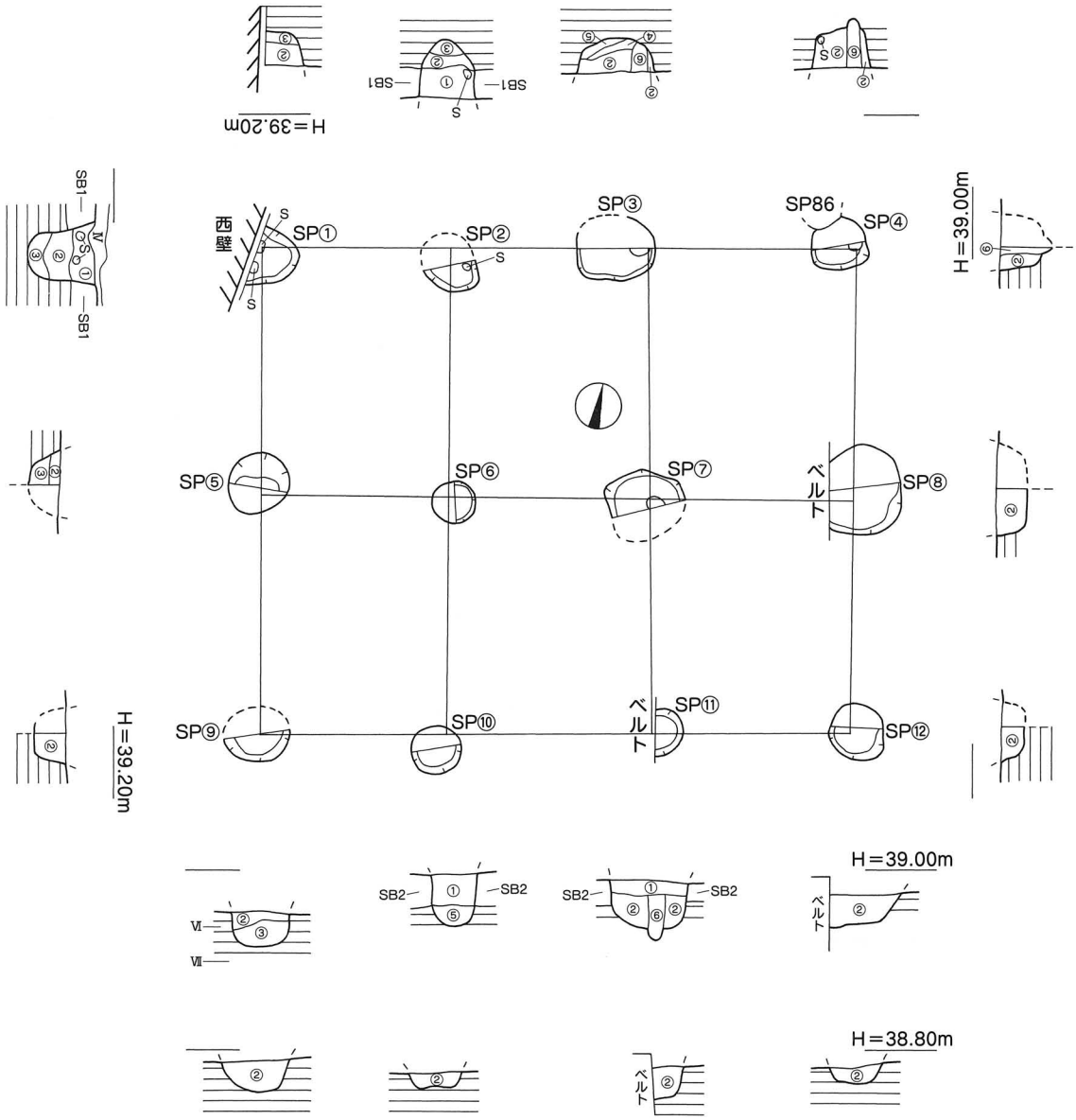
出土遺物（第43図）

175・176は須恵器坏蓋である。丸みのある天井部をもち、口縁端部は内傾する。177は須恵器甕の頸部片で、凸線２条と波状文を施す。

時期：出土遺物の特徴とＳＢ２との切り合いより、古墳時代後期前半、６世紀前半とする。

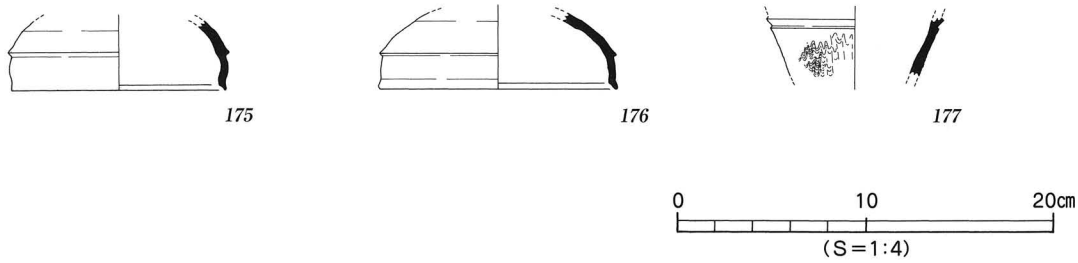


第42図　掘立1 測量図・出土遺物実測図



① 暗褐色(7.5YR3/4)粘質シルト。
② 暗褐色(7.5YR3/4)粘質シルトに
にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質シルト
の粒状ブロックが少量混じる。
③ 黒褐色(10YR2/3)粘質シルト。
④ にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質シルト。
⑤ 黒褐色(10YR2/2)粘質シルトに
黄色(10Y7/8)砂が混じり合う。
⑥ オリーブ黒色(10Y3/1)粘質土。

0 1 2m
(S=1:80)



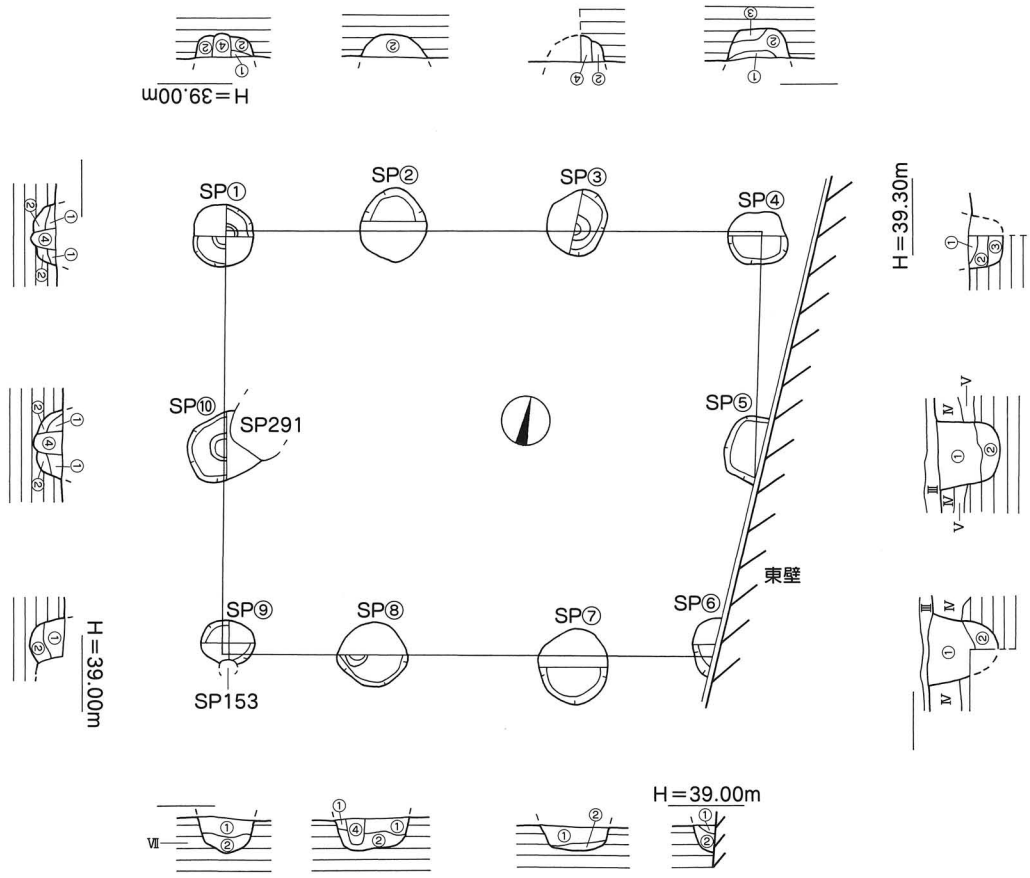
第43図　掘立2 測量図・出土遺物実測図

掘立４（第15・44図）

調査区南東部Ｅ３・４区に位置する。桁行３間、梁行２間を測る東西棟で、切り合いよりＳＢ５・７・８より後出する。建物を構成する柱穴は10基（ＳＰ①～⑩）あり、第Ⅶ層上面及びＳＢ５・７床面にて検出した。なお、調査区東壁の土層観察によりＳＰ⑤・⑥は第Ⅳ層上面から掘り込まれていることを確認した。建物規模は桁行長5.62m、梁行長4.27mを測り、建物方位をＮ－12°－Ｗにとる。各柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径44～80cm、深さは検出面下30～40cmを測る。柱穴掘り方埋土は３層あり、①層黒褐色粘質シルト、②層黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に少量混入）、③層黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に混入）である。柱痕は４基の柱穴（ＳＰ①・③・⑧・⑩）で検出した。規模は径16cm、深さは検出面下28～32cmを測る。柱痕埋土は黒色粘質シルトである。

遺物は柱穴掘り方埋土中より土師器片や須恵器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、ＳＢ８より後出することから上限を概ね古墳時代後期後半、６世紀後半とする。



① 黒褐色(7.5YR3/2)粘質シルト。
② 黒褐色(7.5YR3/2)粘質シルトににぶい黄褐色(10YR5/3)粘質シルトの粒状ブロックが少量混じる。
③ 黒褐色(7.5YR3/2)粘質シルトににぶい黄褐色(10YR5/3)粘質シルトがブロック状に混じる。
④ 黒色(10YR2/1)粘質シルト。

0　1　2m
(S=1:80)

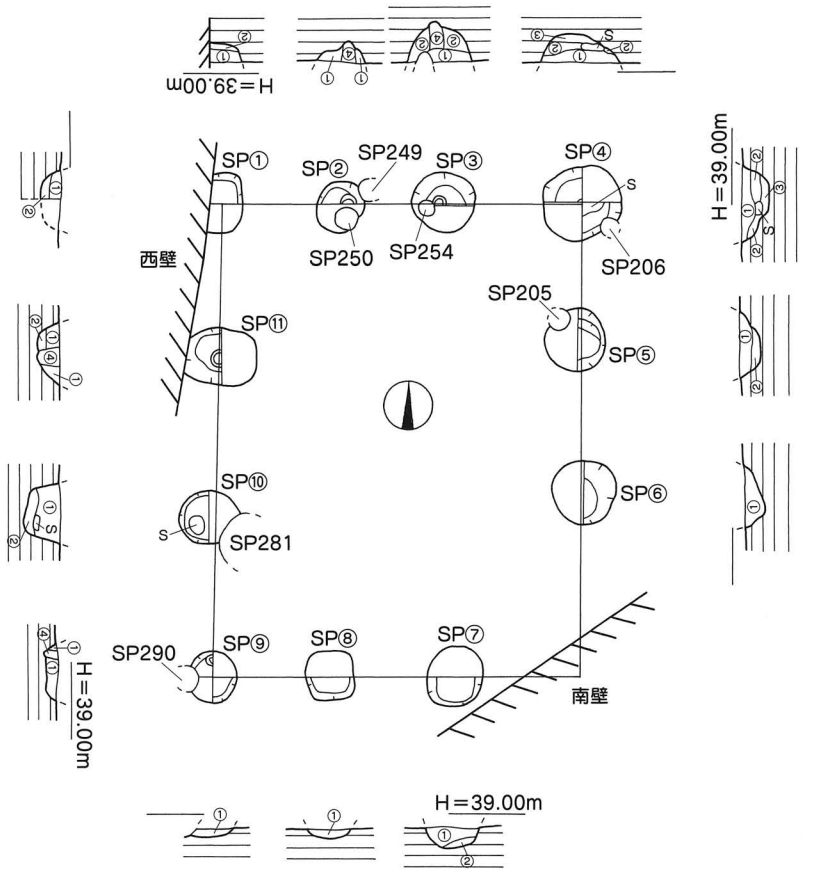
第44図　掘立4 測量図

掘立５（第15・45図、図版16）

調査区南西隅Ｇ１～Ｈ２区に位置する。桁行３間、梁行３間を測る南北棟で、建物を構成する柱穴は第Ⅶ層上面にて11基（ＳＰ①～⑪）を検出した。建物規模は桁行長4.94m、梁行長3.91mを測り、建物方位をＮ－4°－Ｗにとる。各柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径56～84cm、深さは検出面下12～40cmを測る。柱穴掘り方埋土は３層あり、①層暗褐色粘質シルト、②層暗褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に混入）、③層黒褐色粘質シルトである。なお、ＳＰ④・⑩では②層上面にて径10～15cm、厚さ３～４cm大の扁平な石が出土した。柱痕は４基の柱穴（ＳＰ②・③・⑨・⑪）で検出した。規模は径8～16cm、深さは検出面下20～40cmを測る。柱痕埋土は黒色粘質シルトである。

遺物は柱穴掘り方埋土中より少量の土師器片や須恵器片が出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないがＳＢ11に後出する柱穴を切っていることから、上限を古墳時代後期、６世紀代とする。



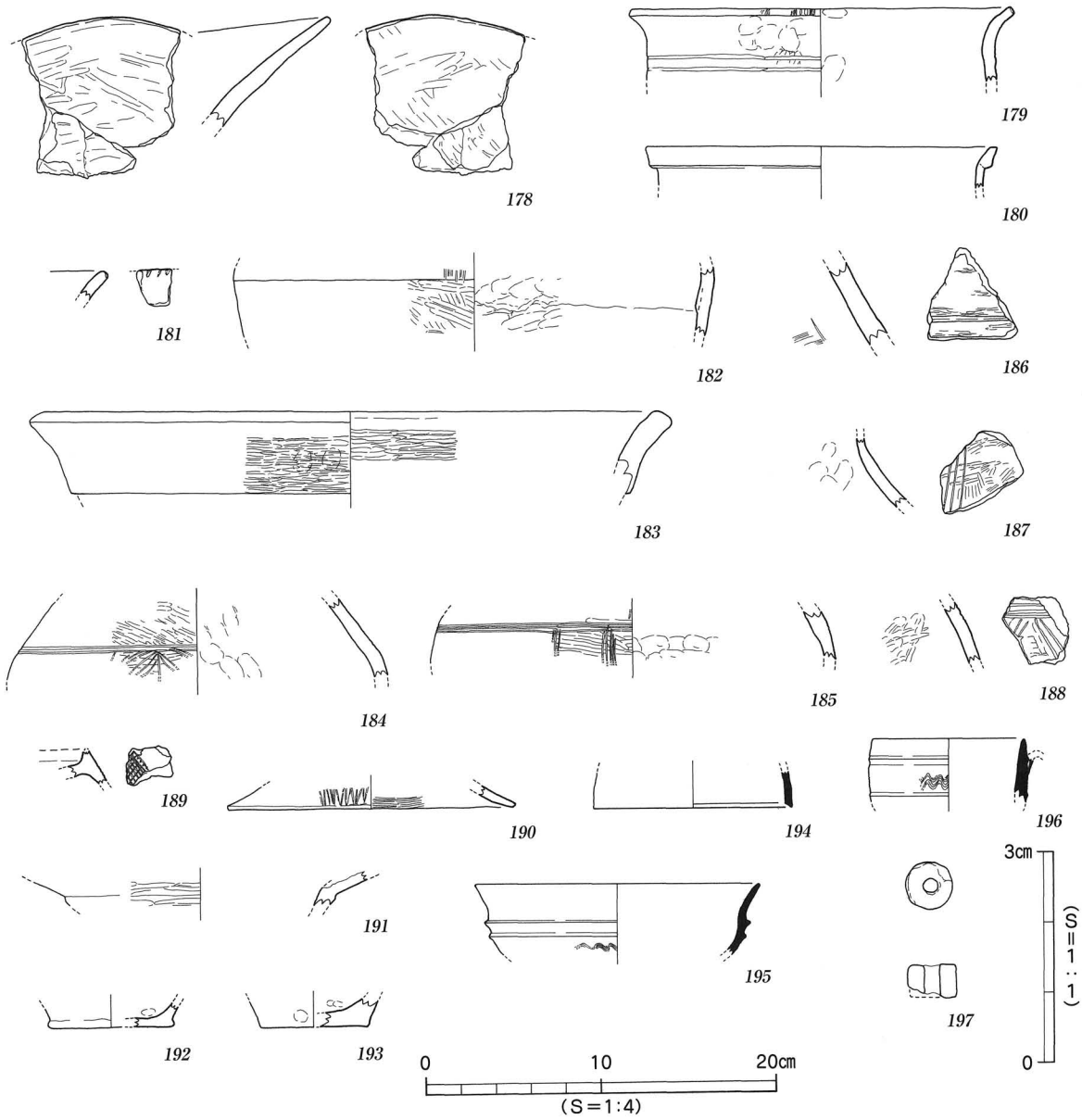
① 暗褐色(7.5YR3/4)粘質シルト。
② 暗褐色(7.5YR3/4)粘質シルトに
にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質シルト
がブロック状に混じる。
③ 黒褐色(10YR2/3)粘質シルト。
④ 黒色(10YR2/1)粘質シルト。

第45図　掘立5 測量図

3）性格不明遺構

ＳＸ１（第15図）

調査区北側Ｂ３～Ｄ４区で検出した不整形状の凹みである。第Ⅶ層上面での検出であり、第Ⅴ層と同様の黒褐色粘質シルトで埋没している。ＳＸ１内に設定したベルトの土層観察により、ＳＢ１・２・３及び掘立２柱穴はＳＸ１上面より掘り込まれた遺構であることを確認した。また、ＳＫ１上部にはＳＸ１埋土が覆っている。ＳＸ１の規模は東西検出長12.0m、南北検出長11.5mを測る。深さは北側で検出面下40cm、南側では15cmを測る。ＳＸ１底面はほぼ平坦であるが、わずかに中央部が凹む。ＳＸ１南側壁体沿いには径３～10cm、深さ２～８cm大の小ピットが点在するほか、テラス状となる



第46図　SX1 出土遺物実測図

箇所が遺構南側にて検出された。

遺物は埋土中より縄文土器片や弥生土器のほか、土師器や須恵器が混在して出土した。

出土遺物（第46図、図版21）

178は縄文晩期の浅鉢片で、ＲＬ条痕が残る。179～182は弥生前期の甕で、179は口縁端部に刻目、胴部にヘラ描き沈線文２条を施す。180は口唇部に凸帯を貼り付ける。182は胴部片で、縦方向のヘラ描き沈線文を施す。183～188は弥生前期の壺である。183は推定口径34.6cmを測る大型品で、口縁下に段をもつ。なお、186は183と同一個体と考えられる。184～188は肩部片で、184はヘラ描き沈線文と木葉文、185は沈線文、188は沈線文と２条１組の工具による山形文を施す。189は広口壺の口縁部片で、口縁端面に斜格子目文を施す。弥生中期中葉。190・191は弥生後期の高坏で、191は坏部外面にヘラミガキ調整を施す。192・193は甕の底部である。弥生前期。194は須恵器坏蓋片、195は無蓋高坏である。196は須恵器椀で、把手部は欠損している。体部に凸線２条と波状文を施す。５世紀中葉～後半。197は滑石製の臼玉で、一部を欠損している。直径0.68cm、厚さ0.45cm、重量0.32gを測る。

時期：遺物が混在しており時期特定は難しいが、竪穴住居の検出等から概ね古墳時代後期以降に埋没したものと考えられる。

（３）古代から中世の遺構と遺物

古代から中世の遺構は、掘立柱建物２棟（掘立３：古代、掘立６：中世）である。

掘立３（第15・47図）

調査区北西部Ｃ２・３区に位置する。桁行２間、梁行２間を測る総柱建物で、ＳＢ２床面にて検出した。建物を構成する柱穴は８基（ＳＰ①～⑧）を検出した。建物規模は桁行長4.81m、梁行長2.79mを測り、建物方位をＥ－20°－Ｗにとる。各柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径30～36cm、深さは検出面下10～12cmを測る。柱穴掘り方埋土は黒褐色粘質シルトである。柱痕はＳＰ⑧で検出され、径8cm、深さ10cmを測る。柱痕埋土は暗褐色粘質シルトである。なお、ＳＰ④・⑥では埋土中に径３～５cm大の礫が数点含まれていた。

遺物は柱穴掘り方埋土中より、土師器片が少量出土した。図化しうるものを１点掲載した。

出土遺物

198は土師器坏の底部である。推定底径6.0cmを測る。底部外面は摩滅により調整は不明である。

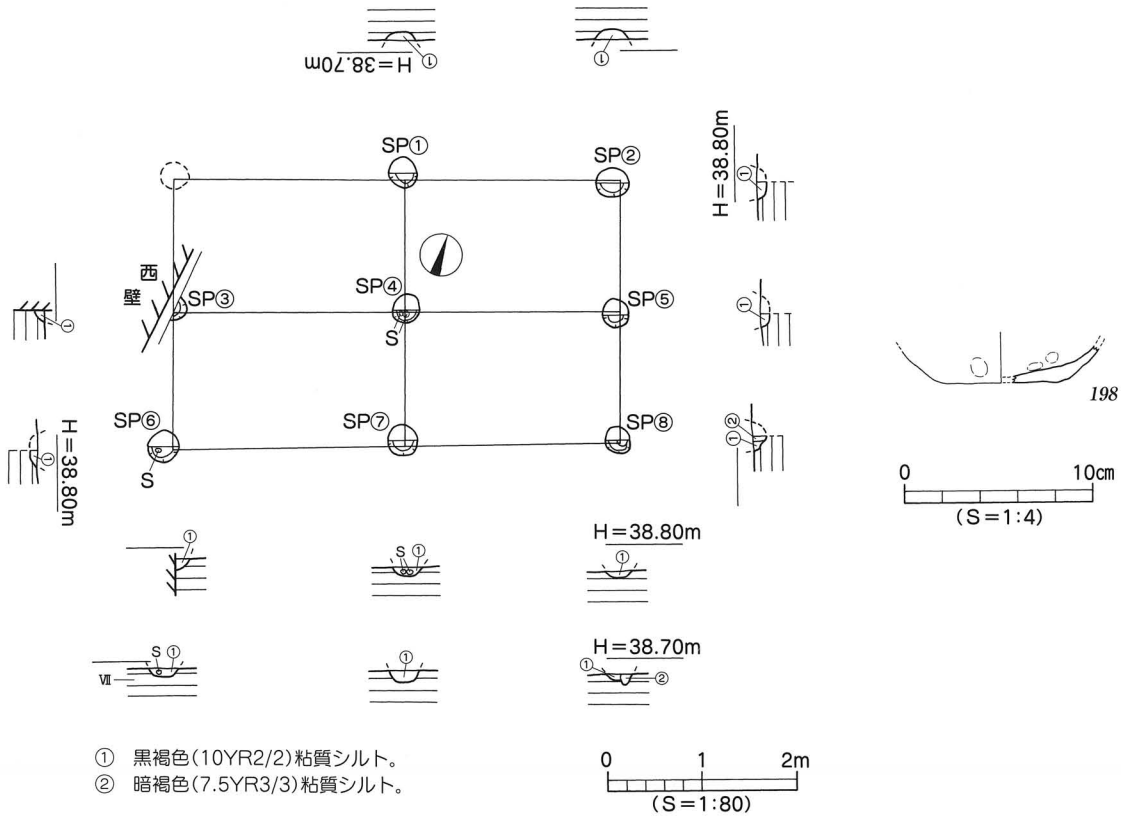
時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、出土品の特徴から概ね古代の遺構とする。

掘立６（第15・48図）

調査区南西部Ｆ・Ｇ２区に位置する。桁行２間、梁行１間の南北棟で、建物を構成する６基の柱穴（ＳＰ①～⑥）は、第Ⅶ層上面にて検出した。建物規模は桁行長3.68m、梁行長1.88mを測り、建物方位をＮ－5°－Ｗにとる。各柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径24～32cm、深さは検出面下16～40cmを測る。柱穴掘り方埋土は灰色砂質シルトである。

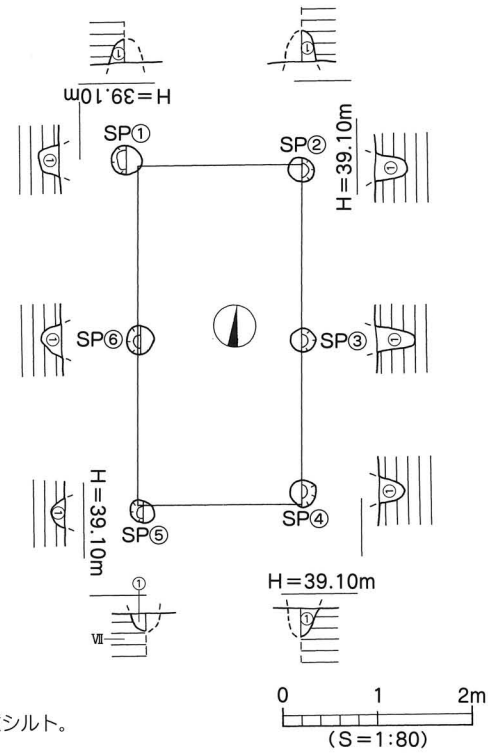
遺物は埋土中より少量の土師器片が出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、柱穴埋土が基本層位の第Ⅱ層に類似することから、概ね中世の遺構とする。



① 黒褐色(10YR2/2)粘質シルト。
② 暗褐色(7.5YR3/3)粘質シルト。

第47図　掘立3 測量図・出土遺物実測図



① 灰色(7.5Y6/1)砂質シルト。

第48図　掘立6 測量図

（4）その他の遺構と遺物

調査では遺構内及び掘立柱建物柱穴を除き、205基の柱穴を検出した。このほか、第Ⅴ層中や重機掘削時に遺物が出土した。なお、重機掘削時の出土品は層位や地点が不明であるため、ここでは「地点不明出土遺物」として実測図を掲載する。

1）柱　穴

調査で検出した柱穴は、埋土で分類すると以下の６種類（１類～６類）である。

１類：灰色土……77基（土師器、陶磁器、鉄器が出土）
２類：灰褐色土……20基（土師器が出土）
３類：褐色土……６基（土師器、須恵器が出土）
４類：暗褐色土……86基（弥生土器、土師器、須恵器、石器が出土）
５類：暗褐色土（黄色土混入）……12基（弥生土器、土師器、須恵器が出土）
６類：黒褐色土……４基（弥生土器、土師器、石器が出土）

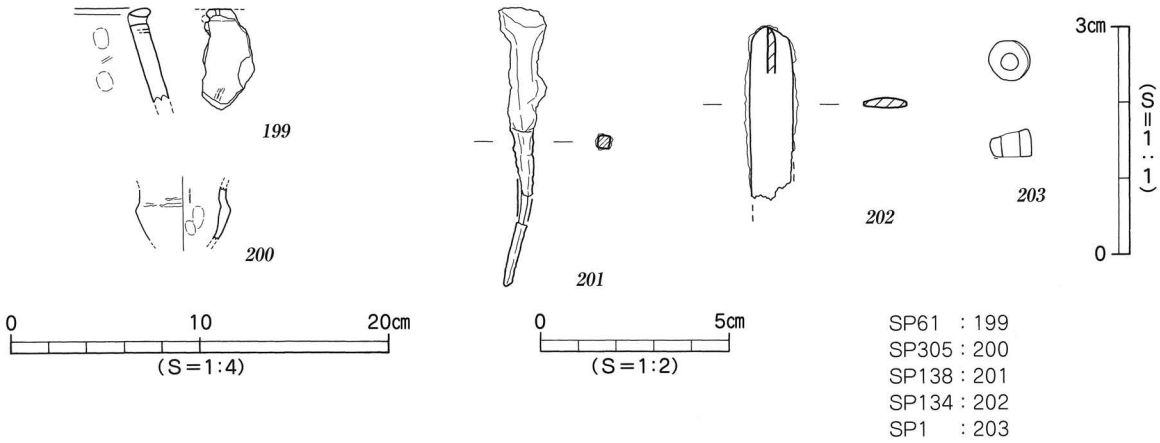
上記の柱穴のうち、１類と４類の柱穴から出土した遺物を５点掲載した。

出土遺物（第49図、図版21）

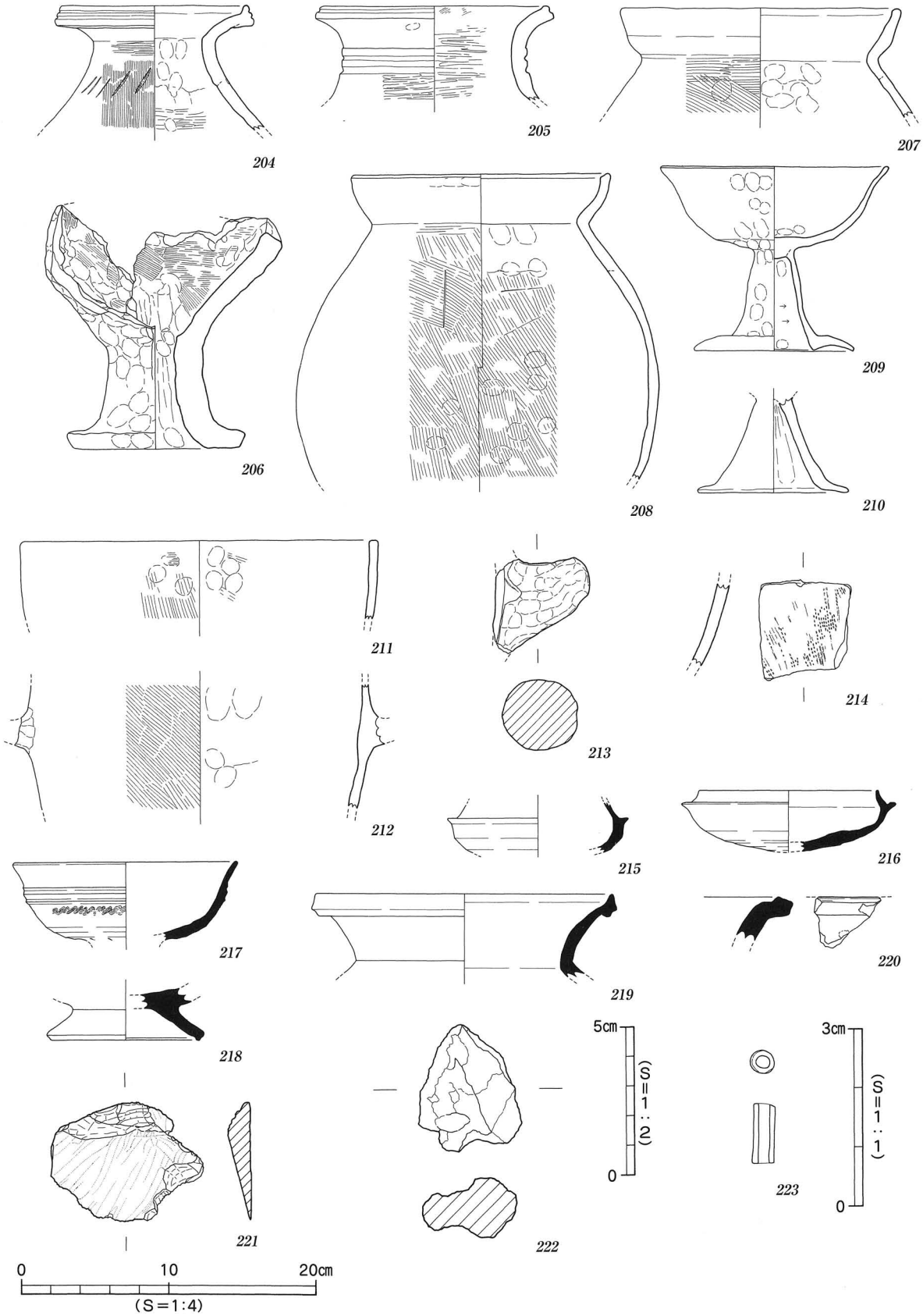
199はＳＰ61（４類）から出土した、弥生土器の壺である。口縁下に径0.4cm大の円孔を穿つ。弥生後期。200はＳＰ305（１類）出土のミニチュア品である。古墳時代。201はＳＰ138（１類）、202はＳＰ134（１類）から出土した鉄器で、201は釘、202は器種不明品である。203はＳＰ１（４類）から出土した滑石製の臼玉で、直径0.55cm、厚さ0.35cm、重さ0.12ｇを測る。

2）第Ⅴ層出土遺物（第50図、図版22）

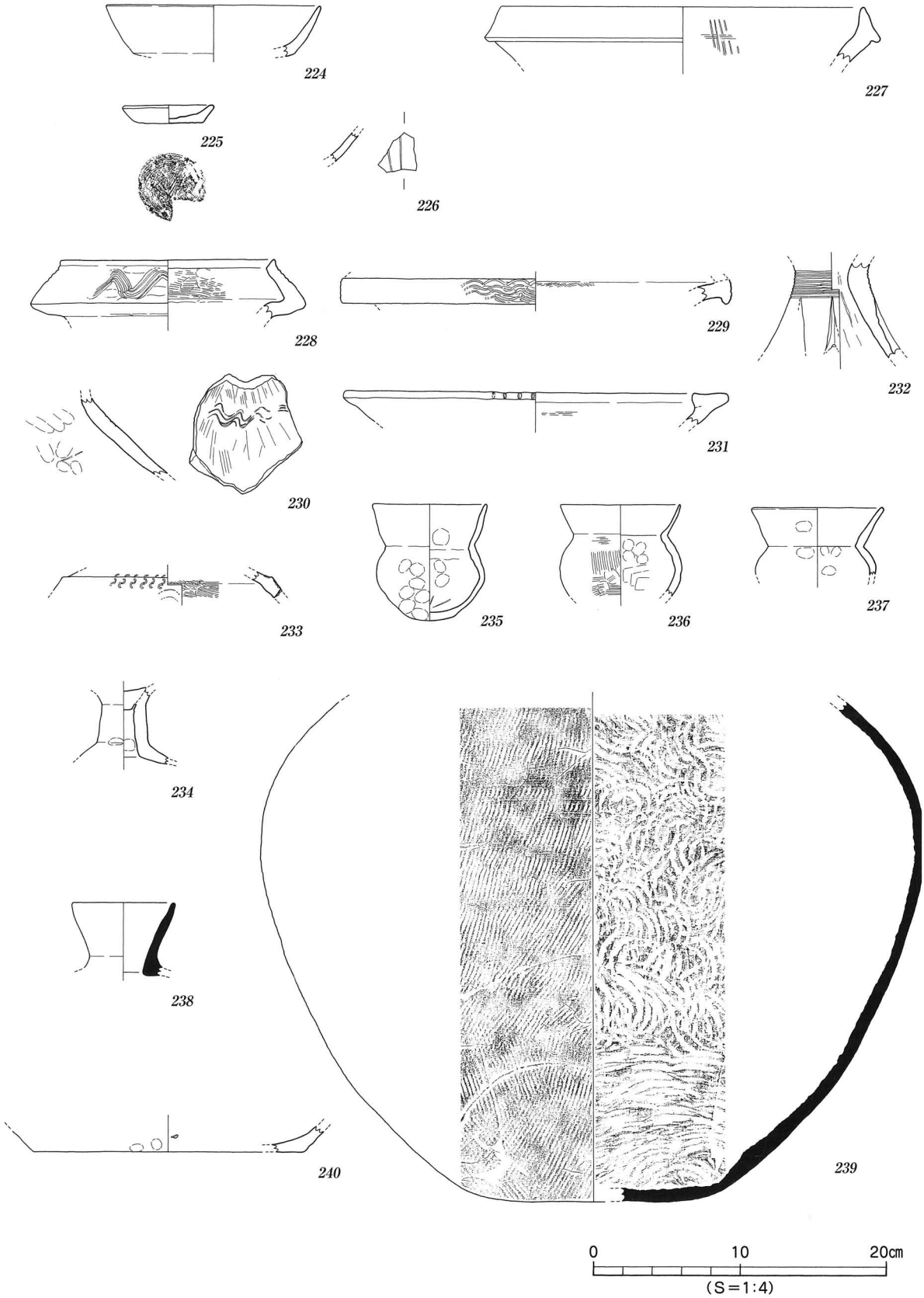
204・205は弥生土器の壺で、204の頸部には「ノ」の字状文、205は沈線文２条を施す。両者共に内面ヘラミガキ調整を施す。204は弥生中期後半、205は弥生前期。206は弥生土器の支脚で、受部は大きく「U」字状にカットされ、柱部は中空となる。弥生後期後半。207・208は土師器甕で、口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する。209・210は土師器高坏で、209は坏脚部の接合は充填技法による。211～213は土師器の甑で、213は断面円形状を呈する。５世紀後半。



第49図　柱穴 出土遺物実測図



第50図　第Ⅴ層 出土遺物実測図

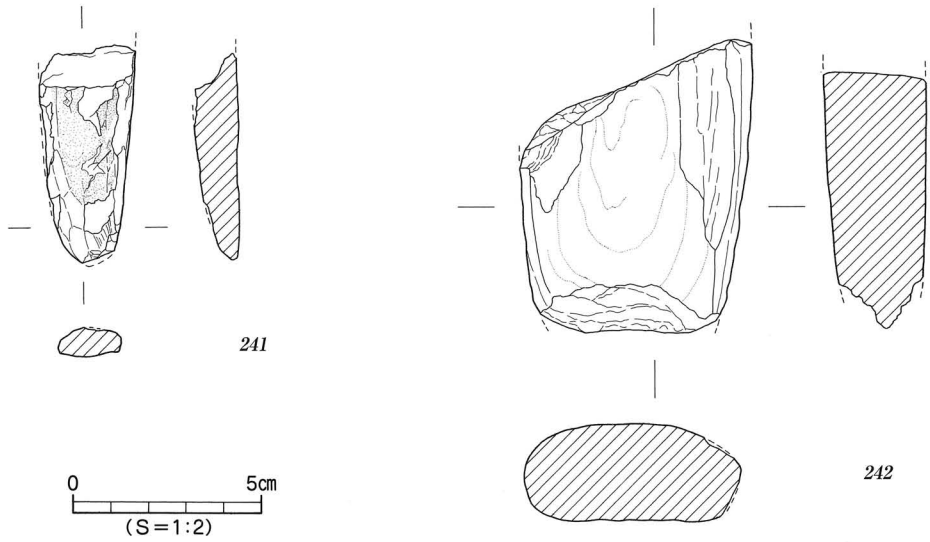


第51図　地点不明 出土遺物実測図(1)

214は軟質土器の甕または甑の胴部片で、外面に縄蓆文を施す。5世紀。215・216は須恵器の坏身、217は無蓋高坏である。215・217は5世紀中葉、216は6世紀後半。218は須恵器台付椀の脚部、219・220は甕の口縁部である。219は口縁端部を上下方に拡張し、220は口縁部が方形状となる。219は5世紀後半、218・220は7世紀。221はサヌカイト製の剥片、222は鉄滓である。223は碧玉製の管玉で、直径0.36cm、長さ1.0cm、重さ0.21gを測る。

3）地点不明出土遺物（第51・52図、図版22）

224は土師器坏、225は皿である。225は推定口径5.8cm、器高1.2cmを測るほぼ完形品で、底部の切り離しは回転糸切り技法による。226は青磁碗の胴部片で、蓮弁文が施される。13世紀。227は備前焼の擂鉢で、体部内面に条線が残る。14世紀。228～230は弥生土器の壺で、228・229は口縁部、230は肩部に櫛描き波状文を施す。228・229は弥生後期後半、230は弥生中期後半。231は弥生土器高坏の坏部片で、口縁端面に刻目を施す。弥生中期中葉。232～234は高坏の脚部片で、232は沈線文と未貫通の矢羽根状透かしを施す。弥生中期後半。233は半截竹管文と径1.4cm大の円孔を穿つ。弥生後期後半。234は短い柱部から裾部が稜をなして屈曲する。弥生末。235～237は土師器の小型壺である。口縁部は直立ないし内湾気味に立ち上がり、236の胴部外面にはハケメ調整を施す。5世紀。238は須恵器提瓶の口縁部で、口縁端部は尖り気味に仕上げる。6世紀。239は須恵器大甕で、胴部外面に平行叩き、内面には円弧叩きを施す。6世紀。240は土師器甕または鉢の底部である。241は緑色片岩製の石鑿で、基部は欠損する。242は結晶片岩製の伐採斧で、基部と刃部を欠損する。重量199.95gを測る。



第52図　地点不明 出土遺物実測図(2)

4．小　結

今回の調査では、古墳時代前期から後期の竪穴住居・掘立柱建物から構成される集落関連遺構のほかに、古代や中世の遺構や遺物を確認することができた。ここでは、集落の変遷を中心にまとめをおこなう。

（1）弥生時代

弥生時代の遺構は、竪穴住居１棟と土坑１基を検出した。ＳＢ４は円形住居であるが一部を検出したにすぎず、規模は不明である。なお、住居検出時には壁体は遺存しておらず周壁溝のみを検出した。壁溝内からは杭痕と思われる小ピットを多数検出した。出土遺物が僅少で時期特定は困難であるが、概ね弥生時代中～後期の住居と考えられる。ＳＫ１は直径4.1～4.4m、深さ1.3m前後を測る円形土坑で、土坑内からは中位付近にて径３～15cm大の河原石がレンズ状の堆積をなし、さらに土坑基底部付近には径１～3cm大の小礫が密集して堆積していた。なお、基底部付近からは湧水が認められたことから土坑の性格は井戸または、ため池等の施設であった可能性がある。土坑内からは、弥生時代前期から中期後半の土器片が埋土上位付近から出土したほか、底部を欠損した土師器甕が土坑上面にて出土した。時期特定は難しいが、検出層位や遺物から土坑の上限を弥生時代中期後半、下限は古墳時代中期後半とする。

（2）古墳時代

古墳時代の遺構は、竪穴住居11棟と掘立柱建物４棟を検出した。竪穴住居の時期は、切り合いや出土遺物から４世紀後半、５世紀前半、５世紀後半、６世紀に大別される。

①　４世紀前半：ＳＢ１は一辺5.7m前後を測る方形住居で、住居上位には径５～20cm大の河原石と共に弥生中期から後期の土器がまとまって出土した。検出状況から、住居廃絶に伴い人為的な埋め戻しがおこなわれたものと考えられる。住居構造では住居床面にて床修復に伴う貼床が施され、壁体に沿って周壁溝が付設されていた。貼床上面からは完形の小型丸底壺が出土したほか、埋土中より滑石製の臼玉や、鉄滓などが出土した。

②　５世紀：ＳＢ２はＳＢ１と切り合う一辺約６ｍを測る方形住居で、ＳＢ１と長軸方向をほぼ等しくする。４本柱構造の住居で、床面には部分的に貼床が施されていた。住居内からは完形の小型丸底壺や土師器甕などのほか、埋土上位付近からは弥生土器（前期～後期）が出土した。出土遺物の特徴より、ＳＢ２の廃棄・埋没時期は５世紀前半頃と考えられる。次に、５世紀後半では５棟の竪穴住居を検出した。ＳＢ３・５は一辺4.5m、ＳＢ10は一辺5.7m、ＳＢ11・12は一辺７ｍを測る方形住居で、ＳＢ５・10・11には造り付けのカマドが付設されていた。カマドは住居北壁及び東壁に付設され、住居床面を掘りくぼめた後、土を充填し基盤を造った後に構築されている。住居構築以前の段階で、カマド位置があらかじめ決められていたことがわかる。ＳＢ10では高坏の坏部が伏せた状態で検出され、カマド廃絶に伴う祭祀行為がおこなわれたものと推測される。このほか、ＳＢ10からはガラス小玉１点と臼玉21点が出土した。また、ＳＢ11からはカマド燃焼部内にて完形の甕が正置に押しつぶされた状態で出土している。なお、いずれの住居においても主柱穴は特定できなかった。

③　６世紀：６世紀の遺構は、竪穴住居４棟と掘立柱建物4棟を検出した。ＳＢ８・９は重複する住居で、ＳＢ８は一辺５m前後を測る方形住居である。４本柱構造で、住居北壁中央部に馬蹄形状のカマドが付設されている。ＳＢ９はＳＢ８に先行する住居であるが、平面形態や規模は定かではない。

出土遺物は混在して取り上げたものの、出土地点や遺物の特徴からＳＢ９は６世紀前半、ＳＢ８は６世紀後半の住居と考えられる。一方、ＳＢ６・７も重複する住居であるが明確な切り合い関係は認められず、改築住居の可能性がある。時期特定しうる遺物の出土はないが、住居埋土がＳＢ８・９に酷似することなどから、概ね６世紀代の住居と考える。竪穴住居のほかに、掘立柱建物が４棟検出された。このうちの３棟は竪穴住居と切り合いが認められる建物である。掘立１、掘立２はＳＢ２に後出する建物で、２間×３間の総柱構造である。両者共に柱は抜き取られたものと考えられ、掘立１では柱抜き取り後に扁平な石が柱痕上面に置かれていた。また、掘立４はＳＢ８に後出する２間×３間規模の建物、掘立５は３間×３間規模の建物である。出土遺物や切り合いから、掘立２は６世紀前半、掘立１・４は６世紀後半の建物と考えられる。掘立５は切り合いがなく時期特定しうる遺物は出土していないが、柱穴埋土が掘立１・２・４と酷似することから、概ね６世紀代の建物と推測される。

このほか、調査区北半部にて、広範囲の凹み（性格不明遺構：ＳＸ１）を検出した。深さ15～40cmを測り、第Ⅴ層で埋没している。遺構内からは縄文土器や弥生土器、土師器、須恵器が混在して出土した。ＳＸ１は単なる地形の落ち込みか、あるいは何らかの施設であるかは判断しえないが、樽味地区において、このような遺構は検出されておらず、その性格や構造解明は今後の課題となる。

④　古代～中世：古代や中世では、掘立柱建物を１棟ずつ検出した。掘立３は２間×２間規模の総柱建物で、柱穴内からは主に古代と思われる遺物が出土したが、時期特定はできなかった。また、中世では掘立６（１間×２間）を検出したほか、地点不明品として備前焼の擂鉢や青磁片などが出土した。

今回の調査では、主に古墳時代の住居を多数検出した。このうち４棟の住居からはカマドを検出した。特に、カマドの構築方法や規模、及びカマド廃絶方法を解明するうえで貴重な資料を得ることができた。また、ＳＢ１やＳＢ２から出土した河原石や弥生土器（中期から後期）は、住居廃絶に伴い混入した可能性があり、住居の廃絶方法を考えるうえでも重要な手がかりを得たものといえよう。しかしながら、土坑ＳＫ１や性格不明遺構ＳＸ１の時期や性格特定など、課題を残す結果となった。今後は、周辺の調査事例を待ち、これら二つの遺構を解明すると共に遺構の廃絶方法についても言及していかねばならないだろう。

遺物一覧　－凡例－

（１）以下の表は、本調査地検出の遺物の計測値及び観察一覧である。

（２）遺物観察表の各記載について。

法量欄　　（　）：復元推定値

調整欄　　土器の各部位名称を略記した。

例）口→口縁部、口端→口縁端部、天→天井部、頸→頸部、胴→胴部、体→体部、脚→脚部、底→底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土。

（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（１～４）→「１～４㎜大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表8　ＳＫ１出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	□径 (21.7) 残高 6.1	「く」の字状口縁。 □頸部内面に明瞭な稜あり。	㊀ヨコナデ ㊁ミガキ	㊀ヨコナデ ㊁板ナデ？	暗茶褐色 暗灰褐色	石・長(1~3)金 ◎		18
2	甕	□径 (22.4) 残高 6.1	「く」の字状口縁。 □縁端部はわずかに上方に肥厚する。	㊀ヨコナデ ㊁ハケ→ミガキ	㊀ハケ?(マメツ) ㊁ミガキ	橙褐色 橙褐色	石・長(1~3)金 ◎		
3	甕	残高 2.6	刻目凸帯文１条。小片。弥生前期。	ヨコナデ	ナデ	明茶色 明茶色	石・長(1) ◎		18
4	壺	□径 (17.6) 残高 3.6	広口壺。口縁下端部に刻目。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	橙茶色 橙茶色	石・長(1~2) ◎		
5	壺	残高 3.2	貼付凸帯文２条。	ヨコナデ	ハクリ	暗褐色 暗茶色	石・長(1~3) ◎		
6	壺	残高 5.5	頸部に段をもつ。弥生前期。	ヨコナデ ミガキ	ナデ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~2)金 ◎		18
7	高坏	□径 (22.0) 残高 3.3	□縁部に貝殻施文による列点文あり。	(口端)ヨコナデ ハケ→ミガキ	(口端)ヨコナデ ハケ→ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長(1)金 ◎		18
8	高坏	□径 (26.5) 残高 3.5	折曲口縁。口縁部内面に段をもつ。	(口端)ヨコナデ ハケ→ミガキ	(口端)ミガキ ヨコナデ･ミガキ	明橙褐色 橙褐色	石・長(1~2)金 ◎		18
9	高坏	残高 4.4	ヘラ沈線文５条＋山形文。	ミガキ	(坏底)ナデ (脚)ナデ･シボリ痕	茶褐色 灰褐色	石・長(1) ◎		
10	ジョッキ形	□径 (16.8) 残高 8.3	□胴部片。 □縁端部は尖り気味に丸い。	ミガキ→ ヨコナデ	㊀ヨコナデ ㊁ナデ･ミガキ	黒色 黒褐色	石・長(1~2)金 ◎		
11	甕	底径 6.8 残高 4.6	くびれの上げ底。	ナデ･ヨコナデ (マメツ)	マメツ	橙褐色 黒褐色	石・長(1~3) ◎		
12	壺	底径 9.5 残高 4.5	上げ底。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~4)金 ◎	黒斑	
13	壺	底径 8.0 残高 5.6	上げ底。	ミガキ (底)ナデ	ハケ (底)ナデ	乳褐色 淡灰黄色	石・長(1~3)金 ◎	黒斑	
14	不明	長さ 3.6 幅 3.7	「×」の線刻あり。小片。	ナデ	ナデ	淡茶色 淡茶色	石・長(1)金 ◎		18
15	甕	□径 (17.0) 器高 30.1	復元完形品。口縁端部は内傾する。	㊀ヨコナデ ㊁ハケ→ナデ	㊀ヨコナデ ㊁板ナデ→ナデ	明茶褐色 茶褐色	石・長(1~6)金 ◎	煤付着	18

表9　ＳＢ１出土遺物観察表　　土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
16	甕	□径 (12.6) 残高 3.1	内湾口縁。器壁は薄い。小片。	ナデ	㊀ナデ ㊁ケズリ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~2)金 ◎		
17	甕	□径 (14.0) 残高 4.8	内湾口縁。口縁端部はわずかに 内方に肥厚。器壁は薄い。	ナデ	ナデ	淡褐色 淡灰茶色	石・長(1~5)金 ◎	黒斑	
18	甕	□径 (16.1) 残高 4.9	外反口縁。 □頸部内面に明瞭な稜あり。	ハケ→ ヨコナデ	㊀ハケ→ヨコナデ ㊁ケズリ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~2)金 ◎		
19	甕	□径 (14.0) 残高 4.0	内湾口縁。口縁端部は内方に肥厚。	ヨコナデ ハケ？(マメツ)	ナデ･ヨコナデ	淡褐色 淡褐色	密・金 ◎		
20	甕	□径 (15.5) 残高 4.1	直立口縁。器壁は厚い。	(口端)ヨコナデ ナデ(一部ハケ)	㊀ハケ(6本/cm) ㊁ナデ	乳白色 乳白色	石・長(1~4) ◎		
21	甕	□径 (16.2) 残高 5.2	直立口縁。 □縁中位に膨らみをもつ。	㊀ヨコナデ･ナデ ㊁ハケ(6本/cm)	㊀ヨコナデ ㊁ハケ(6本/cm)	乳橙白色 乳橙白色	石・長(1~3)金 ◎		
22	甕	□径 (17.0) 残高 1.9	内湾口縁。口縁端部は丸い。 畿内系。小片。	ヨコナデ	ナデ･ヨコナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	長(1~2)金 ◎		
23	甕	□径 (23.6) 残高 5.8	大型品。口縁端部は上内方に拡張。 □縁端面は凹む。	(口端)ヨコナデ (口頸)ナデ	㊀ヨコナデ･ナデ ㊁ケズリ？	橙褐色 橙褐色	石・長(1~3)金 ◎		
24	壺	□径 10.7 器高 8.3	小型丸底壺の完形品。口縁端部は尖り気味に 仕上げ、底部外面には手持ちヘラケズリを施す。	㊀ヨコナデ (胴下)ケズリ	(口頸)ヨコナデ･ナデ (胴底)工具ナデ	淡乳褐色 淡橙褐色	石・長(1~4)金 ◎	黒斑	18
25	壺	□径 (20.5) 残高 8.0	二重口縁壺。口縁部１/２の残存。	㊀ヨコナデ ㊁ハケ(7本/cm)	(口頸)ナデ･ヨコナデ ㊁板ナデ？	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~3)金 ◎		18
26	鉢	□径 (11.6) 残高 4.0	□縁端部は丸い。小片。	ナデ	ナデ	乳茶褐色 淡褐色	石・長(1~2)金 ◎		
27	鉢	底径 (12.0) 残高 4.5	脚付鉢。柱裾部境に沈線文１条。	ハケ(5本/cm) (底端)ヨコナデ	ケズリ	橙褐色 橙褐色	石・長(1~3) ◎		
28	高坏	残高 8.3	円筒状の柱部。柱部内面にシボリ 痕あり。柱部完形品。	ナデ	シボリ痕 工具ナデ･ナデ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~4) ◎		18
29	高坏	残高 6.9	円筒状の柱部。	ハケ・ミガキ ヨコナデ	板ナデ ヨコナデ	橙茶色 淡黄褐色	石・長(1~2) ◎		
30	高坏	残高 7.5	円筒状の柱部。 柱部内面にシボリ痕あり。	ミガキ(マメツ)	シボリ痕 ナデ	褐色 茶褐色	石・長(1~2)金 ◎		

ＳＢ１出土遺物観察表　　土製品

（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
31	高坏	残高　5.6	脚部片。	ハケ(10本/cm)	ケズリ	明茶褐色 明茶褐色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	
32	高坏	底径（10.3） 残高　6.3	ラッパ状に開く脚部。 脚裾端部は丸い。	ハケ(5～6本/cm) マメツ	ナデ・ハケ？ (底)ヨコナデ	淡黄褐色 淡橙色	石・長(1～3)金 ◎		
33	甕	□径（20.6） 残高　4.1	折曲□縁。□縁端面に刻目文、胴部にヘラ沈線文2条と刻目文を施す。弥生前期。小片。	ヨコナデ	(口)ヨコナデ ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	18
34	甕	□径（26.3） 残高　1.5	折曲□縁。□縁端面に沈線文と刻目文を施す。弥生前期。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡明茶色 淡明茶色	石・長(1～2)金 ◎		
35	甕	□径（22.0） 残高　3.1	貼付凸帯文１条。凸帯上に布目圧痕あり。弥生中期。	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1～2) ◎		
36	甕	□径（26.8） 残高　1.6	□縁端部は上方に拡張。小片。 弥生中期。	ナデ・マメツ	ヨコナデ・ナデ マメツ	茶褐色 茶褐色	長(1)金 ◎		
37	甕	□径（17.1） 残高　4.5	内湾□縁。小片。弥生中期。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ→ナデ	(口)ハケ→ヨコナデ (胴)ハケ	褐色 黒褐色	長(1)金 ◎	黒斑	
38	甕	残高　2.3	貼付凸帯文１条。小片。弥生前期。	ナデ	ナデ ミガキ	褐色 褐色	長(1) ◎		
39	甕	残高　1.8	折曲□縁。□縁内面に籾圧痕あり。 小片。弥生前期。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2)金 ◎		
40	甕	残高　3.8	沈線文１条＋山形文。小片。 弥生前期。	ミガキ	ヨコナデ	乳褐色 乳褐色	石・長(1～3) ◎		
41	甕	残高　3.9	ヘラ沈線文２条＋山形文。小片。 弥生前期。	ナデ ミガキ	ミガキ	橙褐色 橙褐色	石・長(1～2)金 ◎		18
42	甕	底径　(6.2) 残高　4.6	平底。弥生中期後半。	ミガキ	ナデ	茶褐色 褐色	石・長(1～2)金 ◎		
43	甕	底径　(6.8) 残高　4.6	上げ底。弥生中期中葉。	ナデ→ヨコナデ	ナデ	暗褐色 暗褐色	石・長(1～2) ◎	黒斑	
44	壺	□径（17.2） 残高　6.5	広□壺。□縁上端面に刻目文、頸部に貼付凸帯文1条を施す。弥生中期中葉。	ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ	暗茶褐色 暗茶褐色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	18
45	壺	□径（16.7） 残高　7.4	太頸壺。□縁端部は上下方に拡張し、□縁端面に凹線文3条を施す。弥生中期後半。	ナデ・ハケ (マメツ)	(口端)ヨコナデ ハケ・ミガキ？	橙褐色 淡褐色	石・長(1～3) ◎		
46	壺	□径（18.6） 残高　6.1	太頸壺。□縁端面に凹線文3条、頸部に貼付凸帯文1条(布目押圧)を施す。弥生中期後半。	ヨコナデ	(口端)ヨコナデ ハケ→ミガキ	乳褐色 灰褐色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	
47	壺	残高　2.8	複合□縁壺。波状文２段あり。 小片。弥生後期。	ヨコナデ	ハケ(8本/cm)	茶色 茶色	石・長(1) ◎		
48	壺	残高　6.0	貝殻施文による列点文あり。 弥生中期後半。	ナデ	ナデ	乳橙色 乳橙色	石・長(1～3)金 ◎		
49	壺	残高　3.4	貝殻施文による列点文あり。小片。 弥生中期後半。	マメツ	ナデ	茶褐色 淡茶褐色	石・長(1～2) ◎		19
50	壺	残高　3.1	貝殻施文による列点文+沈線文5条。 小片。弥生中期後半。	マメツ	ナデ	淡褐色 暗灰色	石・長(1～4) ◎		19
51	壺	底径　5.3 残高　5.5	平底。底部完形。	ハケ・マメツ	ハケ→ナデアゲ	淡褐色 淡褐色	石・長(1～3) ◎	黒斑？	
52	鉢	□径（18.3） 残高　4.9	外反□縁。□縁端部は上下方に拡張。 小片。弥生後期。	ハケ→ミガキ？	(口端)ヨコナデ ハケ→ナデ(ミガキ?)	黒茶褐色 暗茶褐色	石・長(1～2)金 ◎	煤付着 ？	
53	鉢	□径（19.8） 残高　6.7	外傾□縁。□縁端部は丸い。 弥生後期。	(口)マメツ (胴)ハケ(7本/cm)	(口)ハケ (胴)ケズリ	橙褐色 橙褐色	石・長(1～3) ◎		
54	鉢	底径　(9.0) 残高　2.4	脚付鉢。裾端部は「コ」の字状に仕上げる。弥生後期。	ハケ(12～13本/cm) (底端)ヨコナデ	ハケ(11～12本/cm) ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1～3)金 ◎		
55	高坏	□径（21.2） 残高　4.6	凹線文６条＋刻目文。 弥生中期後半。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡茶色 乳褐色	石・長(1)金 ◎		
56	器台	残高　8.8	柱部片。φ2.0cmの円孔２段を２箇所看取。	マメツ	マメツ(ナデ)	橙色 橙色	長(1) ◎		
57	支脚	底径（13.0） 器高　15.5	Ｕ字形支脚。脚部の一部のみ欠損。	ナデ	ナデ	淡黄橙色 淡黄褐色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	19
58	深鉢	残高　3.0	□縁端部に刻目文。小片。 縄文晩期。	ナデ	ナデ	淡乳褐色 黒褐色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	

表10　ＳＢ１出土遺物観察表　　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
59	スクレイパー	ほぼ完存	サヌカイト	2.2	5.2	0.7	8.40		
60	スクレイパー	完存	サヌカイト	1.4	2.6	0.2	0.85		

表11　ＳＢ１出土遺物観察表　　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
61	滓	—	不明	4.2	5.4	2.3	75.58		19

表12　ＳＢ１出土遺物観察表　　玉類

番号	器種	残存	材質	色	法量 直径(cm)	高さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
62	臼玉	完形	滑石	灰色	0.38	0.2	0.03		

表13　ＳＢ２出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
63	甕	□径 (13.2) 残高 17.6	直立□縁。□縁端部は「コ」の字状。1/3の残存。	(□頸)ヨコナデ (胴)ハケ	(□)ヨコナデ (胴)ナデ→ケズリ	淡黄橙色 橙色	石・長(1~3)金 ◎		19
64	甕	□径 (12.9) 残高 8.8	内湾□縁。□縁端部は丸い。器壁は薄い。	(□)マメツ (胴)ハケ(14本/cm)	(□)マメツ(ヨコナデ) (胴)マメツ(ケズリ)	黒灰褐色 乳褐色	石・長(1~3)金 ◎	黒斑	19
65	甕	□径 (15.4) 残高 13.3	内湾□縁。□縁端部は内方にやや拡張。□頸部内面に稜あり。	マメツ	(胴)マメツ (ナデ・ケズリ)	橙褐色 橙褐色	石・長(1~4)金 ◎	黒斑	
66	壺	□径 9.8 器高 6.9	小型丸底壺の完形品。□縁端部は尖り気味。底部外面に手持ちヘラケズリを施す。	(□)ヨコナデ (底)ケズリ	(□)ヨコナデ (胴)工具→ナデ	淡黄褐色 淡茶褐色	石・長(1~2)金 ◎	黒斑	19
67	壺	残高 4.6	小型丸底壺の頸胴部片。	ヨコナデ	(□)ヨコナデ (胴)ナデ・ヨコナデ	明褐色 明褐色	石・長(1~2)金 ◎		
68	壺	残高 6.3	小型丸底壺の頸胴部片。1/2の残存。	(頸)ヨコナデ (胴)ハケ(10本/cm)	(□)ヨコナデ (胴)ナデ→ヨコナデ	褐色 淡茶褐色	石・長(1)金 ◎	黒斑？	
69	壺	残高 3.2	頸胴部小片。	ハケ (7本/cm)	(胴)ミガキ ヨコナデ	灰茶褐色 灰茶褐色	石・長(1~4) ◎		
70	高坏	□径 (16.5) 残高 5.2	坏部片。	ヨコナデ	ミガキ？	乳茶色 乳白褐色	石・長(1~2)金 ◎		
71	高坏	残高 3.3	柱部外面に面取り痕あり。	板ナデ (脚)面取り	(坏)ミガキ・ナデ (脚)工具ナデ	褐灰色 淡褐色	石・長(1~2) ◎		
72	高坏	底径 (11.2) 残高 2.0	脚裾部小片。柱裾部内面に稜あり。	マメツ (ヨコナデ)	マメツ (ヨコナデ)	乳橙色 乳橙色	密 ◎		
73	甑	□径 (25.0) 残高 10.2	直立□縁。□縁端部は丸い。	ヨコナデ	マメツ(ナデ)	茶褐色 淡茶褐色	石・長(1)金 ◎		
74	甕	□径 (25.0) 残高 3.5	折曲□縁。□縁端面に刻目文、胴部にヘラ沈線文3条とタテ方向の山形文あり。弥生前期。	ヨコナデ	(□)ヨコナデ ナデ・ヨコナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1~2)金 ◎		
75	甕	□径 (24.2) 残高 5.9	折曲□縁。□縁端面に刻目文、胴部にヘラ沈線文３条あり。弥生前期。	ナデ・ヨコナデ	ナデ(マメツ)	灰褐色 淡褐色	石・長(1~3)金 ◎	黒斑	
76	甕	□径 (18.0) 残高 1.8	折曲□縁。□縁端面に刻目文あり。小片。弥生前期。	ヨコナデ	ナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1~2) ◎		
77	甕	□径 (27.3) 残高 2.3	□縁上端部に貼付凸帯文1条。凸帯下端に刻目文、胴部に線刻あり。弥生前期。	ヨコナデ	ナデ	灰褐色 灰茶褐色	石・長(1~2)金 ◎		19
78	壺	□径 (24.0) 残高 2.8	広口壺。□縁内面に貼付凸帯文、□縁端面に山形文あり。弥生中期中葉。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶色 茶色	石・長(1~3) ◎		19
79	高坏	□径 (25.4) 残高 3.9	坏部片。弥生後期後葉。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1~2) ◎		
80	甕	底径 4.0 残高 7.0	上げ底。弥生後期前葉。	マメツ(タタキ・ハケ) (底)ナデ	ナデ	茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~3)金 ◎	黒斑	
81	深鉢	□径 (28.8) 残高 3.5	□縁端に貼付凸帯文、凸帯下端に刻目文を施す。縄文晩期。	ヨコナデ マメツ・ハクリ	ナデ・ヨコナデ	暗褐色 褐色	石・長(1) ◎		19

表14　ＳＢ11出土遺物観察表　　土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
82	甕	□径 (20.3) 残高 5.8	外反□縁。□縁中位に膨らみをもつ。□縁部1/2の残存。	(□)ナデ・ヨコナデ (胴)ハケ	(□)ハケ(6本/cm) (胴)ナデ	淡茶褐色 茶褐色	石・長(1~4) ◎		
83	甕	□径 (25.5) 残高 3.3	内湾□縁。□縁端部はわずかに内傾する。小片。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ	明褐色 明褐色	石・長(1~4)金 ◎		
84	甕	□径 16.1 残高 15.6	底部欠損。外反□縁。	(□)ヨコナデ (胴)マメツ(ハケ・ナデ)	(□)ヨコナデ (胴)板ナデ・ナデ	橙褐色 橙茶色	石・長(1) ◎		20
85	高坏	□径 16.5 残高 5.6	坏部ほぼ完形。坏部下位にはわずかに稜あり。	マメツ	マメツ	明橙茶色 明橙茶色	石・長(1~2)金 ◎		20
86	高坏	残高 5.4	坏部片。坏部下位に稜あり。	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	橙茶色 橙茶色	密 ◎		

ＳＢ11出土遺物観察表　　土製品

（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
87	高坏	残高　2.5	脚部片。	ナデ	工具ナデ	灰茶褐色 灰茶褐色	密 ◎		
88	椀	□径　13.1 器高　5.1	□縁部を一部欠損。□縁端部は尖り気味。底部は平底。	マメツ(ナデ)	マメツ	橙茶色 乳白褐色	石・長(1) ◎	黒斑	20

表15　ＳＢ12出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
89	壺	□径（16.8） 残高　3.0	□縁中位に凸線１条。 □縁端面は凹む。	回転ナデ	回転ナデ	濃灰色 濃灰色	密 ◎		20

表16　ＳＢ10出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
90	甕	□径（22.1） 残高　3.3	内湾□縁。□縁端部は内傾し、やや肥厚する。	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	淡黄褐色 淡褐色	石・長(1)金 ◎	黒斑	
91	甕	□径（21.0） 残高　3.3	内湾□縁。□縁端部は内傾し、内側にやや肥厚する。□縁端面はナデ凹む。	ヨコナデ	㊀ヨコナデ ㊁ナデ・ヨコナデ	淡黄灰色 淡黄灰色	石・長(1～3)金 ◎		
92	椀	□径　12.0 器高　5.5	ほぼ完形品。□縁端部は尖り気味。	ナデ	ナデ	明橙色 明橙色	密・金 ◎		20
93	椀	□径　12.0 器高　5.5	3/4の残存。□縁端部は尖り気味。	ナデ	ナデ	淡橙色 明橙色	密・金 ◎		20
94	椀	□径（12.0） 器高　4.7	□縁部を一部欠損。 底部は凹凸あり。	ナデ	ナデ	明橙色 明橙色	密・金 ◎		
95	椀	□径（12.6） 残高　4.3	□縁端部は内傾する面をもつ。 体部内面に暗文風のヘラミガキあり。	ヨコナデ ミガキ？	㊀ヨコナデ ㊂ミガキ	淡橙色 乳橙褐色	密・金 ◎	黒斑	
96	椀	□径（13.9） 残高　3.1	外反□縁。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳褐色 黒褐色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	
97	高坏	□径　15.1 残高　6.6	坏部完形品。坏部下位に不明瞭な稜あり。□縁部はやや外反する。	㊀ヨコナデ ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ (マメツ)	黄橙褐色 橙褐色	密 ◎	黒斑	20
98	高坏	□径（17.0） 残高　4.5	坏部小片。	マメツ	マメツ	淡橙色 淡橙色	石・長(1～2) ◎		
99	高坏	底径（10.8） 残高　1.6	脚部小片。柱裾部内面に稜あり。	マメツ	ハケ マメツ(ナデ)	淡橙褐色 淡橙茶色	密・金 ◎		
100	高坏	底径（10.6） 残高　2.2	脚部片。柱裾部内面に明瞭な稜あり。	マメツ	マメツ	黄橙色 黄橙色	長(1) ◎		
101	甑	残高　6.1	把手部完形品。胴部との接合痕あり。	ナデ	—	灰褐色	石・長(1～2)金 ◎		
102	甑	残高　5.0	把手部完形品。 胴部との接合に伴う突起部あり。	ナデ	—	乳褐色	石・長(1～4)金 ◎		
103	坏蓋	□径（12.4） 器高　4.2	1/2の残存。扁平な天井部。□縁端部は水平な面をもち、端面はやや凹む。	㊄回転ヘラケズリ ㊀回転ナデ	㊄ナデ ㊀回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		20
104	坏蓋	□径（12.8） 残高　3.3	小片。□縁端部は内傾する凹面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
105	坏蓋	残高　2.5	小片。扁平な天井部。	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎		
106	蓋	□径（12.6） 器高　4.9	有蓋高坏の蓋。1/3の残存。	㊄回転ヘラケズリ →回転ナデ	㊄ナデ 回転ナデ	黒灰色 青灰色	密 ◎		
107	高坏	□径（14.6） 残高　5.7	無蓋高坏。1/3の残存。凸線２条＋波状文(6～8条)。透かし痕あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰黒色 黒灰色	密 ◎	自然釉	20
108	壺	□径（15.6） 残高　2.2	広口壺。□縁端部は断面三角形状を呈する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表17　ＳＢ10出土遺物観察表　　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
109	不明	不明	鉄	2.1	4.5	0.3	0.34		20

表18　ＳＢ10出土遺物観察表　　玉類

（1）

番号	器種	残存	材質	色	法量 直径(cm)	法量 高さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
110	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.36	0.26	0.03		20

ＳＢ10出土遺物観察表　　玉類

(2)

番号	器種	残存	材質	色	法量 直径(cm)	法量 高さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
111	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.49	0.28	0.06		20
112	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.44	0.30	0.07		20
113	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.47	0.28	0.07		20
114	臼玉	完形	滑石	灰色	0.39	0.29	0.07		20
115	臼玉	完形	滑石	灰色	0.52	0.18	0.07		20
116	臼玉	完形	滑石	灰色	0.54	0.18	0.08		20
117	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.45	0.34	0.08		20
118	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.49	0.23	0.08		20
119	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.40	0.29	0.08		20
120	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.50	0.29	0.08		20
121	臼玉	ほぼ完形	滑石	緑灰色	0.47	0.29	0.08		20
122	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.48	0.35	0.09		20
123	臼玉	完形	滑石	灰色	0.48	0.30	0.09		20
124	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.49	0.33	0.10		20
125	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.48	0.41	0.10		20
126	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.49	0.36	0.11		20
127	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.48	0.37	0.11		20
128	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.48	0.38	0.12		20
129	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.57	0.31	0.15		20
130	臼玉	1／2	滑石	緑灰色	(0.41)	0.37	0.04		20
131	小玉	完形	ガラス	青色	0.50	0.25	0.09		20

表19　ＳＢ５出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
132	甕	口径（18.4） 器高　28.0	復元完形品。口縁下位に稜あり。	胴ハケ →板ナデ	口ヨコナデ 胴ナデ	暗灰褐色 褐色	石・長(1~3)金 ◎	黒斑	21
133	甕	口径（15.4） 残高　6.0	内湾口縁。口縁端部は内傾する丸味のある面をもつ。	口ヨコナデ 胴ハケ(10本/cm)	口ヨコナデ 胴ナデ	淡橙褐色 淡橙褐色	石・長(1~4)金 ◎		
134	甕	口径（16.5） 残高　8.3	内湾口縁。口縁端部は内傾する丸味のある面をもち、内側にわずかに肥厚する。	口ヨコナデ 胴ハケ(マメツ)	頸ハケ→ナデ 胴ナデ	淡褐黄色 淡褐黄色	石・長(1~2)金 ◎		21
135	壺	口径（13.9） 残高　4.3	二重口縁壺。口縁端面はナデ凹む。小片。	ヨコナデ	口ヨコナデ 胴ケズリ→ナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	密・金 ◎	黒斑	
136	壺	残高　5.4	底部完形品。	胴ハケ 底ハケ→ナデ	ナデ・板ナデ	橙褐色 橙茶褐色	石・長(1~2)金 ◎	黒斑	
137	椀	口径　12.1 器高　5.6	体部は内湾し、口縁部は短く直立する。口縁端部は内傾する。	口ヨコナデ 体ナデ	口ヨコナデ 底ナデ	橙褐色 橙褐色	石・長(1~3)金 ◎		21
138	高坏	口径（17.7） 残高　5.6	坏部下位にわずかに稜をもち、口縁部は外反する。	マメツ	マメツ	淡褐色 淡褐色	密 ◎		
139	蓋	口径（11.9） 器高　5.1	有蓋高坏。つまみ上部は凹む。口縁端部は内傾する凹面をなす。	天回転ヘラケズリ 口回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎		
140	坏身	口径（10.8） 器高　5.0	たちあがり端部は内傾し、受部端に沈線状の凹みが巡る。	口回転ナデ 底回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		

表20　ＳＢ３出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
141	坏蓋	口径 (11.2) 残高 4.8	丸味のある天井部。 口縁端部は内傾する。	天回転ヘラケズリ 口回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎		
142	高坏	口径 (14.8) 残高 2.3	口縁部小片。	ナデ	ナデ	橙褐色 橙褐色	密 ◎	黒斑	
143	高坏	残高 1.5	坏部小片。	ナデ	ミガキ	淡褐色 橙褐色	密・金 ◎		
144	甕	残高 2.6	貼付凸帯文1条。口唇部に押圧あり。 弥生前期。	ナデ・ヨコナデ	ナデ	茶褐色 褐色	石・長(1)金 ◎		
145	甕	残高 2.3	貼付凸帯文１条。凸帯下位に刻目文あり。弥生前期。	ナデ	ミガキ？	茶褐色 褐色	石・長(1～2)金 ◎		
146	甕	残高 2.5	貼付凸帯文1条。凸帯上に刻目あり。 弥生前期。	ナデ・ヨコナデ	ミガキ？	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2) ◎		
147	甕	残高 3.0	貼付凸帯文1条。凸帯上に刻目あり。 弥生前期。	ミガキ？	マメツ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3) ◎		
148	壺	残高 3.5	肩部片。貝殻施文による列点文あり。 弥生中期後半。	マメツ(ナデ)	ナデ	暗茶褐色 淡茶色	石・長(1～3)金 ◎		
149	壺	残高 4.8	ヘラ沈線文4条+弧文+ヘラ沈線文1条+斜線文+ヘラ沈線文2条。弥生前期。	ナデ？	ナデ・板ナデ	淡褐色 乳茶褐色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	
150	壺	底径 8.0 残高 2.9	平底。底部外面にヘラ沈線文２条。 弥生前期。	ナデ	ミガキ？ →ナデ	橙褐色 橙褐色	石・長(1～2)金 ◎		

表21　ＳＢ８出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
151	甕	口径 (21.0) 残高 2.9	内湾口縁。口縁端部は内傾し、 内方にやや肥厚する。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	石・長(1～3) ◎		
152	甕	口径 (18.0) 残高 5.9	直立口縁。口縁端部は丸く仕上げる。	底ハケ(10本/cm) (マメツ)	ナデ(マメツ)	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2)金 ◎		
153	高坏	残高 2.7	坏部下位に稜あり。小片。	マメツ（ナデ）	マメツ(ハケ?)	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1) ◎		
154	高坏	底径 (11.8) 残高 1.3	柱裾部内面に明瞭な稜あり。小片。	マメツ	ナデ(マメツ)	淡茶褐色 淡茶褐色	密 ◎		
155	高坏	底径 (9.7) 残高 1.2	柱裾部内面に明瞭な稜あり。小片。	ミガキ・ナデ	ヨコナデ (マメツ)	橙茶色 淡橙茶色	密 ◎		
156	椀	口径 (16.4) 残高 8.2	体部は内湾し、口縁部はわずかに 外反する。	口ヨコナデ 胴ハケ	ハケ	暗茶褐色 暗褐色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	
157	製塩 土器	口径 (10.8) 残高 3.6	直口口縁。口縁端部は尖る。	タタキ	ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1) ◎		21
158	坏蓋	口径 (12.2) 残高 3.7	丸味のある天井部。 口縁端部は内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	自然釉	
159	坏蓋	残高 3.5	断面三角形状の鋭い稜あり。小片。	天回転ヘラケズリ 口回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 青灰色	密 ◎	自然釉	
160	坏身	口径 (11.9) 器高 3.1	たちあがりは低く内傾し、たちあがり端部は尖り気味。１/４の残存。	口回転ナデ 底回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
161	蓋	つまみ径 3.8 残高 2.4	有蓋高坏。つまみ中央部は凹む。	つまみ回転ナデ 天回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎	自然釉	
162	高坏	残高 3.0	脚部片。透かしを２箇所看取。 小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
163	壺	口径 (8.7) 残高 3.8	外反口縁。口縁端面に沈線1条あり。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	自然釉	
164	壺	口径 (12.0) 残高 3.5	広口壺。口縁端部は上下方に拡張する。	回転ナデ	回転ナデ	白灰色 白灰色	密 ◎		
165	甕	残高 2.2	頸部片。波状文10条あり。	回転ナデ	ナデ 回転ナデ	暗赤灰色 暗灰色	密 ◎		
166	壺	残高 2.1	ヘラ沈線文３条+木葉文。弥生前期。	ミガキ	ナデ	灰褐色 黒灰色	石・長(1)金 ◎	黒斑	21
167	土錘	長さ 4.3 幅 1.3	完形品。φ0.4cmの穿孔。	ナデ(マメツ)	マメツ	橙褐色 乳褐色	密 ◎		21

表22　ＳＢ８出土遺物観察表　　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
168	石庖丁	1／5	結晶片岩	2.2	3.2	0.4	3.55		

表23　掘立１出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
169	坏蓋	□径 (12.2) 残高 2.5	小片。□縁端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ◎	自然釉	
170	高坏	残高 3.8	脚部片。透かしを２箇所看取。小片。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
171	甕	□径 (30.3) 残高 2.7	内湾□縁。頸部に貼付凸帯文１条。凸帯上に布目圧痕あり。	ヨコナデ	(口)ヨコナデ (胴)ナデ･ヨコナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	石･長(1～2) ◎		
172	壺	残高 2.0	凹線文４条＋円形浮文。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石･長(1) ◎		
173	壺	残高 5.6	肩部片。刻目文あり。小片。	ハケ→ミガキ	ナデ	茶褐色 暗茶褐色	石･長(1～2)金 ◎		
174	高坏	残高 1.3	脚部小片。	ナデ	ナデ	乳白色 乳白色	石･長(1～2) ◎		

表24　掘立２出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
175	坏蓋	□径 (11.3) 残高 3.6	丸味のある天井部。 □縁端部は内傾する。小片。	(天)回転ヘラケズリ (口)回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
176	坏蓋	□径 (12.4) 残高 4.0	丸味のある天井部。 □縁端部は内傾する。	(天)回転ヘラケズリ (口)回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
177	甕	残高 3.1	凸線２条＋波状文16条。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 暗灰色	密 ◎	自然釉	

表25　ＳＸ１出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
178	浅鉢	残高 6.2	小片。	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	暗褐色 灰褐色	石･長(1～4)金 ◎	黒斑	21
179	甕	□径 (21.5) 残高 4.1	折曲□縁。□縁端面に刻目文、胴部にヘラ沈線文２条。	ミガキ・ナデ	ナデ	茶褐色 淡褐色	石･長(1～3) ◎		
180	甕	□径 (20.0) 残高 2.5	貼付凸帯文１条。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶色 茶褐色	石･長(1～2)金 ◎		
181	甕	残高 1.7	□縁端部に刻目文。	ナデ	マメツ	暗褐色 淡茶色	石･長(1) ◎		
182	甕	残高 3.9	ヘラ描きタテ沈線文６条。	ミガキ	ヨコナデ	暗茶褐色 淡茶色	石･長(1～2)金 ◎		
183	壺	□径 (34.6) 残高 4.6	大型品。□縁下に段あり。	ミガキ	ミガキ	茶色 茶色	石･長(1～2)金 ◎	黒斑	
184	壺	残高 4.5	ヘラ沈線文２条＋木葉文。	ミガキ	ナデ	淡茶褐色 淡褐色	石･長(1～4)金 ◎		21
185	壺	残高 2.8	ヘラ沈線文３条+タテ沈線文５条+タテ沈線文３条。	ミガキ	ヨコナデ	暗茶褐色 淡茶褐色	石･長(1～2)金 ◎	黒斑？	
186	壺	残高 5.2	頸部片。段あり。	ミガキ	ハケ・ナデ	橙茶褐色 褐色	石･長(1～2)金 ◎		
187	壺	残高 4.9	肩部片。斜線文３条。	ミガキ	ナデ	黄茶褐色 橙茶色	石･長(1)金 ◎		
188	壺	残高 3.5	ヘラ沈線文３条＋山形文(２条1組)。	ミガキ	ナデ ミガキ？	淡褐色 淡褐色	石･長(1)金 ◎		
189	壺	残高 1.9	広□壺。□縁部は上下方に拡張し、□縁端面に斜格子目文あり。	ヨコナデ	マメツ	乳黄茶色 黒灰色	石･長(1～2) ◎		
190	高坏	底径 (16.5) 残高 1.2	脚裾部小片。	ヨコナデ →ミガキ	ハケ(6本/cm)→ ミガキ(ヨコ→タテ)	淡橙茶色 淡橙茶色	密・金 ◎		
191	高坏	残高 1.8	坏部下位に段あり。	ミガキ	ナデ	茶色 茶色	石･長(1～2)金 ◎		
192	甕	底径 (7.2) 残高 1.3	平底。小片。	ナデ	ナデ	暗灰茶褐色 茶褐色	石･長(1～2)金 ◎	黒斑	
193	甕	底径 (6.2) 残高 1.5	平底。	ナデ	ナデ(マメツ)	乳茶褐色 乳茶褐色	石･長(1～2) ◎	黒斑	
194	坏蓋	□径 (11.2) 残高 2.0	小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎		
195	高坏	□径 (16.0) 残高 4.1	無蓋高坏。凸線２条＋波状文５条。	回転ナデ	回転ナデ	濃青灰色 濃青灰色	密 ◎	自然釉	
196	椀	□径 (8.6) 残高 3.6	把手付椀。凸線２条＋波状文６条。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	21

表26　ＳＸ１出土遺物観察表　　玉類

番号	器種	残存	材質	色	法量 直径(cm)	法量 高さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
197	臼玉	3／4	滑石	緑灰色	0.68	0.45	0.32		

表27　掘立３出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
198	坏	底径 (6.0) 残高 1.9	平底。	マメツ(ナデ)	マメツ(ナデ)	淡乳褐色 淡橙茶色	密 ◎		

表28　柱穴出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
199	壺	残高 5.2	口縁下にφ0.4cmの円孔あり。	ナデ	ナデ	暗灰茶褐色 暗茶褐色	石・長(1～2)金 ◎	SP61 黒斑	
200	ﾐﾆﾁｭｱ	残高 2.8	小片。	タタキ？ ナデ	ナデ	淡赤茶色 乳白色	石・長(1)金 ◎	SP305	

表29　柱穴出土遺物観察表　　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
201	釘	ほぼ完存	鉄	7.3	1.2	0.6	4.79	SP138	21
202	不明	不明	鉄	4.6	1.4	0.3	3.83	SP134	21

表30　柱穴出土遺物観察表　　玉類

番号	器種	残存	材質	色	法量 直径(cm)	法量 高さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
203	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.55	0.35	0.12	SP１	

表31　第Ⅴ層出土遺物観察表　　土製品

（1）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
204	壺	口径 (12.4) 残高 8.3	口縁端面に凹線文２条、頸部に「ノ」の字状文あり。	㊐ヨコナデ ㊍ハケ(10本/cm)	㊐ヨコナデ ㊍ナデ→ミガキ	灰茶褐色 暗茶褐色	石・長(1～2)金 ◎		
205	壺	口径 (15.0) 残高 6.3	口縁端面に凹線文１条、頸部に沈線文２条あり。	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	橙茶色 橙茶色	石・長(1～2)金 ◎		
206	支脚	口径 (11.2) 残高 16.4	U字形支脚。中空。	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ	暗茶褐色 暗褐色	石・長(1～5)金 ◎		22
207	甕	口径 (18.6) 残高 7.2	内湾口縁。口縁下位に稜あり。 口縁端部は内傾する。	㊐ヨコナデ ㊍ハケ(5本/cm)	㊐ヨコナデ ㊍ナデ・板ナデ	橙茶褐色 橙茶褐色	石・長(1～2)金 ◎		
208	甕	口径 (17.1) 残高 20.6	内湾口縁。口縁端部は内傾する凹面をなす。胴上位にタテ方向の沈線文1条あり(線刻か)。	㊍ハケ(5本/cm) (マメツ)	㊍ナデ→ ハケ(3～4本/cm)	橙茶色 橙茶色	石・長(1～2)金 ◎		22
209	高坏	口径 (15.2) 器高 12.4	口縁部は外反し、柱裾部は外方に内湾して開く。充填技法。	ナデ→ヨコナデ	㊐ナデ･ヨコナデ ㊋ケズリ	明橙茶色 明橙茶色	石・長(1～2)金 ◎		22
210	高坏	底径 (10.0) 残高 6.3	柱裾部境内面に不明瞭な稜をもつ。	マメツ	シボリ痕 マメツ	淡橙褐色 淡橙褐色	密 ◎	黒斑	
211	甑	口径 (24.0) 残高 5.2	直口口縁。口縁端面はナデ凹む。 小片。	マメツ (ハケ・ナデ)	マメツ (ハケ・ナデ)	淡橙褐色 淡橙褐色	石・長(1～2)金 ◎		
212	甑	残高 8.3	胴部片。把手部接合痕が残る。 小片。	ハケ(5本/cm) (マメツ)	ナデ マメツ	橙褐色 橙褐色	石・長(1～2)金 ◎		
213	甑	残高 6.3	把手部完形品。断面円形。	マメツ(ナデ)	マメツ(ナデ)	淡橙茶色 乳茶色	石・長(1～2) ◎		
214	甑か甕	残高 5.5	軟質土器。外面に縄蓆文あり。	タタキ(マメツ)	マメツ	橙褐色 橙褐色	石・長(1～3) ◎		22
215	坏身	残高 3.3	たちあがりは内傾し、受部は水平にのびる。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
216	坏身	口径 (12.2) 残高 4.0	たちあがりは低く内傾し、端部は尖り気味に丸い。	㊐回転ナデ ㊇回転ヘラケズリ	回転ナデ ㊇ナデ	灰色 青灰色	密 ◎		
217	高坏	口径 (15.0) 残高 5.2	無蓋高坏。凸線２条＋波状文５条。	㊐回転ナデ ㊇回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎		
218	台付椀	底径 (10.0) 残高 3.5	「ハ」の字状に開く高台。	回転ナデ	㊇回転ナデ →ナデ	白灰色 白灰色	密 ◎		
219	甕	口径 (20.0) 残高 5.5	口縁部は上下方に拡張し、断面三角形を呈する。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	自然釉	

第Ⅴ層出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
220	甕	残高　2.9	口縁端部は方形状を呈し、口縁端面はやや凹む。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎		

表32　第Ⅴ層出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
221	剥片	—	サヌカイト	7.9	10.3	1.5	104.43		

表33　第Ⅴ層出土遺物観察表　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
222	鉄滓	—	鉄	4.3	3.5	2.0	28.48		22

表34　第Ⅴ層出土遺物観察表　玉類

番号	器種	残存	材質	色	法量 直径(cm)	法量 高さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
223	管玉	完形	碧玉	青緑色	0.36	1.00	0.21		22

表35　地点不明出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
224	坏	口径 (14.4) 残高　3.4	小片。	マメツ (ヨコナデ)	マメツ (ヨコナデ)	灰白色 灰白色	密 ◎		
225	皿	口径　(5.8) 器高　1.2	底部回転糸切り。口縁部一部欠損。	ヨコナデ (底)回転糸切り	(底)ヨコナデ →ナデ	乳茶色 乳茶色	密 ◎		
226	碗	残高　2.0	青磁碗。蓮弁文あり。小片。	施釉	施釉	薄緑色 薄緑色	密 ◎	胎土： 灰色	
227	擂鉢	口径 (24.8) 残高　3.7	備前焼。条線5条あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗赤褐色 暗赤褐色	密 ◎		
228	壺	口径 (14.5) 残高　4.0	複合口縁壺。波状文4条あり。 弥生後期。	ヨコナデ	ハケ(7本/cm) →ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～6)金 ◎		
229	壺	残高　1.7	複合口縁壺。口縁端面に波状文4～5条あり。弥生末。	ヨコハケ？	ハケ(10本/cm)	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2) ◎		
230	壺	残高　5.2	肩部片。波状文4条以上。 弥生中期後半。	ハケ(マメツ)	ナデ	淡橙褐色 淡黄褐色	石・長(1～4) ◎		
231	高坏	口径 (25.8) 残高　2.0	口縁端部に刻目文。弥生中期中葉。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 暗茶褐色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	
232	高坏	残高　6.5	沈線文9条+未貫通の矢羽根透かし。 弥生中期後半。	ナデ	シボリ痕 ナデ(マメツ)	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1～2)金 ◎		
233	高坏	残高　1.7	半截竹管文+φ1.4cmの円孔。 弥生後期後半。	ミガキ→ナデ	ナデ・ハケ	淡茶色 淡茶色	石・長(1) ◎		
234	高坏	残高　5.2	短い柱部。弥生末。	マメツ	マメツ (ケズリ・ヨコナデ)	橙褐色 橙褐色	石・長(1～3) ◎		
235	壺	口径　7.6 器高　7.9	小型丸底壺。口縁部を一部欠損。	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	ナデ (底)工具ナデ	乳橙色 乳橙色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	22
236	壺	口径　(8.1) 残高　6.2	小型丸底壺。口縁部はやや内湾する。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ(8本/cm)	(胴)ナデ・ヨコナデ 工具ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1)金 ◎	黒斑？	
237	壺	口径　8.6 残高　4.6	小型丸底壺。口縁部は直立気味。	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	淡黄灰色 淡黄灰色	石・長(1)金 ◎	黒斑	
238	提瓶	口径　(6.8) 残高　4.9	口縁部。口縁端部は尖り気味に丸い。	回転ナデ	(口)回転ナデ (胴)ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		
239	甕	底径 (15.0) 残高 33.8	胴部1/4の残存。	平行叩き	円弧叩き	灰色 灰色	密 ◎		
240	甕か鉢	底径 (18.2) 残高　1.8	小片。	マメツ(ナデ)	マメツ	乳白茶色 乳白茶色	密 ◎		

表36　地点不明出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
241	石鑿	基部欠損	緑色片岩	5.7	4.5	1.2	24.10		22
242	磨製石斧	1／2	結晶片岩	7.7	6.1	2.5	199.95		22

第５章　調査の成果と課題

樽味四反地遺跡14次・16次調査は、樽味地区重要遺跡確認調査として実施した。両調査からは主に、古墳時代を主体とする集落遺構や遺物を確認することができた。

弥生時代の遺構は、14次調査にて中期後半の土坑を、16次調査では、中期から後期の竪穴住居と土坑を検出した。このうち、16次調査検出の土坑ＳＫ１は直径４ｍ以上、深さ1.3m前後を測る大型円形土坑で、土坑内からは砂や河原石が密集して出土したほか、土坑基底部からは湧水が認められた。これらのことから、ＳＫ１は井戸もしくは貯水施設として利用された可能性が考えられる。これまで、樽味地区においては、井戸や貯水施設等の遺構は検出されておらず、今後、周辺の調査により、ＳＫ１の性格や用途が解明できることを期待する。

このほか、ＳＫ１や古墳期の竪穴住居内より、弥生時代前期の土器片が数点ではあるが出土している。

さて、今回の報告では古墳時代の遺構の検出例が最も多い。特に16次調査では、11棟の竪穴住居や４棟の掘立柱建物を確認した。このうち、竪穴住居は４世紀後半のＳＢ１を初現とし、５世紀前半のＳＢ２、５世紀後半では５棟の竪穴住居（ＳＢ３・５・10・11・12）が検出され、さらに６世紀では４棟の竪穴住居（ＳＢ６・7・８・９）を検出した。これらの中には建替えもしくは重複関係が認められるものもあり、樽味地区においては、古墳時代を通して集落が継続して営まれていたことがわかる。

検出した竪穴住居のうち、ＳＢ１では埋土上位にて大量の河原石と共に弥生時代中期後半から後期の土器がまとまって出土しており、住居廃絶に伴う人為的な埋戻しが行われた様子が伺われる。

住居形態をみると、平面形態は方形もしくは長方形を呈し、規模は一辺６ｍ前後のものと、4.5m前後のもののほか、一辺７ｍを超えるやや大型住居がある。なお、６世紀代の住居は、住居全体を検出しておらず、平面形態や規模は定かではない。

このほか、掘立柱建物は切り合いや出土遺物より、概ね６世紀以降の建物と推測される。

注目される遺物では、第Ⅴ層中より縄蓆文を施した軟質土器片が１点出土している。

次に、古代では14次調査検出の溝ＳＤ１・２が注目される遺構である。溝の形状は調査地内を東西方向に延び、溝西端は南側へ向けて「Ｌ」字状に折曲がっている。溝内からは弥生土器や土師器、須恵器が混在して出土したが、主に７～８世紀代の土器が占める割合が高く、埋土や出土遺物より概ね、古代まで存続した溝と推測される。樽味地区における古代遺構の検出事例は少ないものの、硯片や奈良三彩などの出土例が報告されており、今回検出した溝を含め、今後、樽味地区における古代集落の範囲や構造及び性格解明が重要となる。

写　真　図　版

写真図版データ

1．遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35㎜判で補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパーアンギュロン90㎜　他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67　55㎜　他
	ニコンニューFM 2		ズームニッコール28～85㎜　他
フィルム	白　黒　ネオパンSS・アクロス		
	カラー　アスティア100F		

2．遺物は、4×5判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビュー45G
レンズ	ジンマーS 240㎜F5.6他
ストロボ	コメット/CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	白黒　ネオパンアクロス

3．単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機	ラッキー450MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール135㎜F5.6A・50㎜ F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードⅣ　RCペーパー

4．製　版　写真図版175線

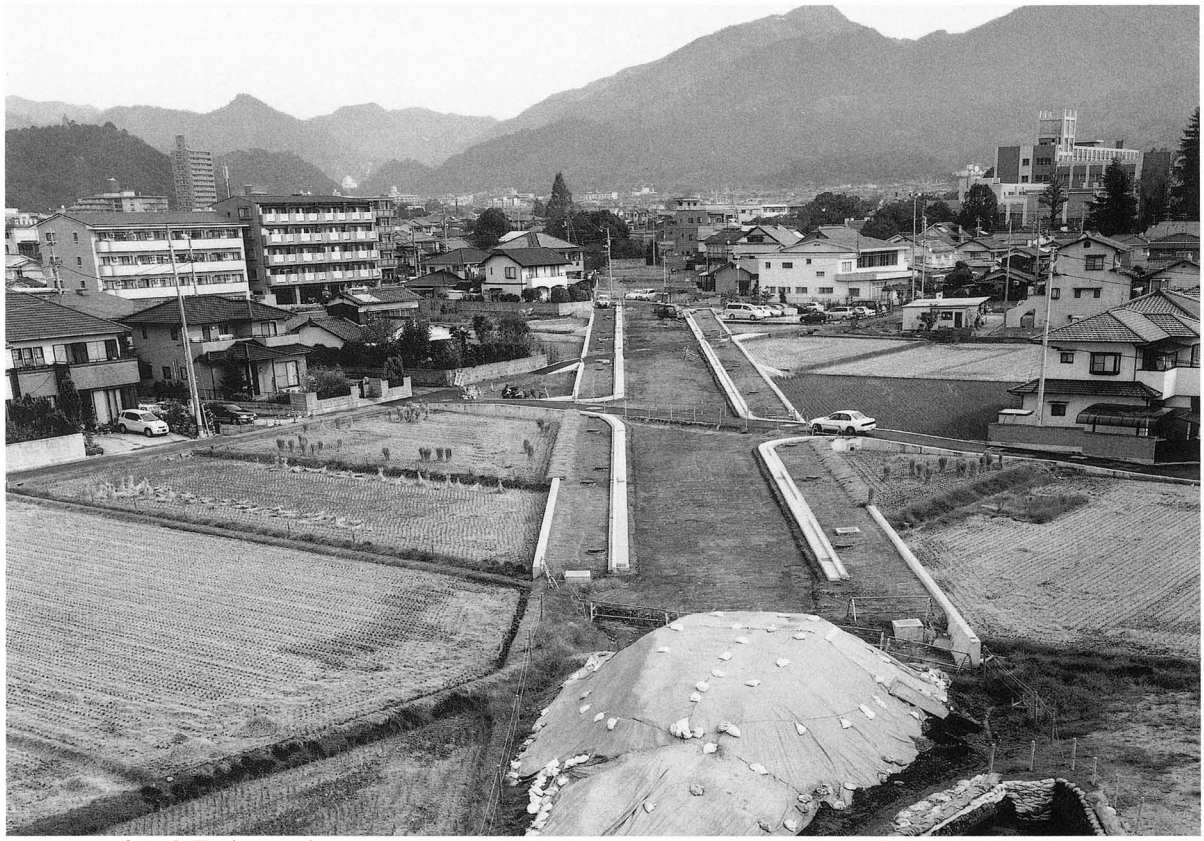
印　刷　オフセット印刷

用　紙　マットコート　76.5kg

【参考】『埋文写真研究』vol.1～19　　『報告書制作ガイド』

［大西朋子］

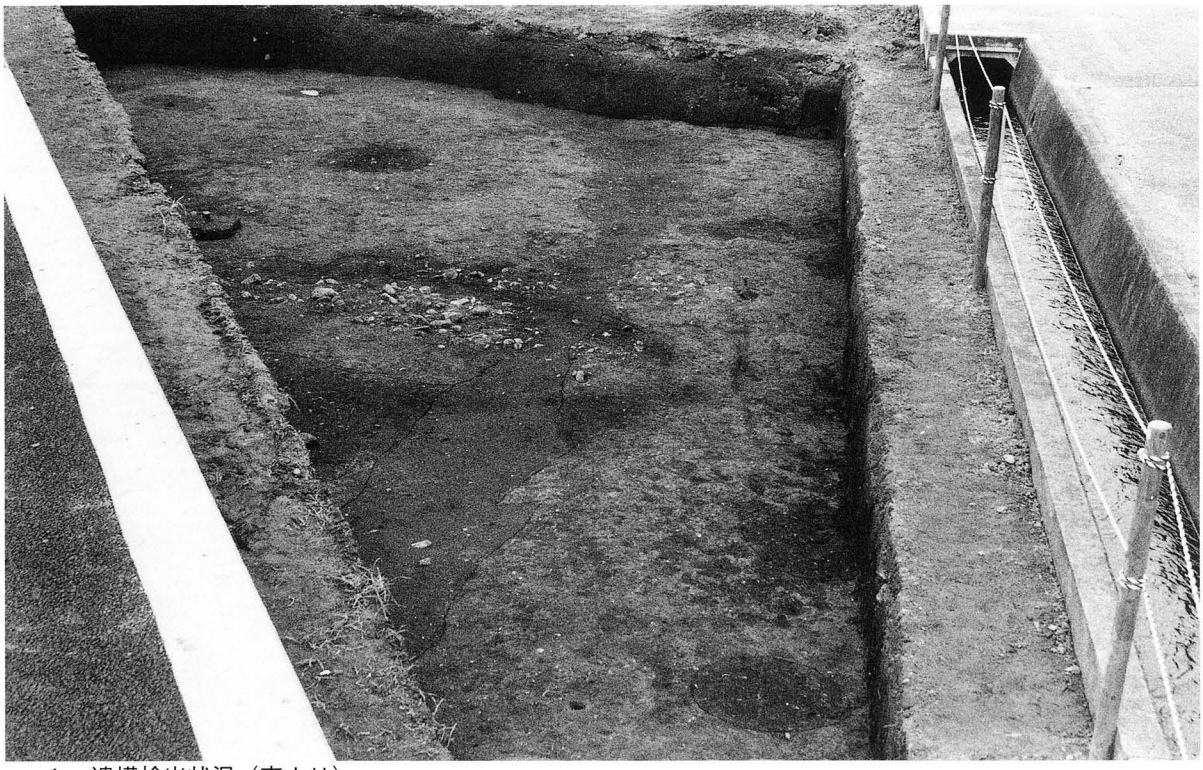
図版1



1　調査前全景（西より）

2　北壁土層（南東より）

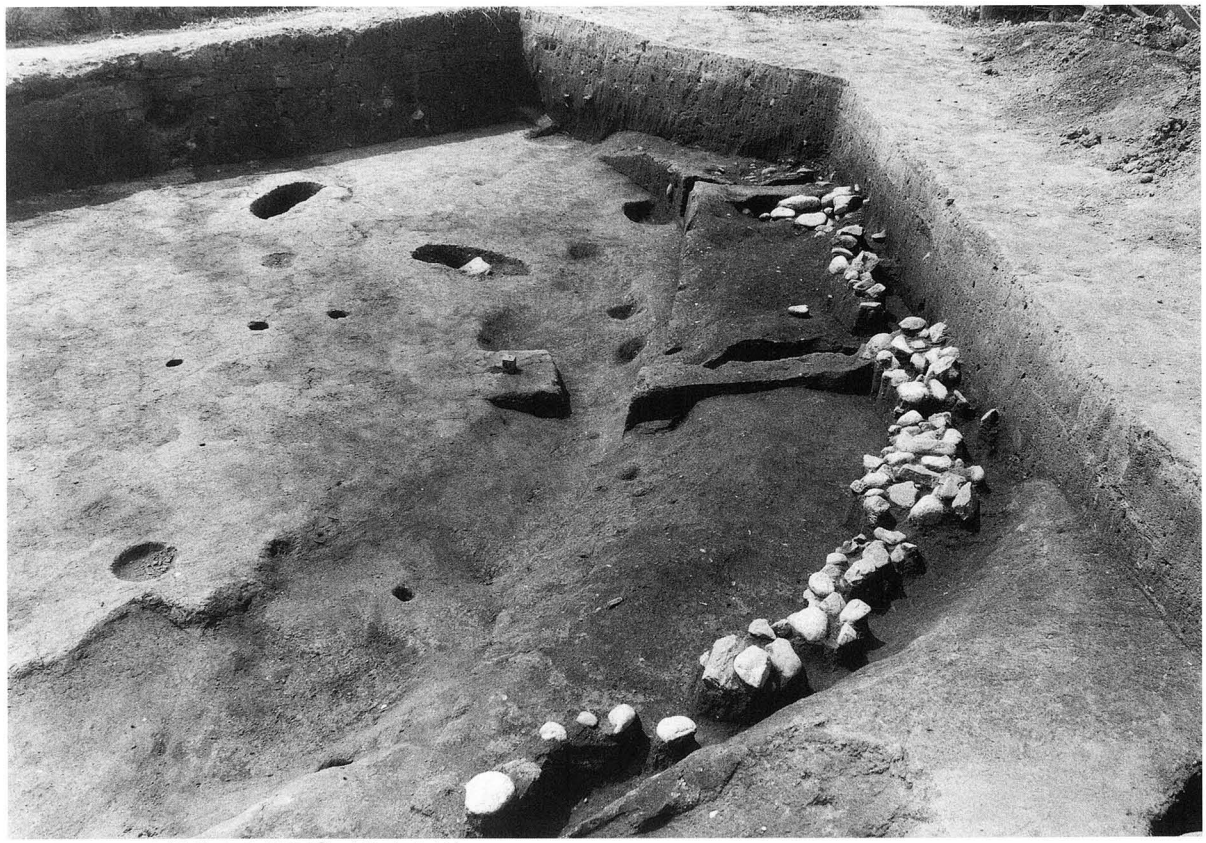
図版2



1　遺構検出状況（東より）

2　完掘状況（東より）

1　ＳＫ１検出状況（北より）

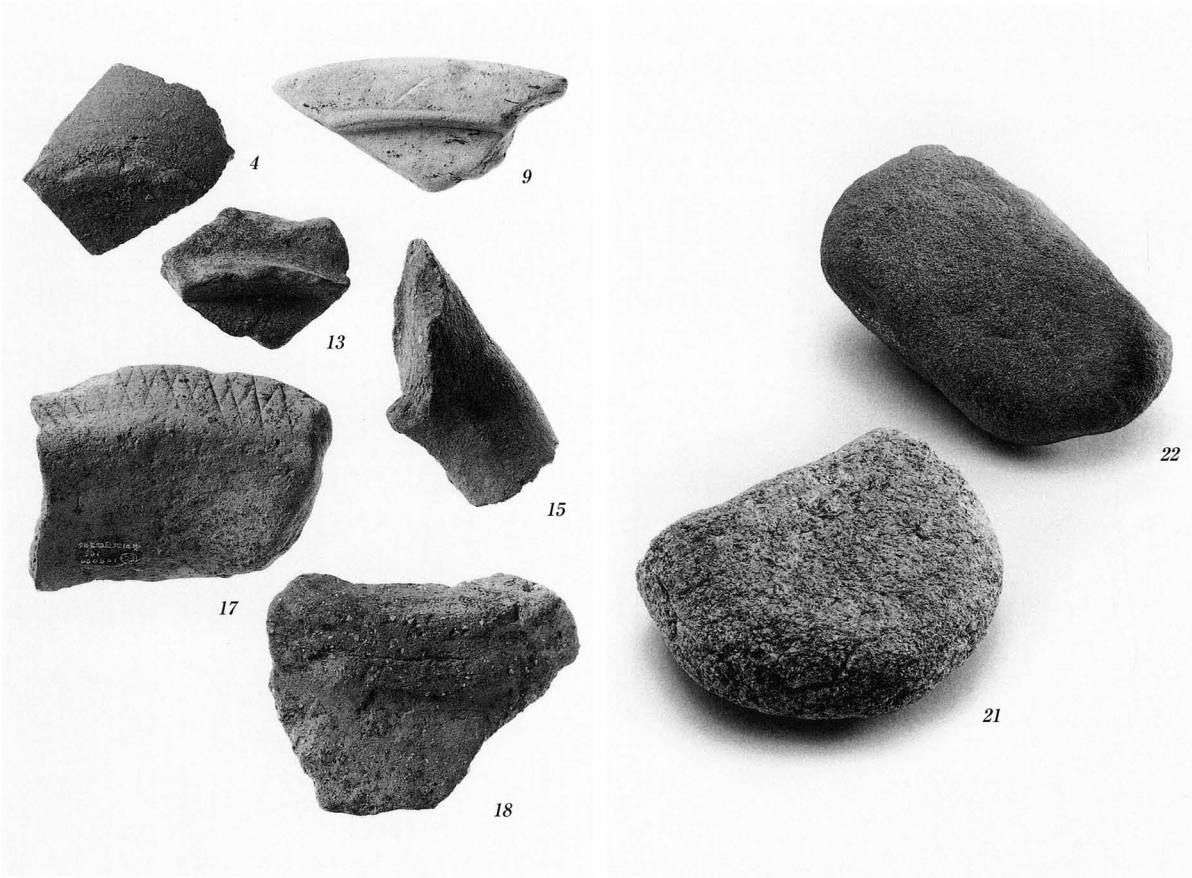


2　ＳＤ２遺物出土状況①（北東より）

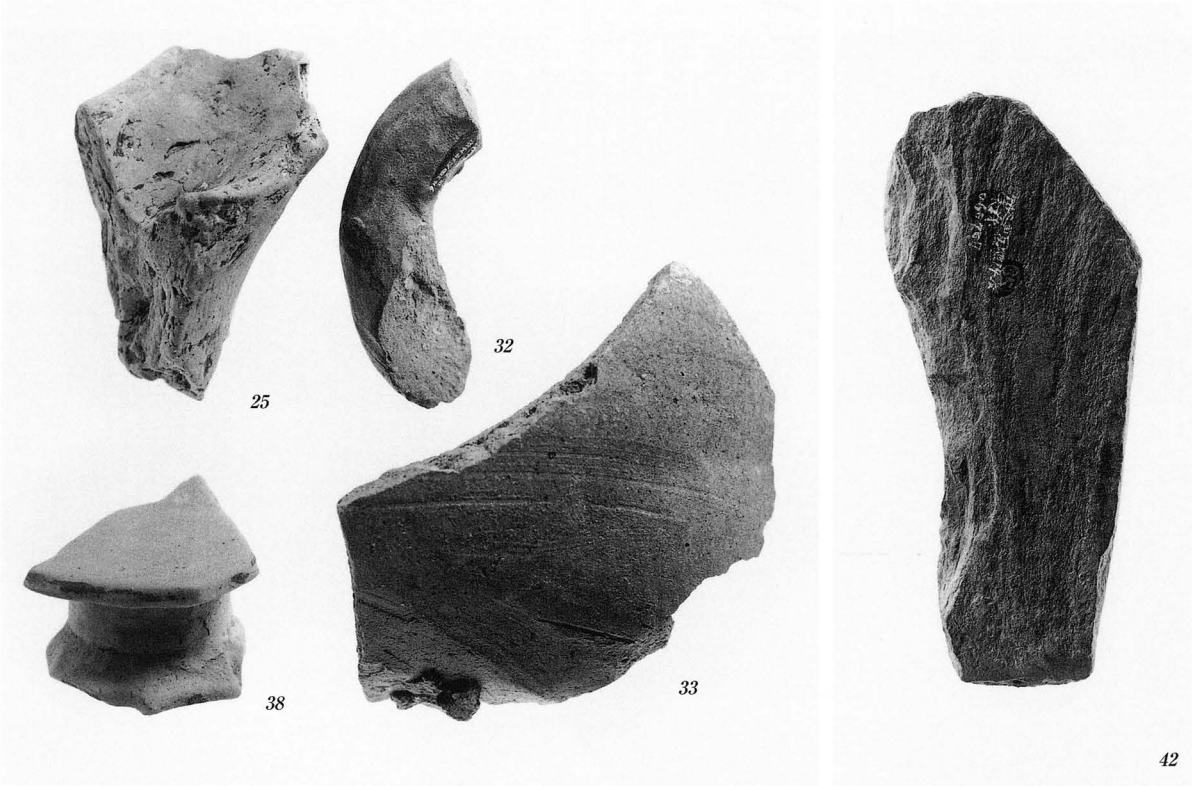
図版4

1　ＳＤ２遺物出土状況②（南東より）

2　ＳＤ１・２完掘状況（西より）



1　ＳＤ１出土遺物



2　出土遺物（ＳＰ４：25、第Ⅲ層：32・33、地点不明：38・42）

図版6

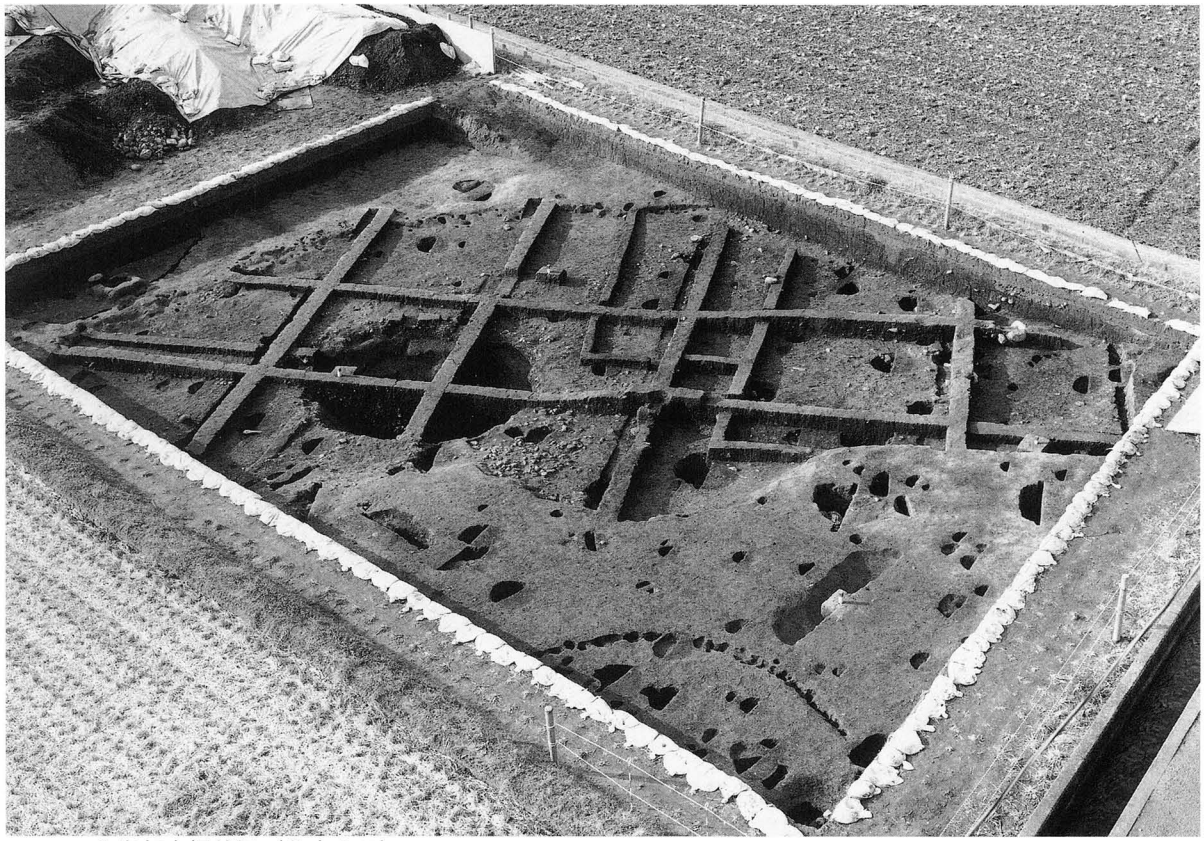
1　調査地全景（北東より）

2　西壁土層（南東より）

1　北半部遺構検出状況（南より）

2　南半部遺構検出状況（北より）

図版8



1　北半部完掘状況（北東より）

2　南半部完掘状況（北より）

1　ＳＢ４検出状況（北より）

2　ＳＫ１遺物出土状況（南東より）

図版10

1　ＳＫ１完掘状況（南より）

2　ＳＢ１・２検出状況（東より）

1　ＳＢ１遺物出土状況①（北より）

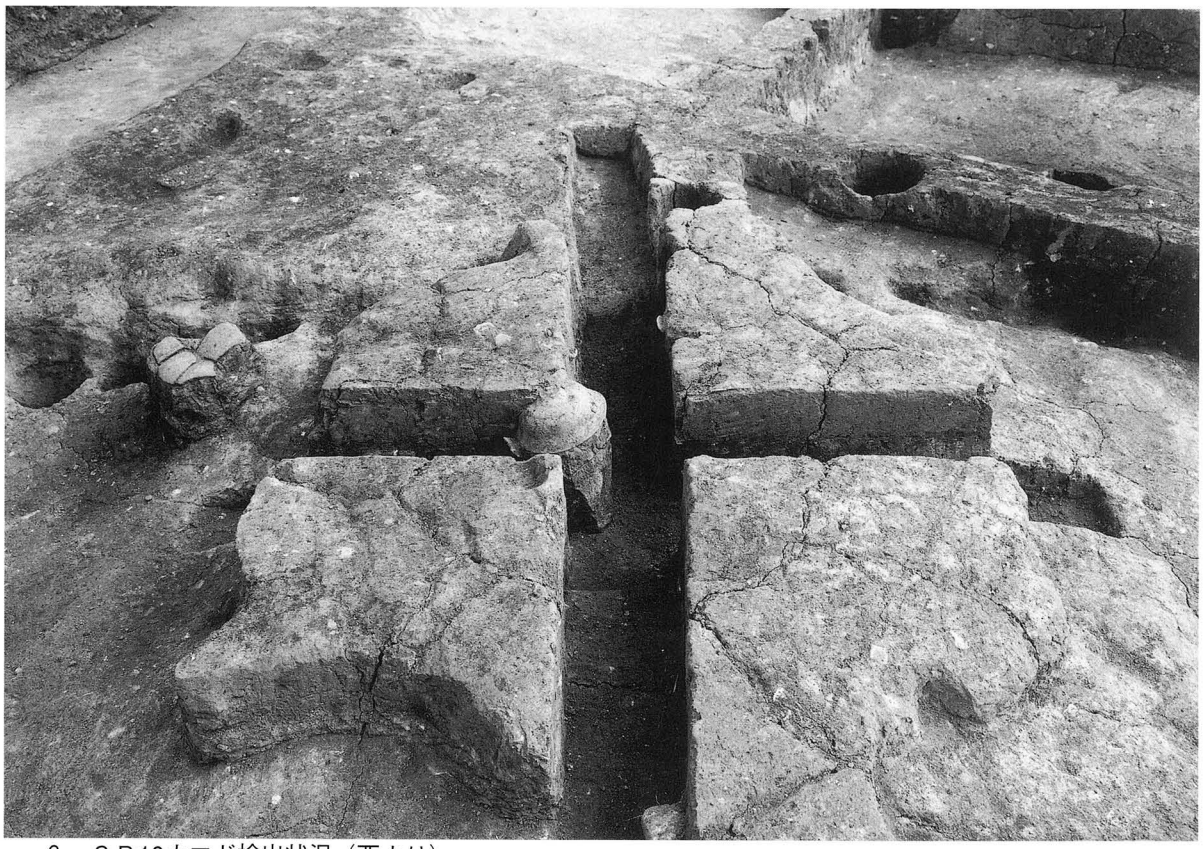
2　ＳＢ１遺物出土状況②（南より）

図版12

1　ＳＢ11・12検出状況（西より）

2　ＳＢ11カマド検出状況（東より）

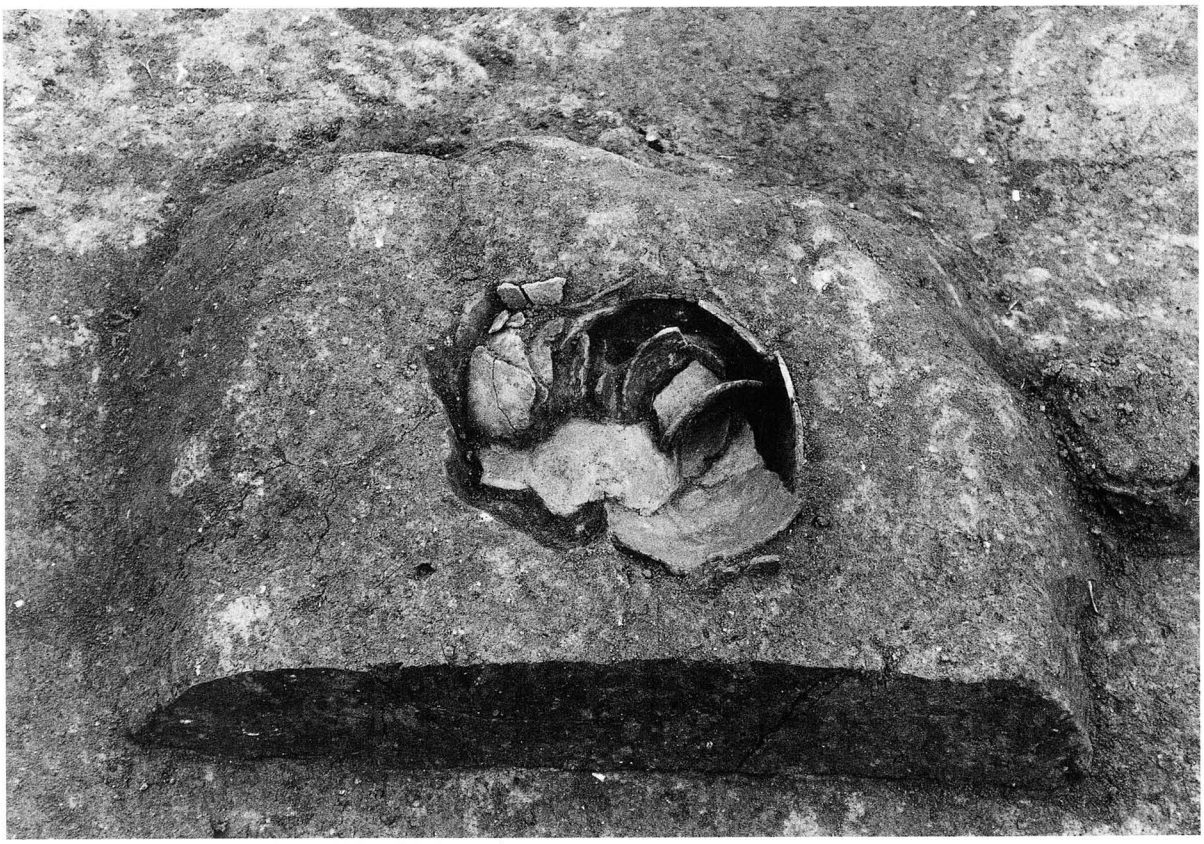
1　ＳＢ10検出状況（南より）



2　ＳＢ10カマド検出状況（西より）

図版14

1　ＳＢ５検出状況（南より）

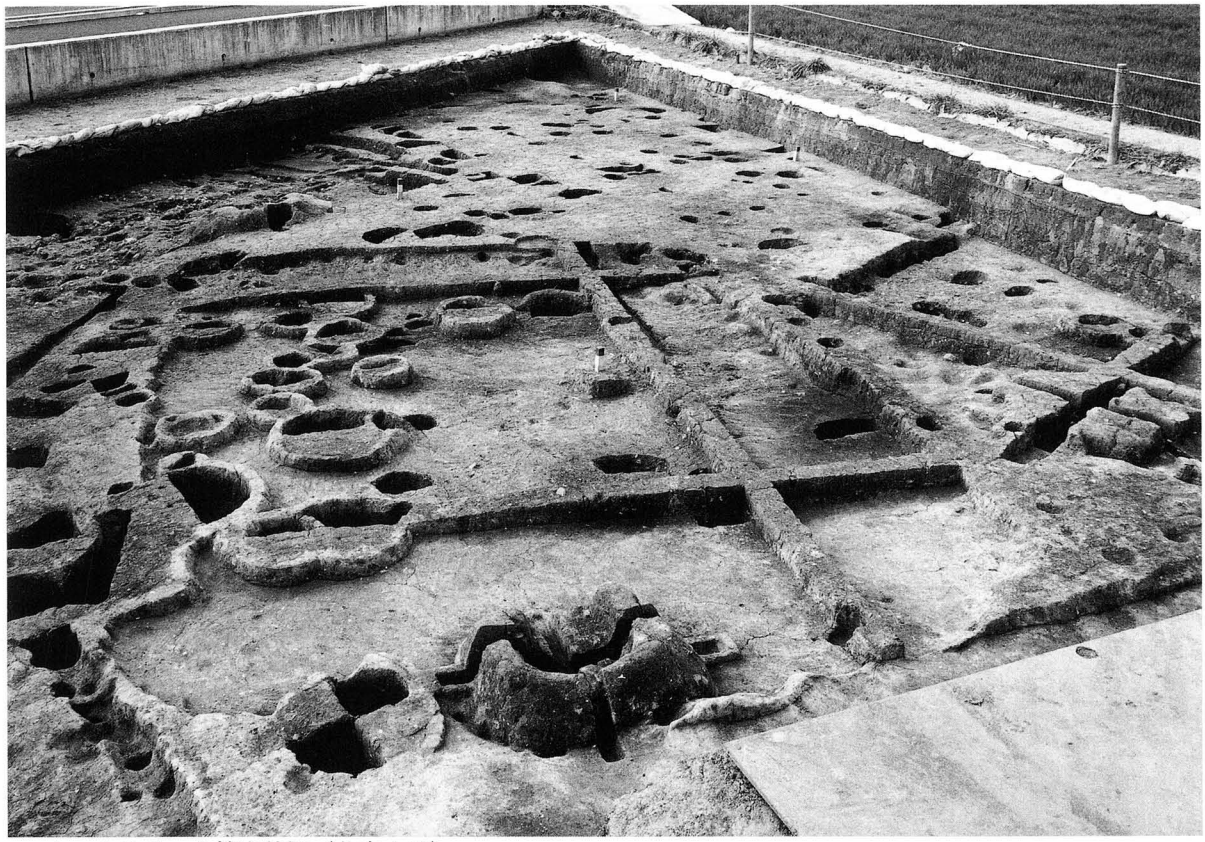


2　ＳＢ５カマド遺物出土状況（南東より）

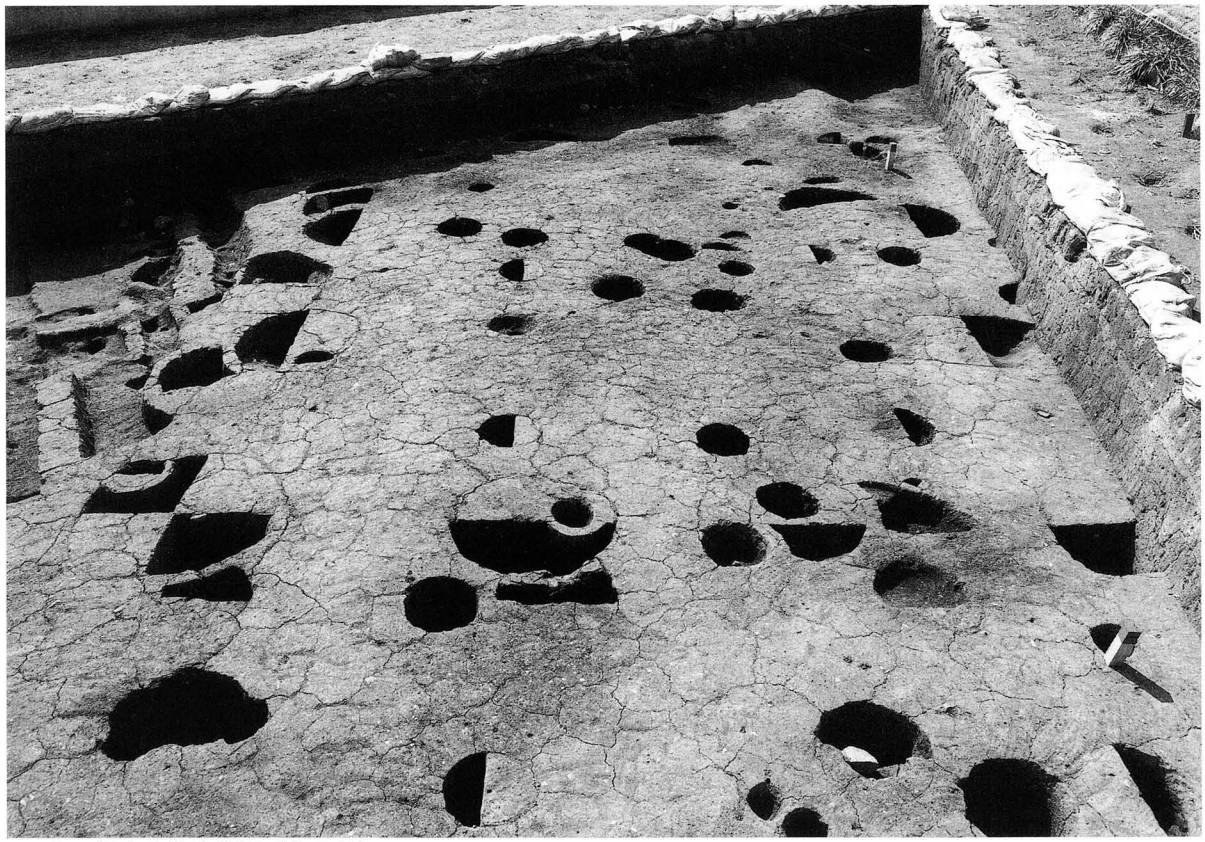
1　ＳＢ５カマド検出状況（南より）

2　ＳＢ６・７検出状況（北より）

図版16



1　ＳＢ８・９検出状況（北東より）

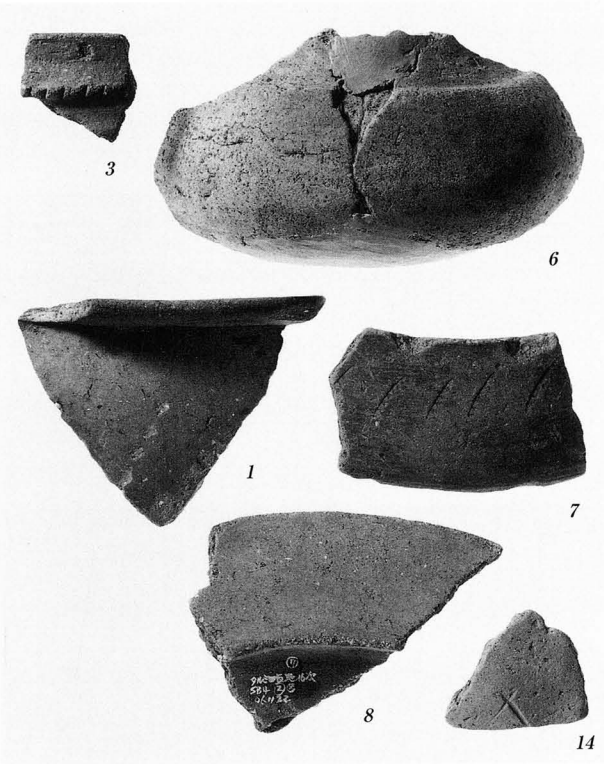


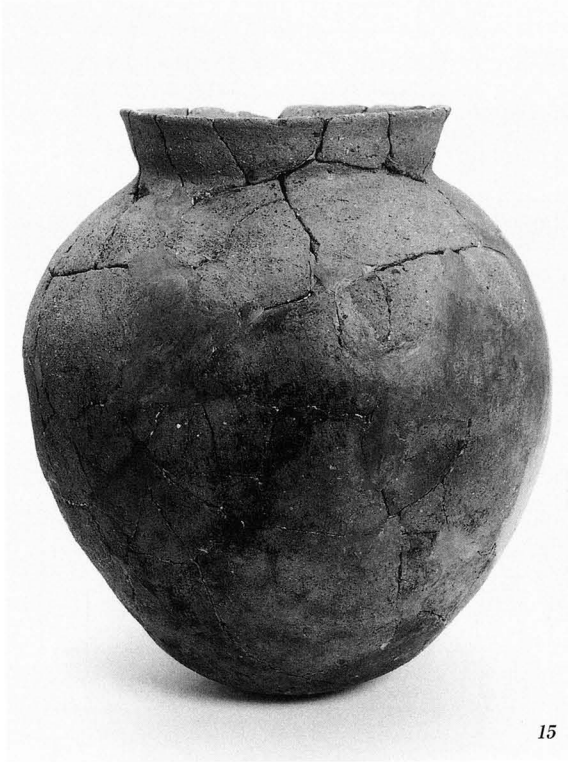
2　掘立５検出状況（北より）

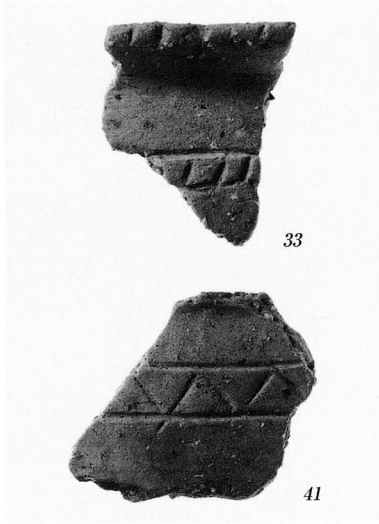
1　作業風景（南より）

2　現地説明会（北より）

図版18



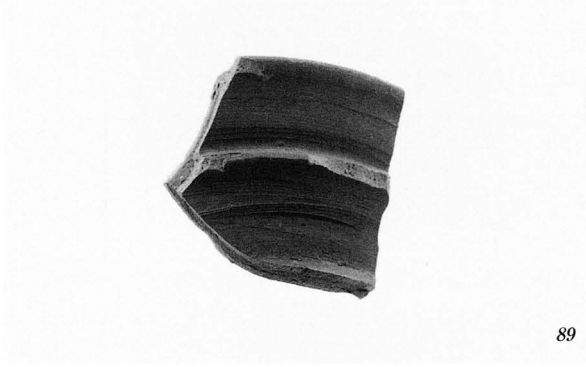


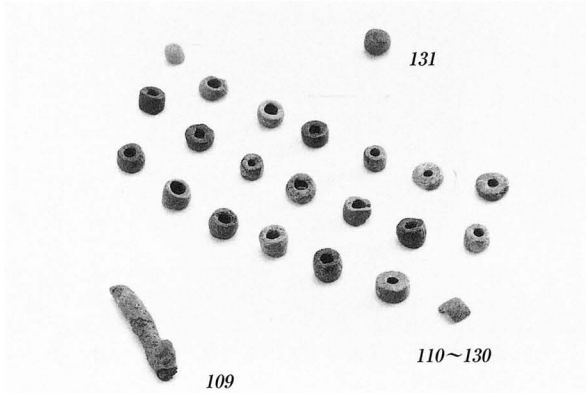


1　出土遺物（ＳＫ１：１・３・６～８・14・15、ＳＢ１①：24・25・28・33・41・44）

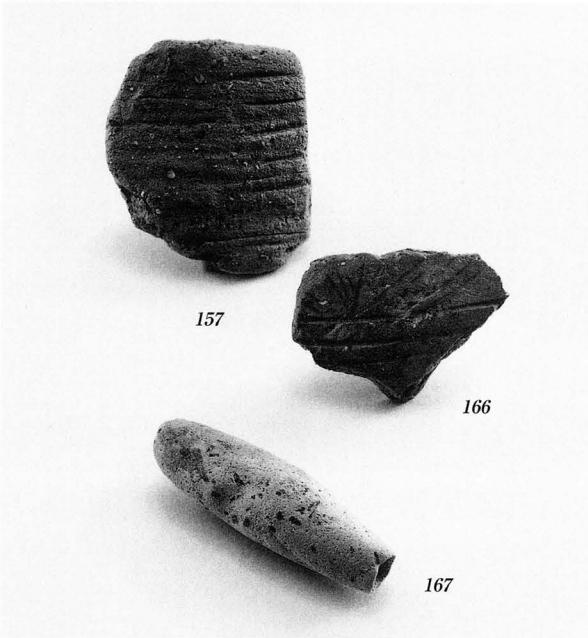
1　出土遺物（ＳＢ１②：49・50・57・61、ＳＢ２：63・64・66・77・78・81）

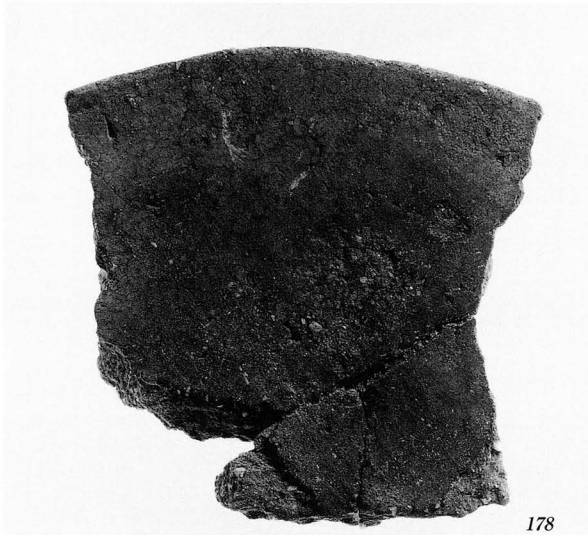
図版20

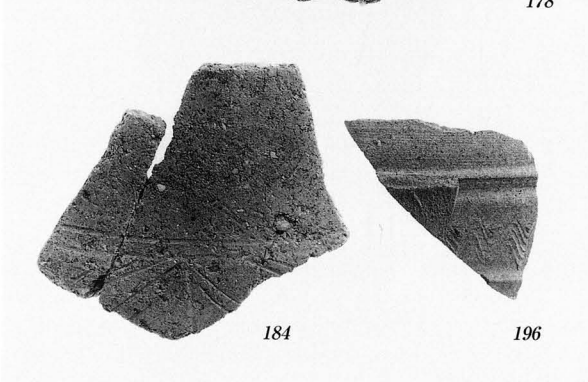




1　出土遺物（ＳＢ11：84・85・88、ＳＢ12：89、ＳＢ10：92・93・97・103・107・109～131）

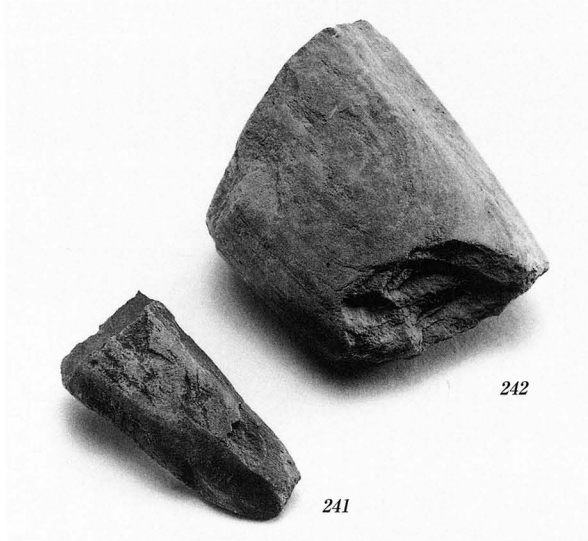






1　出土遺物（ＳＢ５：132・134・137、ＳＢ８・９：157・166・167、ＳＸ１：178・184・196、柱穴：201・202）

図版22



1　出土遺物（第Ⅴ層：206・208・209・214・222・223、地点不明：235・241・242）

報告書抄録

ふりがな	たるみ したんじ いせき
書名	樽味四反地遺跡　－14次・16次調査－
副書名	平成18年度国庫補助市内遺跡発掘調査報告書1
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第133集
編著者名	宮内慎一・水本完児・大西朋子
編集機関	松山市教育委員会 財団法人 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
所在地	市教委：〒790－0003　松山市三番町6丁目6－1　TEL（089）948－6605 埋　文：〒791－8032　松山市南斎院町乙67－6　TEL（089）923－6363
発行年月日	西暦　2009年　1月　31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
たるみしたんじ 樽味四反地14次	たるみ 樽味4丁目 219番地1	38201		33°50′11″	132°47′48″	20060703 ～ 20060831	64	重要遺跡 確認調査
たるみしたんじ 樽味四反地16次	たるみ 樽味4丁目 222番地1	38201		33°50′11″	132°47′46″	20061101 ～ 20070330	523	重要遺跡 確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
たるみしたんじ 樽味四反地14次	集落	弥生時代 古墳時代 ～古代	土坑 溝	弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器	古墳時代から古代の溝の検出
たるみしたんじ 樽味四反地16次	集落	弥生時代 古墳時代 古代～中世	竪穴住居・土坑 竪穴住居・掘立柱建物 掘立柱建物	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、鉄器、臼玉、ガラス玉、管玉	古墳時代中期の竪穴住居に付設されたカマドの検出

要約	樽味四反地遺跡14次調査では、古墳時代から古代にかけての「L」字状に折れ曲がる溝を検出した。溝の形状から、地境あるいは集落を区画するための溝と考えられる。樽味四反地遺跡16次調査からは古墳時代の竪穴住居11棟を検出した。このうち5棟の住居にはカマドが付設されており、当時のカマド形状や規模、構築方法を知る貴重な資料を得ることができた。

松山市文化財調査報告書 第133集

樽味四反地遺跡

－14次・16次調査－

平成18年度国庫補助市内遺跡発掘調査報告書1

平成21年1月31日　発行

編集・発行　松山市教育委員会
〒790-0003　松山市三番町6丁目6番地1
TEL（089）948-6605

財団法人 松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター
〒791-8032　松山市南斎院町乙67番地6
TEL（089）923-6363

印刷　株式会社明朗社
〒791-2112　伊予郡砥部町重光150番地1
TEL（089）958-6868